

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

# 教会学校 教案誌



church school curriculum

主に感謝せよ。主は慈しみ深く  
人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。

詩編107編15節

vol. **62**

2016年7~9月

「子どもと親のカテキズム」  
に基づく二年サイクル 第2年

【巻頭説教】突風を静めるイエスさま ..... 小宮山裕一  
教会・国家・平和・人権（3） ..... 木下裕也  
イスラエルの歴史と信仰（2） ..... 赤石純也

【若者たちとともに（2）】  
失敗に付き合う大人たち ..... 大嶋重徳

【日曜学校・教会学校訪問】岡山教会日曜学校のご紹介

# 2016年7～9月カリキュラム（第62号）

—『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
7月3日	幼児洗礼の恵み	問52	
		創世記17:1～14	創世記17:9
神さまは幼い者をも救いの約束に加えてくださる			
7月10日	聖餐の恵み	問53	
		コリントー11:23～26	コリントー11:26
キリストの十字架の恵みを忘れず、その恵みに生きよう			
7月17日	信仰告白を目指して	問54	ウ小97
		コリントー11:23～29	コリント二13:5
信仰を喜び教会を楽しみとする信仰生活へ			
7月24日	恵みの方法としての祈り	問55	子ども34～38, 47～49, 53, ウ小29, 90, 98
		ルカ11:5～13	ルカ11:13
神さまは頼る者に聖霊を与えて下さる			
7月31日	感謝して歩む	問56	ウ小39、ハイデ86
		ルカ17:11～19	詩107:15
与えられた救いの恵みと感謝をもって応えることの大切さ			
8月7日	感謝の生活の規準	問57	ウ小2, 3、ハイデ86～91
		マタイ7:24～29	ヤコブ1:22
聖書に従い感謝の生活を送ることは堅い土台を据える確かな生き方			
8月14日	平和主日	問91	
		マタイ5:9	マタイ5:9
力ではなく神さまを信じて神さまによる平和を立て上げる			
8月21日	感謝の道しるべ・ 十戒	問58	ウ小39～41、ハイデ92, 93
		申命記4:9～14	申命記4:13
神様の愛の表れである十戒に生きる者となるう			
8月28日	十戒の心・ 神と人を愛する	問59	羊飼29、ウ小40, 41
		マタイ22:34～40	ヨハネー4:11
神の愛を受け神と人を愛して歩む			
9月4日	十戒の心・ 父の愛の戒め	問60, 61	ウ小43, 44、ハイデ94
		使徒5:27～32	出エジプト20:2
十戒に示される神の愛に堅く立つ			
9月11日	第一戒 神のみを神とする	問62, 63	ウ小45～48、ウ大103～106、ハイデ95
		申命記6:1～15	申命記6:4, 5
ただ一人の神さまが私たちを愛して下さっていることを信頼する			
9月18日	第二戒 偶像礼拝とは何か	問64, 65	
		ルカ20:45～21:6	ルカ21:3
目に見えない神さまだからこそ私たちの心を見られる			
9月25日	第三戒 神の御名	問66, 67	ウ小53～56、ウ大111～114
		使徒3:1～10	使徒3:6
主の名を喜んで受け入れる者は主の力を得る			

も く じ

2016年7・8・9月カリキュラム

まえがき	石原 知弘	4
巻頭説教	小宮山裕一	6
日曜学校・教会学校訪問		
岡山教会日曜学校のご紹介	岡山教会日曜学校教師会	11
絵本に心を耕されて		
「いっしょだよ」	望月 鈴子	15
教会・国家・平和・人権		
—とくに若い人々のために (3)	木下 裕也	18
イスラエルの歴史と信仰 (2)	赤石 純也	21
若者たちとともに (2)		
失敗に付き合う大人たち	大嶋 重徳	23
ゼロになる勇氣	保田 広輝	26
全生活にわたる感謝～「十戒」を生きる (6)	吉田 隆	29

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

7月 3日	36
7月10日	42
7月17日	48
7月24日	54
7月31日	60
8月 7日	66
8月14日	72
8月21日	78
8月28日	84
9月 4日	90
9月11日	96
9月18日	102
9月25日	108

2016年10・11・12月カリキュラム	114
2016年度年間カリキュラム	115
救済史に基づく二年サイクル	117
「子どもと親のカテキズム」案内	119
執筆者よりひとこと・あとがき	120

# 子どもたちと向き合う

石原知弘（園田教会牧師）

## 子ども説教

園田教会では朝拝の中で子ども説教をしています。小学生以下の子どもたちが前に出てきて床に座り、私も説教壇の横の段差のところに座って話をします。昨年（2015年）の3月までは礼拝の中で交読していたウェストミンスター小教理問答に合わせて教理の解説という仕方でした。4月からは教案誌の『子どもと親のカテキズム』のカリキュラムに沿ってやはり教理の解説をしていこうと考えていたのですが、ちょうどその時期から小学生よりも幼児たちの数が増えてきました。そのためカテキズムについては教会学校の中高科で学ぶことにし、朝拝の子ども説教の時間は聖書物語の絵本を読んで聞かせ、そこから話をするようにしました。子どもたちの構成や顔ぶれに変化があるので、目の前にいる子どもたちとしっかり向き合って対応していくことの大切さを思わされています。

子ども説教は短い時間ですが、子どもたちの反応がおもしろく、私も楽しんでます。話の本筋とは関係のない絵の隅に書かれている小さな動物を指さして何やら話し始める子、途中から説教壇の周りをぐるぐる回り始める子、最初から最後まで床に横になっている子（夏場はひんやり冷たく、冬場は床暖房が気持ちいいのです）。一緒に前に出て来るお父さんお母さんたちはハラハラドキドキだと思いますが、子どもたち一人一人の個性を感じる時間です。

## オランダの礼拝

オランダの神学大学で学んでいたとき、家族で現地の改革派教会に通っていました。オランダの改革派教会では子どもたちの信仰教育は基

本的に家庭で行うということが前提になっているので、朝拝前の教会学校はありません。教会としては信仰告白の準備の段階からカテキズムのクラスを平日の夜などに持つようになります。しかし近年ではこうした伝統的なあり方に少しずつ変化も生じてきていて、礼拝の説教のときに教会学校のようなことを別室で行う教会が多くなってきているようでした。私たちの通っていた教会でも、説教前に子どもたちは担当の先生たちと別室に移動し、そこで聖書のお話を聞き、絵を書いたり簡単な工作をしたりしていました。説教が終わるとまた礼拝堂に戻ってくるのですが、興味深かったのは、戻って来た子どもたちを一番前の席に座らせて、今日はどんなお話を聞いてきたのか牧師がインタビューするところでした。みんな積極的に手を挙げて答えます。礼拝の中で雰囲気は和らぐ楽しい時間でした。日本では奉仕者や場所の問題もあるので、礼拝と並行しての教会学校は難しいかもしれませんが、朝の教会学校で学んだことを礼拝の中で質問するようなことはできるのではないかと思います。私もいつか取り組んでみたいと思っています。

## 神さまと向き合う

子どもと向き合うことの大切さを思いますが、その根底には何より神さまご自身と向き合うということがなければならぬでしょう。園田教会の子どもたちが、いつもとは少し違った様子でお話を聞いたことがありました。それは、筋ジストロフィーの難病を抱えながら神学校で学ばれている保田広輝兄をお招きし、子ども説教をしてもらったときでした（そのときのお話の内容と写真は教案誌59号に掲載されています）

す)。その日は子どもたちも椅子に座り、小さな子どもたちはお母さんの膝の上に座って、電動車椅子の保田兄としっかり向き合えるようにしました。みんな息を飲むように静かになり、最後までお話をよく聞くことができました。それは、初めて会う車椅子のお兄さんだったからということもあったと思いますが、やはり保田兄が病気の中にあっても神さまご自身としか

り向かい合っているということが伝わったからではないかと思っています。まっすぐに語ってくれた信仰の言葉が、小さな子どもたちにも届いたのでした。

神さまと向き合う原点を忘れることなく、目の前の子どもたち一人ひとりを大切にしていける教会学校と子ども説教でありたいと思っています。



# 突風を静めるイエスさま

ルカによる福音書 8章22節～25節

小宮山裕一（ひたちなか教会牧師）

イエスさまは、あらゆるものを従える力をお持ちのお方です。このお方に信頼して歩むことのすばらしさを聖書から見ていきたいと思えます。

22 ある日のこと、イエスが弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸に渡ろう」と言われたので、船出した。

場面の設定としては、イエスさまが弟子達と船に乗り込んだというところから始まります。イエスさまは、弟子達を伴ってたびたび、船に乗り込みました。マタイ、マルコによる福音書を読みますと、弟子達が船に乗ったという記事が二つあります。一つは、本日のルカによる福音書の並行記事、同じ内容を扱っている記事です。そしてもう一つは、弟子達が夜、湖に行く。そして嵐に遭う。そのとき、イエスさまが湖の上を歩く。そうした物語がございます。ルカの方は、この2つめの記事を省いています。湖の中で嵐に遭う記事は、この箇所だけです。

それでは、ルカは2つめの嵐と船の物語がないのか、というと決してそんなことはありません。実は続編の使徒言行録の、それも大分後ろの方の27章で、パウロが船で嵐に遭う、そうした場面が登場してくるのです。

とにかく、湖と嵐というお話が福音書には何回か登場してくるわけです。しかし、別にこうした出来事の時だけイエスさまと弟子達は船に乗っていたということではなくて、むしろ日常の出来事だったと考えられると思えます。イエスさまの弟子達の中には、元漁師の人びとがい

ましたから、そうした人びとにとって、船に乗ることは決して特別なことではなかったのです。

とにかく、この時もイエスさまは、以前は漁師だった人びとを伴って、船に乗られたのであります。

最初は順調でしたが、しばらくすると突風が吹いてきた。それが、23節です。

23 渡って行くうちに、イエスは眠ってしまわれた。突風が湖に吹き降ろして来て、彼らは水をかぶり、危なくなった。

イエスは眠ってしまわれた。この件については、あとでみます。とりあえず、考えたいのは、後半部分です。突風が湖に吹き降ろしてきて、彼らは水をかぶり、危なくなった。このところ

です。さきほども申し上げたように、ペトロを始め、アンデレやヨハネといった人びとは、元漁師でした。船を操る技術にも長けていましたし、天候や風を読む知恵もあったでしょう。現代でも、嵐の中、船を運航するというのは大変です。ましてや、2000年前の話です。天候には、相当気を遣っていたはずで、命がけなのです。そのような彼らに、嵐が襲ってきた。これはただごとではありません。

そのように考えますと、常識的に考えれば、彼らが嵐に遭う、命の危険を感じるようなそんな嵐に遭うということは、これはあり得ないことです。彼らが、目測を誤った、天気予報を誤った。そのように考えることも、なるほど説得力

があります。しかし、この嵐や大水にも、やはり、意味があるのではないか、メッセージがあるのではないか、と思います。

そこで、少し思い巡らしたいのですが、旧約聖書において、水が人びとを襲う。こうしたことはあったようです。古代エジプトにおいても、ナイル川が氾濫したということがよくありました。つまり、水というのは、人びとにとって、命の源であるのと同時に、命を奪うもの、そうした象徴だったようです。一番有名なものは、出エジプトの時、海が2つに割れたという出来事です。海が2つに割れて、その中をイスラエルの人びとは通ったのですが、そのイスラエルの人びとを追いかけてきたエジプトの人びとを水は飲み込みました。

こうした記事からわかりますように、どうやら水や嵐というものは古代の中東の地域の人びとに滅びや死をもたらすものだったのではないか、と思います。そのあたりの感覚は、島国で生活をして、比較的小さい川しかない日本の私達とは違うかもしれません。そして、興味深いことに、ヨハネの黙示録をみますと、やがて完成する新しい天地には、海がない。これは、命の終わりである死がない、ということだと言えます。

そうした象徴的な意味は確かにありますが、この場面で弟子達が遭遇しているのは、極めて具体的な状況です。まさに、命の危険です。これ以上、風が強くなったら、湖に体ごとなげだされてしまうかもしれない。そうした状況です。

そのような状況で、弟子達はイエスさまが船の中にいるということに気づきます。

24 弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、おぼれそうです」と言った。イエスが起き上がって、風と荒波とをお叱りになると、静まって凧になった。

25 イエスは、「あなたがたの信仰はどこにあるのか」と言われた。弟子たちは恐れ驚

いて、「いったい、この方はどなたなのだろう。命じれば風も波も従うではないか」と互いに言った。

この時の弟子達の心境は定かではありません。船に水がはいってくるので、その水を外に出すことを手伝ってもらうために、イエスさまを起こしたのではないか、と思います。もしくは、もっと漠然とした不安。船が沈みそうだという不安に対して、先生を頼ろうとした、そうした心境だったのでしょうか。とにかく、この時イエスさまは眠っていて、弟子達に起こされた。そして、風と荒波とを叱った。そしたら、静まって凧になった。そのことが言われているわけです。

このところから、わかることが2点ありますので、お伝えしたいと思います。

一つは、イエスさまが風と波を静めたということ。これも、旧約聖書とセットで考えてみたいと思います。

さきほどお話した、出エジプトの出来事のように、自然をコントロールするというお話が旧約聖書にはいくつか登場してきます。モーセが葦の海を2つに割ったというお話。また、モーセの後継者であるヨシュアがヨルダン川を同じく2つに割ったという話。もしくは、これもヨシュアですが、太陽が止まったままになった。エリシャは、エリヤのマントによって川を2つに割いたわけです。そうした話が旧約聖書には登場してきます。

そして、こうした話は、行為を行った人物の力だとは決して言わない。どの場合もそうですが、風や川や太陽を操った人物に力があるというわけではない。その背後にいる神様が、そうした奇跡を成し遂げるのです。

これは、言い方を変えるならば、この世界を造られたお方が、神様である。主なる神様、主ご自身である。そのことのいわば言い換えなんだとおもいます。この世界を造られたからこそ、

海を始めとする自然界を支配することがおできになる。

こうした神様のお働きは、日本人が信じている神様とはまったく異なるものなんですね。たとえば、これは一つの例ですが、スタジオジブリの作品に「千と千尋の神隠し」という映画がございます。そこに、ハク、というさわやかな男の子が出てくる。このハクが、主人公である千尋を助けるのですが、このハクは川の神様で、昔、川におぼれた千尋を助けたことがある。そうした場面がございます。見たことがある方もおられるかもしれません。このハク、川の神様として絵が描かれているのですが、川をコントロールしたりしない。あくまでも、自然の中にいる。内在化している。そうした神観、神様というものに対する見方が日本人にはあります。

ところが、聖書の伝える主なる神様とは、そうした自然の中にお方ではない。自然の外にいる。それが、神様なんです。だから、たとえ海でも、風でも、コントロールすることがおできになる。それは、繰り返しますが、この世界を超えているお方だからなんですね。

そして、大切なことは、今お話ししたようなことが、ユダヤ人の信仰であり、弟子達の信仰なんです。ですから、弟子達は、驚いたんですね。このお方は神ではないか。そうした驚きなんです。25節の最後のところです。

弟子達は恐れ驚いて、「いったい、この方はどなたなのだろう。命じれば風も波も従うではないか」と互いに言った。

このお方はどなたなのだろう。その答えは、さきほどもお話ししたように、9章の20節の神のメシアである。そこにつながるのです。

そして、もう一つ、24節の叱ったというイエスさまの行動にも注目したいと思います。

この叱るという言葉は、イエスさまの怒りの表現ですが、何に対してイエスさまは怒っているのでしょうか。イエスさまが怒っているのは、突風に対してです。それぞれは、人間に対して

襲いかかるアクシデントであることは確かですが、こうしたものは神様と人間を引き離す力。そうしたものに対してイエスさまは怒りを発せられるのです。ただ、困っている人を助けるために、悪霊や熱や風を叱るのではない。そうではなくて、神様から遠ざけようとする力。そうしたものに対して、イエスさまは怒りを発せられるのです。

何に対して怒るのか。これは、その人が何に対して関心を持っているのかということだと思います。愛の反対は無関心であるといえます。だとすれば、怒りは愛の現れともいうべきものです。そこに心がないと怒るということはありません。無関心な事柄に対して、怒りを発することは無いのです。

ですから、イエスさまが怒りをあらわにされる時。それは、人びとが神様から離されようとするときに対して、怒りをあらわにされる。熱でも、風でも、悪霊でも、原因はさまざまですが、人がもし死んでしまったら、それこそ、神様を信じることができない。そうしたものに、イエスさまは怒りをあらわにされるのです。イエスさまは、人びとに神様を信じてほしいと願っている。だからこそ、人びとを神様から引き離そうとする力に対して、イエスさまは怒りを明らかにする。お叱りになるのです。

これも、私達が確認をしておくべき、イエスさまのお姿ではないか、と思います。

このように、風と荒波を静めたイエスさまは、弟子達にこのように投げかけました。

25 イエスは、「あなたがたの信仰はどこにあるのか」と言われた。

どこにあるのか。これは、場所を尋ねる時の言い方です。どこにあるのか。あそこにあります。そうした言い方なんですね。しかし、それが、信仰に対して用いられている。このことは非常に珍しいです。他の福音書を見ますと、弟



子達の信仰が薄いとか、信仰がない、という言い方になっていますが、ルカは信仰がどこにあるのかを問うているわけです。

どこに、というのはやはり地理的などらえ方をしているわけですから、そうした意図をくみ取ると、信仰はどこにあるのか。これは、信仰がどの方向に向かっていているのか。そのような意味ではないか、と思います。信仰がどこにあるのか。信仰はどこに向いているのか。これは、イエスさまに対する、あなた方、弟子達の信仰です。この信仰がどこにあるのか。まるで、どこか遠くに信仰がいつてしまったのではないか。そのように、イエスさまは弟子達をいわばたしなめているのだと思います。

ルカによる福音書では少しわかりにくいのですが、マルコによる福音書を読みますと、このあたりの状況がもう少し、わかると思います。ルカでは、「先生、おぼれそうです」とだけ書いていますが、マルコの方はもう少し、詳しい。マルコでは弟子達はこのように言っています。

マルコによる福音書の4章の38節ですが、ここでは弟子達はこのようにイエスさまに言っています。「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った

先生、私達がおぼれてもかまわないのですか。かまわないのですか、とは関心がないのですか。そうした言い方なんです。これは、非常に微妙な言い方なんです。イエスさまに対するある種の軽蔑を含んでいる言い方なんです。地上では、人々にいい話をして、華々しい活躍をしている。しかし、いざ、海の上で、弟子達が命の危険に遭遇しているときには、何も関心を持たないのか。地上では、いい顔をしているのに、海の上では無力ではないか。そうした言い方なんです。

こうしたイエスさまに対する見方。イメージ。それが、どうやらこの時に弟子達がもっていたイエスさまのイメージなんです。なんといいですか、あくまでも限定的なものとして、イエス

さまをとらえていた。そうしたとらえ方。そのような信仰。それが、弟子達の信仰でした。

イエスさまへの信仰を限定的にとらえるということ。これは、案外あるのかもしれませんが。繰り返しますが、弟子達は信仰がないわけではない。しかし、その信仰が限定的だったのだと思います。

おそらく、弟子達は、船にのって、湖の上に来たとき、ここから先は、俺たちの出番だ。先生には眠っていてもらってもかまわない。そうした思いがあったのでしょうか。弟子達は漁師でしたから、ここは自分の出番だと思っていたのかもしれませんが。そして、疲れたイエスさまが眠っている姿を見て、地上では饒舌にしゃべる先生も、海の上ではなににもできないのだなあと思っていたのかもしれませんが。

そのような弟子達の信仰を見て、イエスさまは嵐を静めた。地上と同じように、海の上でもその御力を豊かに示した後に、あなたの信仰はどこにあるのか、といわれた。弟子達をたしなめたのです。いうなれば、地上に信仰をおいてきたのか。海の上では、イエスではなくて自分達が主役だと思っていなかったのか。こうした高ぶりをイエスさまはたしなめたのだと思います。そのためには、嵐に遭遇するということ、そして嵐を静めるということ、この2つがいれば荒療治として必要だったということでしょう。

この弟子達の信仰を、私達は他人ごとだと考えることはできないでしょう。自分の得意なこと。自分の領域だと思ふことをする時に、神様から離れる。神様のことを忘れる。そうしたことがあるのだと思います。

本日みましたこの物語を、教会はその歴史の中で、この船を教会だと理解してきました。弟子達の集まりが教会ですから、なるほど、この船は教会を表しているといえるでしょう。

こうしたとらえ方はとても良いと思います。船は、港に泊まっているためにあるわけではな

い。あくまでも、大海原を旅するためにあるのです。教会はさながら、神の国という大海原を旅する船です。聖霊は風と表現されますから、船を動かすのは聖霊です。

そして、その船にはさまざまなアクシデントがある。順調な時もあるでしょう。しかし、帆がたえず風に乗っている時だけではない。時に、嵐の時もある。時に、風が全く吹かない時もある。

そうしたアクシデントの時に、私達はこのお方が、船に乗っていることをわすれてはいけま

せん。自然を統べ治める本当の救い主であるお方、イエス・キリストであります。自然すらも従う。その力をもっておられるこのイエスさまが、教会という名の船には乗っておられるのです。だとしたら、私達はこのお方に心からの信頼を寄せたい。陸上だけでなく、海の上でも。このお方に信頼をする。どこにあるのかという信仰ではなく、たえず、ここにいますという告白に生きる。そのような歩みをこれからも続けていきたいと願います。



# 岡山教会日曜学校のご紹介

岡山教会日曜学校教師会

## 1. 岡山教会について

岡山教会は、1970年8月に古口嗣郎先生により伝道が開始されました（四国中会設立20周年記念開拓伝道）。岡山の中心地にあり、交通の便が良い岡山禁酒会館（国の登録有形文化財）を集会所として借り、礼拝を行って来ました。1994年に古口牧師が召天された後、1995年に国方敏治先生が就職され、2000年に退職されました。2年間の無牧期間を経て、2002年春名徹夫先生が就職されました。2003年に集会所より1.5km離れた場所に新会堂・牧師館が完成しました。2009年に春名先生が召天された後、5年間の無牧期間を経て2014年に柏木貴志先生を迎えることができました。現在の現住陪餐会員は27名です。

## 2. 岡山教会の日曜学校について

岡山教会の日曜学校の礼拝は、朝拝終了後、12時頃から30分程度かけて、『成長』を用い、その聖書箇所に従って行っています。前半が礼拝で、後半は分級に分かれて勉強をしています。現在、生徒は契約の子どもたちが主たるメンバーとなっています。子どもたちは、両親と共に朝拝に出席したのち、日曜学校の礼拝に出席します。2015年度の主なメンバーは、中学生1名、小学生2名、幼稚園児3名、幼児1名、計7名でした。このメンバーを中心にいつも礼拝が守られています。2016年4月からはこのメンバーにもう一人赤ちゃんが加えられました。感謝です。

少し過去のことをふり返りますと、2014年までは一人の長老と一人の姉妹が中心となり、日曜学校の奉仕を全面的に担ってくださって

ましたが、2014年以降、生徒の親と青年全員が、日曜学校の教師を分担で担当することとなり、現在、9人の豊かな教師会を形成することがゆるされています。

毎月第一主日の午後に教師会を行い、子どもたちの近況報告や、翌月の分担教師決め、イベント等について話し合う時をもっています。

## 3. 子どもの礼拝

### ①お祈り

毎週、同じ言葉をみんなで声を合わせてお祈りします。聖書のお話がよく分かるようにと心を合わせてお祈りします。

### ②賛美

ひと月毎に異なる曲を賛美しています。LYREの歌や、四国中会のバイブルキャンプで歌った曲などから選んでいます。前年度より関東で日曜学校時代を過ごした姉妹が教師に加わってくださり、曲のレパートリーが増えました。子どもたちの親が伴奏を練習したり、家庭でも口ずさんだりしているためでしょうか、日曜学校以外の時間も子どもたちの口から賛美が聞こえています。

### ③聖書輪読

2014年度から、その日の聖書箇所を大人も交えて輪読するようにしました。幼稚科年長の子ども読んでくれています。

### ④おはなし

『成長』のテキストに従い、担当教師が聖書のお話をします。ときおり子どもたちに質問をしながらお話を進めます。

### ⑤子どもと親のカテキズム

一問ずつ読み進めています。問いを教師が読

み、答えをみんなで声を合わせて唱えています。

#### 4. 分級

##### ①幼稚科

幼稚科は、2015年時点で、3名の幼稚園児（年長2名、3歳児1名）が出席しており、ワークブックの作業を思い思いに、枠にとらわれず（無視して？）楽しんでいます。



##### ②小学科

小学科は、3年生の女の子2人とワークブックをもとに行っています。まとめの文章を音読した後、問題に取り掛かっています。最後に暗唱聖句を唱えるのですが、あっという間に覚えてしまう彼女たちにいつも驚かされています。最後に今週の祈禱課題をもって、ジャンケンをして勝った方がお祈りして、分級を終わりにしています。終わった後は幼稚科に顔を出して工作などを手伝ってくれるいいお姉さんの2人です。

##### ③中学科

中学科は、ウェストミンスター小教理問答を一問ずつ学んでいます。小教理問答の言葉遣いに慣れることに少々苦勞していますが、教えられていること自体は小さい頃から学んできたことですので、教師が驚くほどによく理解し、スイスイと進んでいます。この学びを通して、神様のすばらしさを知る喜びを共に味わっていきたくて願っています。また、やがて自らの口で、神様への信仰を告白する日へと導かれればと願っています。主に委ねつつ。

#### 5. イベント

2015年度のイベントは以下のようなことを行いました。

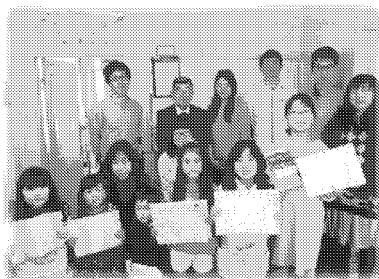
##### 1月 おもちつき大会

新年礼拝後、みんなでおもちつきをしたあと、丸めて食べました。

#### 4月 進級式

暗唱聖句の発表の後、日曜学校の生徒には、賞状とプレゼントが贈られました。

##### 2015年度



##### 2016年度



#### 4月 イースター（サタデーキッズ①）

イースターエッグ探しをした後に、みんなでお菓子を食べました。



## 4月 春のピクニック、BBQ大会

祝日に公園で遊び、BBQをしました。



## 7～8月 夏休み祈祷会

夏休み中の子どもたちへのメッセージと聖書輪読、お祈りをしました。昼食後は、プール、水遊び、お菓子作りで楽しい時間を過ごしました。

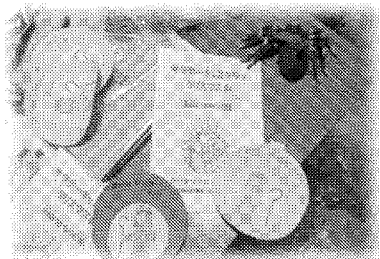
## 8月 花火大会（サタデーキッズ②）

子どもたちへのお話、ゲーム、スライム作り、教会の屋上でBBQをし、ももたろう祭りの花火大会見物。



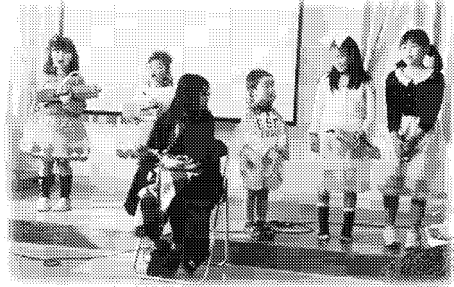
## 12月 クリスマス会（サタデーキッズ③）

子どもたちへのクリスマスのお話、ゲーム、ケーキ作り。



## 12月 クリスマス祝会

暗唱聖句の発表と合奏、小学生のハンドベル演奏、子どもたちへはクリスマスプレゼント。



## ☆6月、12月 敬老の日、クリスマス

教会になかなか来られない高齢者宅を訪問し、写真やメッセージカード、花束を贈りました。

## 6. 感謝と祈祷課題

現在、岡山教会の日曜学校の生徒たちは、全員が契約の子どもたちです。そして、子どもたちの親が日曜学校の教師となり、交代で子どもたちに奨励を行っています。このことは、教会全体にとり、大きな励ましになっています。日曜学校が開催しているジョイフルキッズなどもお友達を誘うよい機会として、子どもたちは大人よりも熱心な“伝道者”として奮闘してくれています。その姿にも、教会は励まされています。

今後の祈祷課題は、今、毎週、教会に来ている子どもたちが、教会につながり続け、その信仰が神さまにますます育まれますようにということです。また、子どもたちが誘い、教会に連れてきてくれたお友だち、教会近隣の子どもたちの心に福音が確かに届きますようにということです。そのために、岡山教会日曜学校の働きが用いられますように、教師たち、教会の祈りを合わせています。

## 7. 日曜学校年間聖句

### 2015年度

「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。」(詩編 133:1)

### 2016年度

「あなたがたこそ、わたしたちの誉れであり、

喜びなのです。」(テサロニケー 2:20)

## 8. 岡山教会日曜学校教師会 (五十音順)

明田真一郎、柏木貴志、小林さち、小林朝光、  
芝直基、芝牧子、田辺隆広、田辺恵美、村山み  
さき、森田詩織



# 「いっしょだよ」

(写真・文／小寺卓矢 アリス館)

望月鈴子 (浜松伝道所信徒)

2011年3月11日の東日本大震災以降、「寄り添って生きる」、あるいは「絆を大切に生きて生きる」ということがよく言われるようになりました。大会・教育委員会発行のリジョイスでも2014年から巻末に「寄り添って生きる」というコラムが執筆者を交代しながら連載されています。執筆者たち自身が、それぞれ置かれたところで重く尊い働きを真剣に担っておられること、信仰に押し出されてその働きをしておられることがよくわかります。

このコラムを読んでいろいろと教えられていますが、「寄り添う」とは「仕える」こととも言えるのではないかと思いました。また「寄り添って生きる」ことが、口で言うほど簡単ではないことも感じさせられています。

福音書にはイエス様が、救いを求める人びとに寄り添われ続けた姿が記されています。また弟子たちの足をイエス様ご自身が洗って、仕える姿の模範をお示しになり、あなたがたも同じようにしなさいとおっしゃいました。(ヨハネ福音書13:12~15)

寄り添うべき人のもとに駆け付けて、必要な助けの手を差し伸べることは大変重要なことだと思います。でも、いつもいつもそれができるわけではありません。では、具体的に駆け付けて行けない人が「寄り添って生きる」とはどう生きることだろうと思いを巡らしました。

人はそれぞれ生きてきた環境も異なるし、置かれている状況も違う。いろいろな事柄の受け留め方も多種多様、十人十色に異なるはずです。喜びを共に喜ぶことは比較的簡単にできるかも



しれません。しかし、自分が経験していないことで「あなたの悲しみ、痛み、苦悩がよくわかる」とはとても言えない。でも、悲しみ、痛み、苦しんでいるその人に想いを寄せ、心を寄せて祈ることはできる。「寄り添って生きる」とは「わたしの心は、苦しみ呻くあなたのすぐそばに共にいるよ、一緒にいるよ、祈っているよ」ということ、関心をもってその人のことを想い続けることではないかと思いました。

今回、ご紹介する写真絵本「いっしょだよ」は、「寄り添う」ことについて考えさせてくれました。おもての表紙には瑞々しい緑の葉っぱにうすく光が射しこみ、カタツムリが一緒にいます。うらの表紙にはそのカタツムリの背中に小さな虫がのっかっています。おもての見開きは深い森の木々の間を雲が流れていき、うらの見開きはまるで悠久の時を生き抜いてきたかのような苔むした木々、その根元あたり一面しっとりとした緑濃い苔が覆っている写真です。映し出されるさまじまの森の姿に詩・ことばが添えられています。

ひろい ひろい もりのなか  
うまれたばかりの きのみ  
ひとりぼっち……なのかな？  
ちがうよ  
いっしょだよ  
おはなは いっしょ  
ふたりで いっしょ  
はっぱは いっしょ  
さんにんで いっしょ  
ちっちゃいのがいっぱい、せまいところで  
ぎゅうっと ひろいところでどーんと も  
りにはわいわいがやがや いっしょが  
いっぱいだ

でも ほんとはね  
みんな だれもが  
ちがうもの どうし  
ひとりの だれかと  
ひとりの だれか  
ひとり ひとりが  
いるから いっしょ ……

この写真絵本は「あなたは だれと いっしょかな？」と問いかけ、いろいろのいっしょの在り方を詩・ことばにします。

はなは いっしょ むしと いっしょ  
たねは いっしょ かぜと いっしょ  
というふう……。写真を見ながら、「いっしょだよ」の言葉を繰り返し読み、「あなたは だれと いっしょかな？」と問いかけられた時、「ああ、わたしにはイエス様が寄り添い、一緒にいるよ」といつも語りかけてくださっていると感じ嬉しくなりました。

「寄り添って生きる」という時、寄り添う相手は誰でしょうか。イエス様を信じている方々は、深い悲しみ、痛み、苦悩の中に生きる人びと、さまざまの障がいや弱さと共に生きる人びと、孤独に生きる人びとに寄り添いたい。いじめや虐待にあっていない子どもたち、子育ての

日々に、あるいは介護の日々に悲鳴を挙げそうな人びと、いろいろなハラスメントにあっている人びとに、独りで頑張らなくていいよ、一緒にいるよと助けの手を差し伸べたいと願っているのではないかと考えています。イエス様が寄り添い、一緒にいてくださる喜びを知っているからだと思います。

私たちの地上の歩みはいつも順境だけではなく、思いがけない逆境、困難に苦しむことがあります。逆境は人の心を閉ざさせ、一人ぼっちの思いにしまいます。でもイエス様は「わたしは、あなたがたをみなしごにしてはおかない」（ヨハネ14:18）と言われます。

神さまは、「わたしはあなたの名を呼ぶ。水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、焼かれず、炎はあなたに燃えつかない」（イザヤ43:1,2）、「わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」（イザヤ46:4）、「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦、苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる」（詩編46:2）と聖書のあちこちで、一緒にいてくださり、力を与え、助けると語られます。

私たちが人びとに「寄り添って生きる」、「仕えて生きる」ことを考える時、私と「共にいてくださり」「担い、背負い、救い出して」くださるこの神さまの言葉を胸に抱きしめて、この神さまに背中を押されて出て行くのだと思いました。

この世界の始まりの時、神さまは「御自分にかたどって人を創造された」（創世記1:27）のですが、「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」（創世記2:18）と助け手をそばに置かれました。最初から人は、人と関わりを持って「いっしょに」「寄り添って生きる」ように造られています。造られた初めの時から孤独でなく、孤立しないように配慮されていたのです。



神さまに「背負われているわたし」たちは、まず「いっしょだよ」とすぐそばにいる夫、妻、家族たちと互いに寄り添い助け合い、仕え合っ  
てって生きていきましょう。そして信仰共同体  
の教会の中でも寄り添い助け合い、仕え合っ  
て生きていきましょう。そこから「わたしはいつ

もあなたと共にいる」と大きな愛で励まし、力  
を下さる主イエス様に送り出されて、「イエス  
様はいつもあなたと一緒にいてくださるよ」と  
語り続け、「寄り添って生きる」「仕えて生きる」  
ことができるといいなど考えています。



# 教会・国家・平和・人権

## —とくに若い人々のために (3)

木下裕也 (名古屋教会牧師)

### 韓国併合

1910年8月、日本と韓国との間に韓国併合条約が結ばれます。これはかたちの上では大韓帝国の皇帝がその統治権を天皇にゆだねることをみずから望み、天皇がこれを受け入れるという体裁をとっています。天皇のほうでも韓国併合の詔書<sup>注1</sup>を出し、その中で韓国を日本の保護のもとに置くことによって朝鮮の人びとの幸福を増進させると述べています。

けれどもこうした平和的な装いとは裏腹に、実際には韓国併合はまぎれもない日本による武力侵略であり、併合というよりは「併呑」(へいどん——のみこむこと)と言うべきものでした。ここに日帝36年と呼ばれる日本の朝鮮植民地支配の歴史が始まり、1945年の敗戦にいたるまで継続されることとなります。

### 武力による支配

日本による朝鮮植民地支配の性格としては、ふたつの面があります。ひとつは軍事力を用いた徹底した弾圧<sup>注2</sup>です。韓国にせよ中国にせよ長い歴史をもち、豊かな民族の文化を生み出してきた国々です。植民地支配はそうした国の人びとから歴史や文化や言葉を一方的なしかたで奪うものです。それが言葉に尽くしがたい苦しみをもたらし、同時に自由と独立をもとめる切なる願いを抱かせずにおかないことは言うまでもありません。朝鮮の人びとも日本の侵略に抵抗して立ち上がりました。こうした願いを軍事力によっておさえつけることなしには、日本は植民地支配をなし得なかったということでしょう。以後朝鮮半島では武断政治と呼ばれる容赦のない武力支配が行われ、抵抗を選ぶ人び

とは逮捕や投獄を覚悟しなければなりません。民衆の生活もますます苦境においやられていきました。

そうした中、世界の歴史に刻まれる大規模な民衆運動が起こります。三・一独立運動です。1919年3月1日、ちょうど韓国皇帝の葬儀のために首都ソウルに集まっていた数千人の人びとが独立宣言文を読み上げ、国旗をかざし、独立万歳を叫びながら市内をデモ行進したのです。独立運動はまたたく間に朝鮮全土にひろがり、参加者200万人、およそ3か月にわたる大運動となりました。祖国を奪われた朝鮮の人びとが自由と独立をもとめてたたかった命がけのたたかいでした。日本政府はこれに容赦のない武力弾圧をくわえたため、犠牲者は膨大な数にのぼりました。

人びとは日本の支配に正面から立ち向かいました。しかも深い思慮のもとに非暴力、無抵抗をつらぬきつつ、運動は展開されたのです。このような民族独立運動は世界にも類を見なかったと言ってよいでしょう。その後アジアの国々で行われることになる民族独立運動にも大きな影響を与え、励ましを与えることとなります。なお、朝鮮の教会とクリスチャンたちはこの運動にあって大きな役割を担いました。

**注1** 天皇の意志を述べる文書。

**注2** 権力をもつ者が人びとを強くおさえつけ、妨害すること。

### 同化政策

日本による朝鮮植民地支配のもうひとつの面は同化政策です。三・一独立運動の直後、天皇

は詔書を出しますが、その中に「一視同仁」という言葉が見られます。朝鮮と日本とをかたよりなく、同じように見るという意味です。表向きは平等思想をうたっているように見えますが、実はこの言葉の中身は朝鮮の人びとを無理やり日本人にしてしまうというものでした。同化政策とは朝鮮の人びとから民族としての誇りを奪い、歴史や文化や言葉を奪い、皇国<sup>注1</sup>の民に仕立て上げるというものです。そのようにして朝鮮の人びとの魂を抜き取り、朝鮮民族の存在そのものを消し去ることをねらいとしていたのです。

「一視同仁」の実体は、戸籍<sup>注2</sup>制度の中にはつきりあらわれています。朝鮮人に与えられた戸籍は朝鮮戸籍と言ひ、内地<sup>注3</sup>の日本人の戸籍とは別のものでした。そして朝鮮戸籍をもつ者は大日本帝国憲法の適用の外に置かれました。つまり日本「臣民」としての権利は与えられていなかったのです。

反面、朝鮮人はこの朝鮮戸籍に縛られていたため、たとえば日本以外の国に移り住むといったことも認められていませんでした。要するに、一視同仁とは朝鮮の人びとを総督府<sup>注4</sup>のきびしい監視のもとに置き、義務だけを強いて権利は認めず、朝鮮の民を奴隷のように見なし、よいように使役するというものであったのです。この後、日本政府はこの朝鮮戸籍制度を利用して、朝鮮人を侵略政策と戦争の遂行のために奉仕させることにもなっていくます。

そのように、日本の朝鮮支配は武断政治と同化政策とが一体となったしかたでなされ、朝鮮の人びとに大きな苦しみと痛みを与えました。自分の国の領土や歴史や文化、自分の話している言葉、さらに命までも理由なしに、不当なしかたで奪われるという状況を想像してみてください。当時の朝鮮の人びとは、まさにそうした境遇にあったのです。

注1 天皇が統治する国

注2 家ごとに家族の名前、年齢、性別、続柄等を記した文書。古い時代の日本に見られた制度ですが、明治維新のおりにふたたびもうけられました。

注3 国の領土のうち植民地として新しく得た土地以外の地。

注4 植民地を統治するためにもうけられた役所。

## 大正デモクラシー

明治の時代には、何はともあれ第一の関心事は国家でした。明治維新という大きな転換点を経験した人びとにとっては、新しい国家をどのように築いていくのかということこそが共通の課題であったのです。

しかし大正の時代になると、あきらかな変化が生じます。アジアにあって西欧の国々にもわたりあっていける強い国をつくるという目的は、ある程度果たされました。日清戦争、日露戦争に勝利し、朝鮮を植民地とし、大正期の日本は一方では帝国主義国家への道をさらに先へと進んでいくこととなります。

他方、明治国家のさまざまなほころびがあらわれてくるということもあり、人びとはようやく個人の意識に目覚め、個人の権利や個人的な幸せをもとめるようになります。そして大正デモクラシーと呼ばれる民主主義運動が起こり、国民一人一人が政治に参加していこうとする機運がたかまっていきました。

国民の一人一人が自分の権利を守り、生活を安定したものとし、幸福を得るためには、自分も政治に参加し、政治をよくしなければなりません。そのために大切なのは選挙権です。けれども大日本帝国憲法のもとでは基本的人権は保障されておらず、国民の自由や権利もおおはばに制限され、選挙権も限られた人びとにしか与えられていませんでした。それゆえ、大正デモクラシー運動はまず普通選挙<sup>注1</sup>権を獲得する運動として始まりました。だれもが政治に参加

できる権利を得ることにより、明治の専制政治<sup>注2</sup>に抵抗し、政党が政治を運営していく仕組みを確立することを目標としたのです。

当時デモクラシーは世界的な風潮でした。そのことも追い風となって、大正デモクラシーはさまざまな民衆運動もまきこんだ大運動となり、1918年には日本最初の政党内閣<sup>注3</sup>を誕生させ、1925年には日本最初の男子普通選挙法<sup>注4</sup>を成立させる等の成果をもたらします。

大正デモクラシーの立役者となったのは、当時東京帝国大学法科大学教授であった吉野作造<sup>注5</sup>です。吉野がとなえた民本主義という学説が、この運動を支えました。大日本帝国憲法の枠の中で、できるかぎり民主主義的な政治のありかたをもとめようとしたもの<sup>注6</sup>で、注目すべき学説です。ただ、この時期にはすでに天皇主権の国家のかたちが固まってしまっていたから、そのありかた自体をくつがえすものとはならなかったのです。

**注1** 身分や性別、教育や財産のちがいによって制限されない選挙。

**注2** 君主や身分の高い支配者が思うままに民を統治する政治のありかた。大日本帝国憲法では、国会は貴族院（皇族、華族、税金を多く納めている者や学者たちから天皇によって任命された議員からなる）と衆議院により構成されており、衆議院に持ち込まれた国民の思いや願いが貴族院によってしりぞけられてしまうことがしばしばでした。貴族院は普通選挙にも反対していました。

**注3** 首相は原敬（はら・たかし）（1856～1921）。

**注4** それまで選挙権は一定額以上の税金を納めている満25歳以上の男子にかぎられていましたが、ここで満25歳以上の男子すべてに選挙権が与えられました。しかしこのときにも女性の選挙権は認められませんでした。

**注5** 1878～1933。東京帝国大学法科大学教授。

**注6** 同じような学説に美濃部達吉（1873～1948、東京帝国大学法科大学教授）の天皇機関説があります。



---

# イスラエルの歴史と信仰 (2)

赤石純也 (伊丹教会牧師)

---

## 2. 救いの原型

アブラハム・イサク・ヤコブのときから時代は下って紀元前1400年代が、出エジプトと40年間の荒れ野の彷徨の時代です。1900年頃ヤコブがエジプトに下ってからモーセに至るまでの時代は、エジプトの時代区分では中王国から新王国にかけての時代。中王国時代はさかんにピラミッドが建てられていた時代です。聖書には「エジプト人はそこで、イスラエルの人々の上に強制労働の監督を置き、重労働を課して虐待した (出エジプト1:11)」とありますが、この重労働は都市の建設だけでなくピラミッド建設も含まれていたかもしれません。「その間イスラエルの人々は労働のゆえにうめき、叫んだ。労働のゆえに助けを求める彼らの叫び声は神に届いた (2:23)」。

こうしてモーセの登場となるわけですが、そのときモーセに対する神の名乗りに注意してください。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である (3:6)」。

前回見たように、アブラハムに対する「地上の諸国民はすべて、あなたの [一人の] 子孫によって祝福を得る (創世記22:18)」という約束をイサクに対して繰り返したときの神の名乗りは「わたしは、あなたの父アブラハムの神である (26:24)」、ヤコブに対して三度目に繰り返したときの神の名乗りは「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である (28:13)」です。それに続くのがモーセに対する「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」という名乗り。その特徴は、いちいち「……の神、……の神、……の神」という言い方で、この少しくどい言い方は、このモーセに対するとき以外には言われたことのない非常に独特な言い方です。こん

なふうに聖書は、紀元前2000年頃のアブラハム三代へのキリスト約束を、1400年頃の出エジプトの出来事につなげています。つまり「地上の諸国民はすべて、あなたの [一人の] 子孫によって祝福を得る」という約束をしてくださった神だという、神の名乗りの頂点がここにあります。だからこそキリストご自身もまた「モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか (マルコ12:26)」と、特にこの個所を引用されたのです。神とはイエス・キリストを約束した神だ、これが神の定義だということが大切です。だからキリストはあえてこの特別な個所に狙いを定めて引用されたのです。

ではそのときの神の名乗り「わたしはある。わたしはあるという者だ」という神の名の意味は何でしょうか。かつては「ありてある者」と訳されていましたが、どちらにしても意味がよくわかりませんね。この言葉は直前の言葉からの続きです。つまり直前でモーセがこんなことを言います。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さなければならないのですか」。それに対する神の答えが「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである」。この「わたしは必ずあなたと共にいる」という言葉を踏まえて、そのあと「いると言ったらいる」と繰り返されたのです。ですから「ありてある者」という意味は、「わたしは必ずあなたと共にいる。いると言ったらいる」という意味です。「わたしはあなたと共にいる。あなたと共にいると

ということがわたしの名前だ」これが神の名乗りです。ですからマタイ福音書の最後のキリストの言葉も「わたしは世の終わりまで、いつもあなたと共にいる」という、まさに神の本質を表す名乗りになったのです。だからマタイはクリスマス物語のときからすでに、インマヌエルという名は「神は我々と共におられる」という意味であると言って、出エジプトのときの「わたしは必ずあなたと共にいる」という神のの本質が、とうとう肉となって現れたのがクリスマスだと言っていたのです。キリストが共にいてくださる、神が共にいてくださるということを感じる時、同時に紀元前1400年にも思いをはせると、神は昔も今も変わらず真実な方だということが実感されるはず。す。

そしてもう一つ、紀元前1400年に学びたいことがあります。この神の名乗りのあと、葦の海の奇跡というクライマックスが来ますが、救いのクライマックスにおいて、「わたしはあなたと共にいる」という神の本質はどのように現れるのでしょうか。

海辺で宿営していたイスラエルが、とうとうエジプト軍に追いつかれてどうにもならなくなってしまったときに、モーセは言います。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい」「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」(14:14)。どうにもならなくなってしまったときに「主があなたたちのために戦われる」ということが「主が共におられる」という意味です。だから「あなたたちは静かにしていなさい」ということになります。「ありてある者」という神の名乗りは、あなたのために「神が戦われる」ということを意味す

るからこそ、「イスラ」(戦われる)「エル」(神が)というのが神の民の名前になるのです。パウロが言うように、今や私たちこそ本当の神の民「イスラ=エル」であるならば、私たちにとって大切なのは、あなたのために神が戦われるから「あなたは静かにしていなさい」ということです。状況がどうにもならなくなってしまったときにこそ「神が戦われるからあなたは静かにしていなさい」という御言葉を思い出したいと思います。そうすれば間違いはないということが実証されたのが紀元前1400年です。

では私たちが試練にあるとき「静かにしている」ことの中身はどうなるのでしょうか。先ほどのモーセの言葉はこうでした。「あなたたちのために行われる主の救いを『見なさい』」。私たちに必要なのは主がなされることを「見る」ことです。だから葦の海の奇跡の締めくくりはこうなっています。「主はこうして、その日、イスラエルをエジプト人の手から救われた。イスラエルはエジプト人が海辺で死んでいるのを『見た』」。さらに繰り返して「イスラエルは、主がエジプト人に行われた大いなる御業を『見た』」。葦の海の奇跡という救いのクライマックスのポイントは、どうにもならなくなったときには静かにして主の御業を「見なさい」と言われ、そしてその通り、最後に主の御業を「見た」ということです。

悩みや苦しみの奴隷の家に閉じ込められてどうにもならなくなってしまったとき、そのあなたのための御言葉が「あなたは静かにしていなさい」であり、主の御業を「見なさい」という御言葉なのです。今あなたを苦しめている暗い力が死ぬさまを、あなたはやがて必ず「見る」ことになるでしょう。

## 失敗に付き合う大人たち

大嶋重徳 (KKG 総主事)

若者が教会にいなくなったと言われて久しい。しかし、彼らに最も関心のある宗教はと問うとキリスト教がトップに来る。昨年私がした調査では、6割強の若者がキリスト教に関心を持っている。それではなぜ、彼らは教会を訪れないのか。

現代の若者は人と人との関係性を重んじる。彼らの多くはチラシやポスターだけによる伝道集会の案内には無関心で、知人の居ない教会を訪れてみようとは考えない。しかし人間関係を重んじる彼らにとって、自分の友人が信じているものには少なからず興味を持っている。この場合、友情が深ければ深いほど、キリスト教に対する抵抗感は無くなる。むしろ親友の大切にしているものに対して、ノンクリスチャンである彼らが注意深い配慮までしてくれるケースも多い。未信者の若者が教会に行く機会となった出来事の上位に来るのは、「教会学校」「親がクリスチャンになったから」「友人に誘われて」である。

大切なことは、クリスチャンの若者が自分の友人を教会に誘おうと思うかどうかである。当然のごとくクリスチャンの若者たちもまた、友人との関係性を大切にしている。しかし、教会に誘った親友が、教会という空間に居心地の悪さを感じ、礼拝中に退屈そうな顔をしているのを見る時、彼らは心を痛める。さらに「教会はもういいや」と親友から断りの言葉を聞いた時、傷つきやすいクリスチャンの若者達は深い失望感を覚える。教会に誘うことが友情を壊すのでは、とその友達を二度と教会に誘うことはしなくなるのである。それでも伝道しようと促された時、けなげに彼らは考える。彼が二度と教会

に来なくても自分達が傷つかない程度の知人だけを誘うようになるのだ。私は彼らがこういうのを聞いたことがある。「大切な友人ほど誘いにくいのが教会だ……」。

先ほど挙げた調査で「キリスト教会に求めるものは何か」という質問を未信者の若者にしたところ、上位に来たのは「自由に使用できる居心地のよい場所の提供」と「若者向けのイベント」だ。彼らはありのままに居られる居場所を求めている。その居場所の判断基準はフィーリングである。「いい感じ」か「やな感じか」は重要な要素なのだ。

これに対して、クリスチャンの若者は「若者に届く説教」「若者を励まし、支えてくれる存在」を教会に求めている。クリスチャンの若者は1回限りのイベントではなく、彼らの抱えている問題に耳を傾け、真剣にキリストを喜び、自分の言葉でキリストを分かち合ってくれる、そんなクリスチャンに会いたいと願っているのだ。

では我々はどのようにクリスチャンの若者と関わればよいのか。聖書は若者の特徴を「きよさ、力強さ、将来性、希望」と記している。若さゆえのきよさ、純粹さは若者の賜物である。しかし一方で聖書は、若者の積極面よりもむしろ若者の「誘惑に負けやすい心」「葛藤」「自分を過信する高慢さ」について多く記している。「若者を歩むべき道の初めに教育せよ。年老いてもそこからそれることがないであろう」(箴言22:6)「同じように、若い人たち、長老に従いなさい。皆互いに謙遜を身に着けなさい。なぜなら、『神は、高慢な者を敵とし、謙遜な者

には恵みをお与えになる』からです」(ペトロ一5:5)そして教会共同体に対して青年期に神を知る教育の必要性と、若者の傍らで若者を育てる存在の必要を命じているのである。幼年期、少年期においては、信仰継承の中心に親が備えられている。しかし青年期には、テモテとパウロの例を見るように、ユニケとロイスの手を離れ、親と違う信仰者、この場合パウロ及び当時の教会共同体のリーダー達にテモテの育成は委ねられていく。バルナバとマルコの関係においても、若いマルコがパウロの宣教旅行の途中で何らかの理由で挫折し、召しを放棄して帰ってしまった時、バルナバはマルコを諦めず、パウロと別れてまでマルコの挫折に付き合った。その後、マルコは再びパウロと共に宣教の業につき、パウロと共に獄中に入れられ、パウロの「役に立つ者」となっていったのである。後にパウロは監督となったテモテに、若者について次のように教えている。「若い男は兄弟と思ひ……諭しなさい」(テモテ一5:1)パウロは若者を自分と同じような兄弟、つまり大人として扱いなさいと勧めているのだ。若者はその途上で大人になるべく信仰を得ていくために、教会の交わりで大人として認められることが必要なのである。

ここで私は「若者」と「教会」に一つの平行関係を聖書に見る。「若者」がさまざまな葛藤と失敗を経て大人として成長していくように、キリストの体なる「教会」もまた終末の完成に至るまで大人になる事はない。この意味で、教会もまた地上では青年期を送っている。もし教会が自らを既に完成した教会であるかのように自己認識しているのであれば、それは自らで何でもやっていけるような若者たちの高慢な態度と全く同じこととなる。しかし教会は、絶えず傍らで深いうめきと忍耐を持って執り成し、かしらなるキリストを指し示し続けてこられた聖霊なる神によって、今日に至るまで成長して行くことができた。教会が如何に罪深くとも、聖

霊は教会を諦めずただキリストを指し示しつづけ、その多様性をも認め、教会の失敗に付き合ってこられた。それ以外に教会がこの歴史に存在する根拠はない。

では若者の側で執り成し、祈り、失敗に付き合い、キリストを指し示しつづけるのは誰か？それは言うまでも無く、説教と聖礼典によりキリストを差し出すことのできるキリストの教会である。そしてかつて若者として青年期を過ごした同じキリストの体に連なる大人たちである。私たち大人が若者の失敗に付き合い、教会の歴史と伝統を乱されるような感覚に陥る時こそ、この時代に教会が教会たらしめるものは何かという一つの問いが与えられる。この問いによって、当たり前だとしてきた教会の物事の中に隠れていた人間的なものが露わにされていく。さらに重要なことは、時代に迎合し決して譲ってはならないキリストの教会の本質を若者たちに膝と膝を突き合わせて語り継いでいく機会となる。教会が若者と共に生きることを選んでいく時、教会は真に健全な聖霊なる教会に導かれる教会となる。若者宣教は私達を健全な自己認識に戻してくれる教会の業なのである。

すでに幾つかの教会は若者に夕礼拝を任せている。そこで彼らは友人を迎え入れることのできる礼拝を作ろうとしている。彼らもまた「礼拝とは何か」ということを真剣に学んでいる。若者が失敗を恐れずに、失敗に付き合ってくれる大人たちの祈りの中で何かを為す時、自分達が高慢であり、祈り支えられなければならない存在である事を知るだろう。そして主体的な信仰が育てられていくのだ。

若者への伝道を考える時、私はサッカーの監督を思い浮かべる。「個」を殺してまでもサインが重視される野球に対し、サッカーの監督はそこまで支配的ではない。パスを出すのにベンチを見るプレーヤーなど居ない。ゲームが始まれば選手一人一人の判断でプレーする。主体的なプレーがそこで求められる。監督は選手たち



がフィールドに出るその時までには、自らの信じる原則を貫きながら、その主体的な判断ができるようにチーム作りをするのだ。

現代における若者には、管理されることを嫌いながら、実は管理されないと方向性が見出せない為、管理される事を彼らが無意識に願っているという側面もある。私達には若者達の主体性を侵さず、過度な干渉は控え、彼らの内部に熟成してくるものを忍耐強く待ち続ける態度が求められる。そして人格的に深く関わり影響を

与えることを心がけるバランスのとり方が求められる。そこには方程式的な明白な正解はなく、試行錯誤しながら現実化していくという課題に取り組んでいかなければならないのだ。ここでは私達もまた失敗の連続であろう。私達キリストの教会は再臨に至るまで完璧である事はないからだ。ただ私達も彼らに私達の失敗を隠さず、ありのまま見せながら、自らの罪を誠実に悔改める大人の信仰者となることが何より若者と生きる教会に求められていることなのである。



# ゼロになる勇気

保田広輝（長丘教会員）

## 【詩編23編1節】

「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。」

羊の性格を調べてみると、第一に、羊は臆病です。群れの中から、はぐれてしまった羊を捕まえようとすると、不安と恐怖心で、逃げてばかりで捕まえられないそうです。第二に、迷いやすい。羊は羊飼いに連れられて毎日行き来している道を自分では行きも帰りもできず、すぐ迷ってしまいます。第三に、頑固です。羊は従順ないっぽう、頑固で、羊飼いに逆らって自分勝手に進んで行き、群れから離れて危険なところに行って自滅するという習性をもっています。

また、イスラエルは4月から10月くらいまで雨が降らないですし、羊は放って置くと、草を根元まで食べてしまうので、そうならないために羊飼いは、羊が草を食べて、水が飲めるコースを、常にあらかじめ決めておく必要があります。さらに羊は、鼻に脂を塗ってやらないと虫がつき、毛を刈ってやらないと重くて動けなくなります。

このように、羊はとても手が掛かるので、いつも世話をする羊飼いが必要なのです。羊は人間そのものの特徴をたとえる家畜として聖書に登場します。羊は存在のすべてを羊飼いに負っています。羊は羊飼いから離れては何もできません。「主は羊飼い」というのは、自分が弱い羊であること、羊飼いである神様がいなくては決して平安に生きられないことを知っている信仰告白です。

また、「わたしには何も欠けることがない」というのは、神様との親しい交わりの中で、豊かに満たされている告白です。神様は良い羊飼いですから、私たち羊はこの信仰告白ができるのです。

でも、「わたしには何も欠けることがない」と思うことはなかなか難しいですね。むしろ、人生の中で「欠け」を感じる人は多いと思います。不足する。乏しさを感じる。何かを失っていく。何かが奪われていく。できることができなくなっていく。そのようなことが人生の中でいくらかでも起こります。人生の最後は自分の命さえも失うことになります。

進行性の不治の難病を抱えている私は、手の指以外は全く動かせない身体で、人工呼吸器で延命していますし、医学的には、今後さらに症状が悪化して、寝たきりになり、残り10年（35歳）で死ぬだろう、と言われていました。

進行性の難病だから、以前は当たり前のようにできていた事ができなくなります。それが死ぬまで繰り返されます。他人から見れば、当たり前前の人生から脱線したように見えてしまうでしょう。でも、本来は人生に当たり前なんて何ひとつないんですよ。

得たものをいつ失うか分からないから、いつまでもしがみつこうとし、悩み苦しんでしまう。他の人はこれを持っていることが当たり前なのに、自分には無いって、無くすことが恐いって思うから、他の人と比べる生き方が続いてしまう。だから、人はゼロになる勇気が必要なのです。

もし得たものを失ったなら、もしできていたことができなくなったなら、確かに苦しみます。でも、失った後なのに、失う前の自分の価値観で物事を考えてしまうから、自分を追い詰めてしまうのです。だから失ったのなら、今まで抱えてきた人生の価値観を降ろし、ゼロになる勇気を持って、新しい価値観で生きていく必要があるのです。

多くの人は幸福とは所有であると思っています。ある人は財産や物をたくさん所有することを願います。ある人は恋人や配偶者ができると幸福になると思います。だから、失うことを恐れます。しかし、本当の幸福は、何かを所有して得られるものではありません。神様と共にいることが本当の幸福なのです。

神様は、私たちに「欠け」を自覚させるために、苦難をお与えになります。それが苦しく大変であることを知っておられても、苦難を通して、私たちが抱えている価値観、習慣、生活環境などをきれいに整理させることで、神様と私たちの関係を妨げているものを取り去ります。そして、それらを全てゼロにして、神様が共いなければ、私たちは何もできないことを悟らせて、私たちの人生を神様に委ねるように、導かれます。

今までの生き方を変えることは難しいですが、クリスチャンはゼロになったとしても、永遠に失われない神様の救い・復活の希望・永遠の生命を信じているし、神様が共にいてくださる、神様が日毎に生まれ変わらせてくださる、という永遠に揺るがない価値観を信じているから、神様の導きによって、ゼロになる勇気を持つことができるのです。

【ヨハネによる福音書10章10,11節】で、主イエス・キリストは「わたしが来たのは、羊が

命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と言われただけでなく、事実そのことを実行してくださいました。

イエス様は、罪の罰を私たちに代わって引き受けるために、私たちに罪と死から救うために、十字架で死んでくださいました。そして、死を打ち破り、三日目に復活されたのです。イエス様が自分の罪のために死なれ、墓に葬られて、三日目に復活されたことを信じる人は、罪が赦されて、死んで復活し、神様と永遠に交わる永遠の命が与えられるのです。

神様は私たちが小さなものとは思っておられません。神様にとって、私たちがどれほど大切な存在であるかは、神様が何よりも大切な独り子であるイエス・キリストを十字架につけるほどに、私たちが愛されたことで分かります。私たちは罪人であるにもかかわらず、神様に選ばれて、イエス様の尊い血潮によって罪ゆるされて、神様の満ちあふれる愛の中に引き寄せられているのです。

#### 【ヨハネの手紙一 4章9,10節】

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」。

そして、私たちには、神様と出会うための礼拝の場が与えられています。礼拝を通して、私たちの救いの根拠であるイエス様の十字架と復活がハッキリと示されます。厳しい社会と苦難の中で絶望し、挫折して、それでも神様から

離れて、自分の力で生きてしまう失敗を繰り返す私たちが、祈り、悔い改め、助けてくださいと叫び、罪の赦しと慰めを受け、神様から新たな力を得て、再び厳しい社会へ出て行けるようにしてくださる礼拝の場が与えられているのです。礼拝から、私たちの人生は意味あるものになっていくのです。

人は弱い羊です。誰にでも「欠け」があります。羊飼いである神様が共におられなければ、決して平安に生きていきません。だからこそ、「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない」と告白できるのだと思います。

### 【コーリー・テン・ブーム】

「世の中に目を向ければ、悩みが増すでしょう。自分の内側をのぞいてみても、落ち込むだけです。しかし、あなたがキリストを見上

げる時、心に安らぎが与えられるのです」

### 【チャック・スミス】

「恵みという言葉の根源の意味は「美」です。聖書における恵みは、『神がその人の真価に関係なく、与えて下さる好意、贈り物』という意味です。恵みとは、私が自分の力では得ることの出来ないものを私にくださることです。恵みとは、私にはその価値がないのに神に受け入れられるということです。」

「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ」(新改訳哀歌 3:22)。パウロは「愛は決して絶えることはありません」とアガペを説明しました。神はあなたが良い時に愛し、悪い時に憎むものではありません。神の愛は不変であり、絶えず注がれ、愛することを止めないのです。



# 全生活にわたる感謝～「十戒」を生きる (6)

吉田 隆 (甲子園伝道所宣教教師・神戸改革派神学校校長)

## 第11課 神の真実に生きる (第九戒)

### 第九戒

「隣人に関して偽証してはならない。」

#### 序

第八戒で私たちは、この世で生きていくために必要な賜物と所有の意義について学びました。しかし、私たちに必要なのは物だけではありません。体（第六戒）や生活（第八戒）が大切なことは言うまでもありませんが、私が私として生きていくための心の支えが人間には必要です。もちろん、究極的には神様に対する信仰が人間を活かすわけですが、そもそも神が人間にお与えくださった名誉ということがあります。それは、創造の冠として造られた人間としての輝きであり、私たち一人一人が前向きに喜ばしく生きていくために必要な自尊心のようなものです。自分を過剰に誇るプライドは罪ですが、最低限、自分自身が真実に扱われることがなければ人間は生きる意味を見失うでしょう。実に、人間と社会における“真実”が守られること、これが第九戒の主眼なのです。

#### 「偽証」ということ

「偽証」という用語からも分かるとおり、第九戒は裁判の場面を想定しています。しかし、正式の法廷でなくとも、日常生活の中で白黒つけなければならない場面は多々あるはずです。この花瓶を壊したのは誰？ 私のお財布がここにあったはずなのに、誰か取らなかった？ 車の接触事故は、どちらの責任？ そのような時に、もし私たちが真実を知っていた場合、どの

ように発言すべきでしょうか。自分が当事者の場合、当事者が身内の場合、当事者が全くの他人の場合、おそらく発言は微妙に異なってくることでしょう。そこに働く心理は何なのでしょうか。そこにある人の罪は何なのでしょうか。そして、あるべき姿とは、何なのでしょうか。

#### ウソの心理

創世記 3:11～13、ヨハネ 8:44、ローマ 1:25、3:4

私たちがウソをつくのは、まず、自分（たち）を守ろうとする時でしょう。私はやっていない、関係ない。そうやって自分の名誉・評判・利益・地位・プライドを守ろうとするのではないのでしょうか。それは、自分自身のためである時も、会社や政党など自分が属する組織のためである場合もあるでしょう。悪質なのは、初めから相手を陥れようと意図的にウソをつく場合です。いずれの場合でも、ウソは基本的に利己主義的な行為です。その結果、相手がどうなるかまで思い量ることはありません。自分の側さえ傷つかなければ、自分さえ守られれば——それがウソの本質でしょう。小さな子どもでさえ、物心つく頃からウソをつきます。そもそも最初の人間からして（全くのウソではなかったにせよ）責任のたらい回しをしたのでした。以来、ウソをつく性質は、人間の本性に刻み込まれているようです。

#### 舌の罪

ヤコブ 3:1～12、ローマ 3:13,14、マタイ 5:22

「舌を制御できる人は一人もいません。舌は、疲れを知らない悪で、死をもたらす毒に満ちて

います」という御言葉どおり、舌の罪は時に「死をもたらし」ことさえあります。身に何の覚えもないことで突然訴えられ拘束され有罪とされる、密告や偽証による冤罪がそれです。舌は小さな器官ですから、自分を守るために、あるいは賄賂や脅しや力によって、容易に真理を曲げることができます。しかし、その一瞬のウソが相手の一生を奪うことさえあるのです。ウソだけではありません。相手を必要以上に持ち上げたり、こき下ろしたりすること。皮肉を言い続けたり、けなし続けたりすること。とりわけ、人格を否定するような言葉による暴力は、著しくその人の自尊心を傷つけます。それは、人から存在価値を奪うのと同様、一種の殺人です。言葉（舌）の罪の恐しさを覚えましょう。

### 人間の不真実と神の真実

マルコ 14:31、55～57、15:11、14:61、15:39  
人間の不真実と神の真実。それら二つが交わる場所、それがイエス・キリストの十字架です。「死んでもあなたを知らないなどとは申しません」と言い張った一番弟子ペトロは、三度も(!) イエスを「知らない」とウソにウソを重ねました。ユダヤの祭司長や最高法院の議員たちは、イエスを死刑にするための偽証集めに躍起になりました。何の悪事もないことを知りながら、群集もまた扇動されて、「十字架につける」と叫び続けたのです。この間、イエスはひたすら沈黙し続けました。そうすればするほど、自分を守ることしか考えていない人間たちの言葉の醜さ、あくどさ、悲しさが際立ちます。真実を知っていながら認めようとしない惨めな人間と、語ったとおりの真実に生きる神の御子のコントラストが鮮やかに示されます。

### 神の真実に生きる

出エジ 23:3,6、ヘブライ 6:18、エフェソ 4:25  
こんな話があります。大恐慌の時代、ある貧しい老人が空腹に耐え切れず店先からパンを盗

んでしまった。老人は捕まり裁判にかけられた。このことは大きく報道され、世論は老人に対する同情論に傾いた。衆人環視の中、判決は大方の予想を覆して有罪。払えるはずもない罰金が科せられた。ところが、冷酷な判決を下した裁判官は、閉廷を宣して壇上から降りるや傍聴席に向かって「この哀れな老人のためにどうか寄付をお願いします」と呼びかけ、自らも多額の寄付を投じた。その額は罰金をはるかに超えて余りあるものであった。神の真実に生きるとは、こういうことです。たとい弱い人や貧しい人をかばうためであっても、真理が曲げられてはならないと聖書は教えます。真理が曲げられる社会では、結局、真実な人間関係もまた育たないからです。神が求める隣人愛は、真実に基づく愛であって、ひいきをすることや単なる馴れ合いなのではありません。私たちはその模範を、何よりキリストにある神の正義と愛に見るのです。十字架に現された神の真実は、決して罪を曖昧にしない神の正義と、どこまでも罪を赦す神の愛の二つです。神の真実に生きるとは、この二つに生きることです。

### 真理は自由にする

マタイ 5:37、ヨハネ 3:21、8:32、14:6、ローマ 12:9、エフェソ 4:15、ジュネーブ 212、ウ大 144、テモテニ 1:8

虚偽にまみれたこの世で真実に生きることは、至難の業です。それでも、神の真実によって救われた私たちは、真理を愛する者として生きたい。なぜなら、真理を愛することは主を愛することにほかならないのですから。

しかし、いつでも本当のことを言うのがよいとも限りません。真理を重んじることとそれを伝達することとは、別のことだからです。「愛によって真理を語り」とあるように、真理を語るには愛が必要です。同じことを語るにも人を辱める語り方もあれば、人を建て上げる語り方もあるはずです。私たちはただ主にあって真理

を愛し、人を高め・愛し・救うために語ることができるよう励みましょう。愛によって語られた真理は、人を苦々しい思いから解放することでしょう。真理は私たちを自由にするからです。

### アーメン（真実）たる者

ローマ 8:16,31、テサニ 3:3、テモテニ 2:13、黙示 3:14

私たちをありのままに受け入れてくださる主イエスの真実な愛は、私たちを神の永遠の刑罰からすでに解放してくださいました。万物を裁くお方が私たちの味方である以上、この世においてもかの世においても、私たちを裁き落とせるものなどありません。

たとい私たちが不真実でも、神は真実です。私たちがこの方を拒まない限り、この方も私たちを拒まれません。かの日には、真理の御霊とともに、私たちのために証しをしてくださるであります。アーメンたる方により頼む者は幸いです！

ディスカッションのために：

1. ウソが及ぼす影響について考えよう。
2. 真実を貫くのが困難なのはどんな時か？
3. 真実な言葉によって築かれる人間関係とは？

## 第12課 完全を求めて（第十戒）

### 第十戒

「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人の者を一切欲してはならない。」

### 「欲してはならない」

創世記 3:6、マタイ 5:28、ヨハネー 2:16、マタイ 15:19、箴言 6:25、サム下 11:2、フィリピ 3:19、エフェソ 5:5

第十戒は、内容的に第七戒や第八戒とよく似ていますが、たんなる繰り返しではありません。この戒めのポイントは「欲してはならない」という言葉にあります。「欲する」と訳された言葉は「むさぼる」と訳すことのできる大変強い欲望や情動をさす言葉です。

蛇に誘惑された女が禁断の実を見ると、それは賢くなるように「唆していた」と訳されている言葉がそれです。何も「実」自身が誘ったわけではありませんが、それに心が奪われることによって彼ら自身の内に起こった「欲する」思いを、このように表現したのでしょうか。最初の人間たちの墮落は、神から与えられている自分たちの境遇に満足できず、欲望にかられて「してはならない」一線を越え出たところにありました。それほどに人の内なる欲は強いのです。それは多くの場合、目から入るものに触発されますが、私たちの心の底から湧き上がって身を焦がし、王の心さえも惑わす力となります。結局のところ、それは欲望を神としていることに他なりません。貪欲とは、偶像崇拜なのです。

### 「隣人の家」

箴言 27:4、30:15,16、コヘ 4:8、ヤコブ 3:16

神によって造られた人間は、神と共にいることによつてのみ真の幸いを得られます。この幸いを失った人間は、自分の中に生じた空虚感や喪失感を埋めようとしますが得られません。神と同様に心を満たせるものなどありえないからです。

自身の内に満足を得られない人間は、「隣人の家」をうらやみます。“隣の芝は青く見える”とは、うまく言ったものです。何であれ他人のものはよく見えます。それさえあれば自分も幸せになれるかのように錯覚するのです。それだけならまだしも、やがてうらやましく思う思いは増大し、他人の幸せを許しがたく感じるねたみに変わることさえあります。自分の祝福を祈っても他人のためには祈らない。自分の喜び

は伝えても、隣人の喜びには耳を閉ざす。ねたみは怒りや憤りにまさる激しい利己愛です。

## 上を向いて

テモテ 6:6～9、ウ大 147、ヘブル 13:5、マタ 6:25～32

他人の幸せと自分の幸せが両立しないように思えるのは、互いに見比べるからです。人間の真の幸せは、自分を見るのでも互いに見比べるのでもなく、上を見ることによってのみ与えられることを覚えましょう。造られた存在にとつて、造ってくださった方に愛される以上の幸せがあるでしょうか。もしそこに幸せを見出すことができるならば、人と比べる必要などありません。

下を向いて生きるのは惨めです。互いを比べて生きるのは殺伐とした社会を生み出します。ただ天を仰ぐことによるのみ、人は満ち足りることを知るはずです。なぜなら、そこには、空の鳥・野の花にまさって私たちを愛して下さる方がおられるからです。

## 十字架から始める

フィリピ 2:6～8、イザヤ 53:2、マタイ 26:15、27:35

それにもかかわらず、私たちは下を向くのです。自分の腹が神となり、すぐに欲望で一杯になるのです。わかっているも他人と比べては落ち込んだり高ぶったりするのです。生まれつき神と自分の隣人を憎む方へと心が傾いている私たちは、どうすれば救われるのでしょうか？どうすれば神を愛し、隣人を愛する生活ができるのでしょうか？

——十字架が、その答えです。

自分の幸せしか求められない私たちのために、すべてを捧げた方がおられます。私たちが天上の幸いにあずかるために、不幸のどん底まで下られた方がおられます。この世の輝きに目がくらむ貪欲さへの裁きの身代わりに、慕うべ

き面影さえも失った方がここにおられます。

それなのに、人はたった銀貨30枚欲しさにこの方を売り渡し、苦しみあえぐ十字架の下でさえ、衣欲しさにくじを引くのです。人間はどこまでも貪欲です。そして、主はそのような人間のためにどこまでも与え尽くされました。

私たちは、この十字架の主を見上げねばなりません。そこから目をそむけてはなりません。そうして、自分は何をすべきかを考えましょう。それでもなお自分の欲を満たすことのみを追い求めるべきなのか、それともこの方のために捧げる生き方へと変わるべきなのかと。

## 神の国と神の義を求めて

ガラテヤ 5:24、ルカ 19:8、ヨハネ 12:3、フィリピ 3:7～9、マタイ 13:44～46、ハイデル 113、詩 19:10、マタイ 6:33、19:27、ローマ 6:16、ガラ 5:16、ヨハネ 2:17

「キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまった」人たちは、イエスと出会った徴税人ザアカイは、お金への執着心が無くなったばかりか、それらを貧しい人々に惜しげもなく与えることを約束しました。最愛のイエス様のために注ぐ香油の値段のことなど、マリアは考えてもみませんでした。キリストを知ることのすばらしさを知ったパウロにとって、輝かしい経歴や業績など今や「塵あくた」も同然です。

天国の価値を見出した者にとって、それにまさる宝など、この世に存在しません。この世の富を求めるかわりに、神を求め、御言葉を求め、神の国と神の義とを求めて主に従うのです。肉の欲に従う奴隷なのではなく、主を慕い求める僕として霊の導きに従って歩むのです。

この世も世の欲も、やがては過ぎ去ります。しかし、神の御心を行う人は永遠の命に生きる者とされるのです。



## 「十戒」を生きる生活

ローマ 7:7,8,12、詩 19:8～15、139:23,24、  
ジュネ 216、ヨハネ 1:8～10、ローマ  
12:1,2、7:15～25、詩 1:1,2

「むさぼるな」と言われなければ自分は「むさぼり」が何であるかさえ知らなかったと、パウロは言っています。神の律法が靈的かつ聖なるものであるが故に、この律法の鏡によって私たちの罪はことごとく暴かれます。

しかし、キリストによって罪赦された私たちは、むしろ自分の心の思いをすべて主に知っていただきましょう。それは依然として汚れだらけの心かもしれません。そもそも、罪がない人などいないのです。それにもかかわらず、主は私たちを愛してくださいました。そうであれば、私たちは主にありのままの自分をひたすらお献げしましょう。そして、このような自分を主の御手の中で変えていただきましょう。

「十戒」に生きる生活とは、この繰り返しにほかなりません。その中で私たちは自分の罪や弱さと正直に向き合うこととなります。しかし、そのような私たちのために死んでよみがえられた主が、共におられます。そこから感謝が湧き

上がります。そこから生きる力と喜びが湧き上がってくるのです。

## 終わりに～完成をめざして

ヘブライ 12:1,2、フィリピ 3:12～16、ハイデ 114, 115

復活の主を見上げて生きる人生は、さらに高いもの、さらにすぐれたものへと私たちを励まします。絡みつく罪をかなぐり捨てて、ひたすら目標に向かって走る人生へと促してやみません。

私たちはこのような歩みをほんのわずから始めたばかりです。とは言え、どんなに小さく遅々たる歩みであっても、それらはすべて御国の完成につながる歩みであることを覚えましょう。

栄光が世々限りなく神にありますように！

ディスカッションのために：

1. なぜ「隣人の家」はよく見えるのか？
2. キリストとの出会いによって人は、なぜどのように変わるのか？
3. キリスト者が十戒を生きることの意味とは？





聖書默想・説教展開例・分級展開例

---

テキスト 創世記 17章1～14節  
子どもと親のカテキズム 問52

### 1. 恵みの契約のもとで

「子どもと親のカテキズム」問52は、幼児洗礼について教えています。

問 信者の子どもたちにも洗礼をさずけるのはどうしてですか。

答 信者の子どもたちも、神さまの恵み深い契約に従って教会の一員だからです。親と教会には、その子が自分の口で信仰を告白するまで導く責任があります。

教派によっては幼児洗礼を認めていないところもあります。その根拠は、幼児はまだ自覚的にキリスへの信仰と服従を言い表すことができないから、とされることが多いでしょう。

しかし、わたしたちは幼児洗礼を認めます。それは恵みの契約の信仰に立つからです。洗礼の恵みは（自分がキリストを告白し得るかどうか、といった）人間の側の主観的な問題にとどまるものではありません。神の主権的な恵みが人間側の条件にはるかに先立つのです。

創世記17章は、神がアブラハムとの間に契約を結ばれたことを記していますが、すでに15章に、神が彼との間に恵みの契約をお立てになったことが記されています。つまり、神は17章で再度契約の締結ということをなさったことになりました。

それは、ここでの契約締結は15章を前提にしているということです。15章6節にこのようがあります。「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」

信仰義認の真理です。聖書は、人は行いによらず、自分の功績によらず、ただキリストの恵みによって救いを得る、キリストを信じる信仰によって義とされるとの真理を教えるのです。契約の締結に際して、神はアブラハムに何の功績もお求めになりませんでした。ただ信仰をお求めになりました。

した。そして彼がご自身を信じたので、彼を義とされたのです。

救いは何らの人間側の条件にもよらず、神の主権的な恵みによって実現し、成就します。わたしたちは予定の信仰に立ちます。神は永遠の昔から、ご自身の民をイエス・キリストにあって救いへと選んでくださった。永遠の次元における選びなのですから、そこに人間の功績や努力が介入する余地はありません。予定の信仰は、神の一方的な恩恵による救いということを保証しているのです。

幼児洗礼こそ、神のこの一方的・主権的恵みということをつたうものなのではないでしょうか。幼児は神の前に何のわざも示すことができず、何の功績も積み上げることができません。しかし主イエスはそのような者をも、御自身の恵みのもとに招いてくださるのです。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである」(マタイ19:14)

### 2. 子どもたちも教会の一員

もうひとつのことがあります。キリスト教信仰は個人の信仰である前に、共同体の信仰であるということです。旧約の選びの民イスラエルも共同体です。新約の教会も「キリストの体」と呼ばれます。先に見たキリストにある選びということにも、教会としての選びという側面があります。洗礼もまた個人としてキリストに接ぎ木されるという面のみならず、教会共同体に加えられるという意味合いを持つのです。

創世記17章において神はアブラハムに、恵みの契約の見えるしるしとしての割礼を彼の子孫たちにほどこすべきことを命じています。この旧約時代における割礼が、新約の教会における幼児洗礼の先駆けとしての意味を持つとされるのです。割礼は生後八日めの幼児にほどこされます。何もわからない幼児が恵みの契約のしるしを刻まれる

のです。神の一方的・主権的・不可抗的恩恵を示すしるしです。

同時に、成人のみならず幼児もまたイスラエルという信仰共同体の一員とされることの証明です。契約の恵みは信仰者のみならず、その子らにも与えられるのです。

新約の教会における幼児洗礼も、この信仰の理解のもとに授けられます。キリストをかしらとする教会共同体にあっては、信者と同様彼らの子どもたちも生まれながらに恵みの契約に入れられています。子どもたちもまた洗礼を受け、教会員(「未陪餐会員」)となるのです。

そして子どもたちにも数々の恵みと特権が与えられます。礼拝の恵み、御言葉に養われる恵み、祈り祈られる恵み。そうした数々の恵みを豊かに受ける中で、子どもたちは教会のふところ、キリストの御手にあってすこやかに育まれていくのです。

親と教会は子どもたちが自分の口をもって信仰を告白する日まで、彼らを教え導く責任を担います。子どもたちを信仰告白に導く。このこともまた、子どもたちと共にキリストの恵みを分かち合い、キリストの命に生かされて生きる喜びを共にする中でなされていくのです。(木下裕也)



テキスト

創世記 17章1～14節

子どもと親のカテキズム 問52

**〔単元のねらい〕**

日曜学校には多くの契約の子どもたちが集っている。彼らに幼児洗礼の意味を教えることには大きな意味があるであろう。教会につらなり、キリストに生かされて生きる幸いを確かめ合いつつ、一人一人を信仰告白に導きたい。大人たちも新しい思いをもって、子どもたちをキリストにあって育む使命を担いたい。

**恵みのしるしのもとに**

今回は幼児洗礼について学びましょう。「子どもと親のカテキズム」問52です。

問 信者の子どもたちにも洗礼をさずけるのはどうしてですか。

答 信者の子どもたちも、神さまの恵み深い契約に従って教会の一員だからです。親と教会には、その子が自分の口で信仰を告白するまで導く責任があります。

皆さんの中には、イエスさまを信じる家庭に生まれた人も多いでしょう。幼児洗礼を受けている人も多いと思います。赤ちゃんの時のことなので、その時のことは覚えていないよ、という答えがきっと返ってくるでしょう。

ところで、こんなふうに思ったことはありませんか。大人の人たちが洗礼を受ける時には、ちゃんと自分の口でイエスさまを信じます、と告白して受ける。それが本当ではないかな。わたしたちはまだ何もわからない赤ちゃんのうちに洗礼を受けられて、それでよかったのかな。

実際、キリスト教の教派の中には幼児洗礼を行わないところもあります。赤ちゃんにはまだイエスさまを信じることの自覚がないという理由からです。

けれどもわたしたちの教会では、幼児洗礼を行っています（行わない教会よりも、行っている教会のほうが多いです）。そして、幼児洗礼を行

うことにはとても大きな意味があります。今日はそのことを確かめてみましょう。

幼児洗礼には、実は根拠があります。それは旧約聖書の時代になされていた割礼という儀式です。

創世記の17章をともに読みました。そこで神さまはアブラハムに命じておられます——あなたの子どもたちに、生まれて八日目に割礼をほどこしなさい。

割礼は、その人が神さまの民、神さまを信じ、神さまの恵みに生かされて生きる人であるということ、目に見えるしかたで示すしるしです。この神さまの恵みのしるしが、生まれて八日目の赤ちゃんにほどこされたのです。

赤ちゃんだから神さまのことはまだわからない、神さまを信じるということもまだわかっていない、だからそのようなことをしても意味はないと思いませんか。けれどもよく覚えておいてほしいのです。神さまの恵みは、わたしたち人間がどうであるのかということにはるかに先立つのです。神さまの恵みは、人間が拒むことのできない圧倒的な恵みなのです。

子どもたちは赤ちゃんのうちは、親が自分どれだけ愛してくれているか、どれほど深い配慮のもとに育ててくれているかがわかりませんね。成長していくにつれて、だんだんそのことがわかってきます。でも、子どもがまだそのことをわから

ないうちから、親の愛は子どもに豊かに注がれています。だから育っていけるのです。

父なる神さまの愛も同じです。皆さんが幼児洗礼を受けている。それは生まれた時から、まだ何もわからない時から、神さまの愛が皆さんに注がれていたということの証しなのです。すばらしいことです。感謝すべきことです。

教会は神さまの家族です。教会につらなって生きる一人一人は、イエスさまの愛に結ばれてひとつです。そして、大人たちだけが教会のメンバーだということではありません。神の家族である教会にあっては、子どもたちもまた生まれた時から教会のメンバーです。

そしてイエスさまは皆さんの一人一人を、教会

のふところですよやかに育んでくださいます。子どもたちは教会にあって数々の恵みを受けます。イエスさまを礼拝する恵み。御言葉に養われる恵み。祈ることの恵み。祈られることの恵み。幼い時からこれらの恵みを受けて育つことができるのは、本当に幸いなことです。

そして幼児洗礼を受けた子どもたちは、その時が来たなら自分の口でイエスさまを信じる信仰を言い表すことへと導かれます。信仰者として独り立ちし、聖餐にあずかり、教会を支え、イエスさまに仕えて生きていくのです。生涯イエスさまの愛を受け、イエスさまの命に生かされることの喜びを分かち合う。イエスさまに育まれてきたことに感謝しつつ、新しい歩みがそこから始まっていくのです。(木下裕也)

---

[今週の暗唱聖句] 創世記 17章9節

だからあなたも、わたしの契約を守りなさい、あなたも後に続く子孫も。

---



**そうせいぎ17:1~8をよみましょう**

1. アブラムがなんさいになったときのできごとですか。

2. しゅはアブラムに、これからはじぶんのことをなんと<sup>な</sup>名のりなさいといいましたか。

3. しゅはアブラムとそのしそんとのあいだに、どのようなやくそくをしましたか。

**そうせいぎ17:9~14をよみましょう**

4. かみさまがアブラムに「まもりなさい」とおっしゃったやくそくは、どんなことですか。

5. このやくそくは、おとこのこがうまれてからなににちめにおこなわなくてはなりませんか。



**創世記17:1～8を読みましょう**

1. 主はアブラムにこれからは自分のことをなんと名乗るようにおっしゃいましたか。
2. 主はアブラハムと後に続く子孫との間にどのような契約を立てられましたか。またその契約の有効期限はいつまでですか。

**創世記17:9～14を読みましょう**

3. 神さまがアブラハムに「守りなさい」と言われた契約はどのようなことですか。
4. この契約はいつ行なわなければならない契約ですか。
5. この契約を守らない人はどうなりますか。
6. 「割礼」は現代私たちの教会で行なっているどの礼典の根拠になるとあなたは考えますか。

テキスト	コリントの信徒への手紙一 11章23～26節
子どもと親のカテキズム	問53
参考教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問96
	ハイデルベルク信仰問答 問79

問53 聖餐（主の晩餐）とは何ですか。

答 イエスさまが命じられたとおりに、パンとぶどうジュース（ぶどう酒）を用いて行われる礼典です。それにより、イエスさまの十字架でさかれた肉と流された血によってなしとげられた救いを覚えます。聖霊によってイエスさまと結び合わされて、罪の赦しと永遠の命の祝福に養われます。神さまの子どもたちといっしょに祝いながら、再び来られるイエスさまを待ち望みます。

### 〈聖書テキストの解説〉

コリントの信徒への手紙一が送られたコリント教会は、倫理的な問題を抱えており、教会は極めて混乱しておりました。使徒パウロは教会のさまざまな課題について指示を与えていますが、その中の一つが主の晩餐（聖餐）についての指示です。11章17節から22節までにコリント教会の聖餐式の現状と問題点が指摘され、本日の箇所である23節から26節に聖餐式がどのようなものとして行われるべきか、伝えられ確認されている事柄を指摘します。更に27節から34節にかけて、具体的に聖餐式をどのように守るべきであるか心がけるべきことが記されております。

特に問題とされているのは「仲間割れがある」（11:18）ことです。具体的な論争や立場の違いがあり仲違いしていたこともあったでしょうが、結果として「各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいる」（11:21）状態になっているのです。この状態に対してパウロは、主の晩餐が単なる勝手な食事ではなく、「主の死を告げ知らせる」（11:26）ものとして伝えられていることを確認しています。

主の晩餐が指し示すキリストの十字架の死は、私たちに対する神の愛の表れであり、和解の証印です。従って、その晩餐に与る者たちは愛をもって和解を実現する事で、その食事の意味を表す必要があるのです。

主の晩餐を通して、信仰者は自分たちの救いの基盤となるキリストの十字架を改めて振り返り、

その十字架の信仰に生きるのです。

### 〈子どもと親のカテキズムの解説〉

ウェストミンスター教理問答は、聖餐を含む礼典を御言葉とともに「あがないの祝福を伝える外的な普通的手段」として位置づけます（ウ小教理問88、大教理問154）。本カテキズムでは、同じ事を「恵みを与える方法」と表現し、礼拝と明確に結び付け、そこにおける聖霊の働きを強調しています。もちろんウェストミンスター教理問答自体も聖礼典と教会の礼拝や聖霊の働きの関係を意識していないわけではありません。そもそも聖礼典が「恵みの方法」として機能するのは、その儀式そのものや用いられる品そのものの力ではなく、信仰において働かれる聖霊なる神さまの力によること、その働きは教会において、特に礼拝において機能する事は大前提です。

礼典は目に見える品を通して、キリストの十字架を「覚える」ものです。覚えるというのは単純に「記憶する」事に留まらず、意識し、実感として新たにすることを意味します。聖霊において私たちはかつて地上におられたキリストと時代も場所も越えて結び合わされ、キリストの十字架の救いを確かな事として再確認し、その確かさをもって私たち自身が信仰において養われるのです。

同時に聖餐は霊によってキリストと結び合わされる働きですから、私たちは聖餐に与る事によって、かえって地上の肉におけるキリストの不在を感じさせられます。聖餐に与る事で私たちは天上

の教会に思いを馳せ、再臨の日の祝宴を待ち望むことになるのです。(黙示録22:17)

### 〈黙想〉

聖餐の機能として、一般にカテキズムが指示するのは、「贖いの適用」であり、キリストの十字架によって、私たちが罪を贖われ、義と認められたことの証印として機能する。このことは当然強調されるべき基本である。

今回の聖書箇所は、その十字架の贖いが、神さまと人との和解に私たちを引き寄せるものであること、それ故に人は、信仰生活において、また礼拝において、和解を実現し、喜びを共有することを目指すよう心がけることが呼びかけられています。信仰が個人の心の持ち方に小さくまとめられてしまうのではなく、私たちの日々の生活の全て、人間関係全てを含んだ、私たちの「在り方」の問題として機能し、実際に私たちの人間関係のあり方を変化させる力として働くことを私たちは忘れるわけにはいきません。

またその働きは、機械や葉のように自動的に作用するのではなく、私たちが「確かめ」「わきまえる」ことを促し求めて、私たちと共に働くものであることを忘れるわけにはいきません。もちろん、これはいわゆる「神人協力」ではなく、私たちの救いは最初から最後まで完全に神さまによって実現されるのですが、その中に私たちの働きが用いられることで、私たちが神の救いを証する器として用いられるのです。

神さまの救いの計画とその実現は決して揺らぐことのない確かなものですが、神さまはその救いの完成への過程に私たち自身が加わることを求めておられます。しかし私たち自身の信仰の確信は揺らぎ易い不確かなものですから、私たちが証し

の進展に能動的に参加し、目に見える形で「恵みを与える方法」を確かめることで、はじめて私たちの信仰は成長することができます。

礼拝や教会、悔い改めや赦し合いを（悪い意味での）責任や義務としてではなく、喜び、励みとして受け取ることができるようにするには、そこに込められ示されている十字架の愛をどれだけ鮮やかに実感するかにかかっているのでしょう。

### 〈子どもたちに対して〉

子どもたちが教会に喜びを感じ、信仰に生きる事を喜びとして目指すことができるようになることを願います。子どもたちにとって礼拝が義務や強制ではなく喜びとなることができるようになること、礼拝に付随する分級の遊びやご褒美の品等が楽しみなのではなく礼拝そのものを祝福として実感することができるようになること、これが信仰を養い育てる教会学校の目標です。

そのためには、御言葉によって信仰の喜びを教えられることと同様に、その喜びを実感させられることが必要でしょう。特に子どもたちは納得していない理屈だけで気持ちを抑えることが苦手です。御言葉が実際の経験とならなければ受入れられないことは大人以上でしょう。

そのような「経験」のために礼典が機能するのですが、子どもたちは多くの場合信仰告白をしておらず、直接聖餐に与ることは許されておりません。聖餐に与ることの喜びを伝えられるように工夫したいです。

聖餐は、やがて来る主の日の祝宴を待ち望む機会です。聖餐の喜びを経験できない子どもたちこそ「主の食卓を待ち望む」思いを最も鮮やかに感じることができるのかもしれませんが。

(長田詠喜)

テキスト  
子どもと親のカテキズム  
参考教理問答

コリントの信徒への手紙一 11章23～26節  
問53  
ウェストミンスター小教理問答 問96  
ハイデルベルク信仰問答 問79

### (単元のねらい)

聖餐式について、それがイエスさまの恵みを私たちに伝える喜びの場であること、信仰を養うために欠かせないものであることを示すと共に、その食卓に与ることを願う思いを養う。

## イエスさまとの食卓

### 教会では聖餐式をしている

今日読んだ聖書のことばを皆さん聞いたことがあるんじゃないかと思います。実は先週の大人の礼拝の中で、今日のこの聖書の箇所が読まれました。覚えていますか？ 牧師先生の説教の前にいつも聖書を読むときではありません。説教の終わった後、月一回しています聖餐式の時です。

今日はこの聖餐式のことをお話しようと思います。教会では時々聖餐式ということをしていきます。子どもの礼拝だけ出ている人は見たことがないかもしれませんが、大体いつも月の最初の日曜日に、礼拝の中で聖餐式ということを行います。小さなパンとぶどうジュースが入ったコップを配って、みんなでそれをいただくんですね。

礼拝でお腹が減ったのであれば、もう少し我慢してお昼を食べれば良いですし、そもそもあんなに小さいパンを食べてもお腹はいっぱいにならないですけれども、どうしてこんなことをするのでしょうか。

実は教会は、その一番最初の頃からこの聖餐式ということをしております。今日の聖書の箇所、パウロがその聖餐式について説明しています。この手紙を受け取っていますコリントの町の教会では、礼拝の時にみんなが勝手に教会で食事をしたり、お酒を飲んだりして、ある人たちはお腹いっぱいになっているのに、他の人たちはお腹をすかしたままであったりしたのだそうです。そこでパウロ先生が、教会に手紙を書き、そもそもこの聖

餐式というのが、どういうものなのかということをお話しているのです。

聖餐式というのは、元々イエスさまが十字架にかかれる前の晩に、弟子たちと最後の食事をした時に決められた儀式です。そこでイエスさまは、そこで食べられるパンが十字架の上で裂かれたイエスさまの体であり、そこで飲まれる杯が十字架の上で流されたイエスさまの血であることを説明し、イエスさまを忘れないように、その救いの十字架を忘れないようにと命じられました。イエスさまが私たちの身代わりになり十字架についてくださった。十字架の上で肉を裂かれ血を流し、私たちの代わりに苦しんでくださって、私たちを罪の呪いから救い出してくださいました。そのことを忘れてしまわないように、教会は聖餐式を行うのです。

### 聖餐式は神さまとの和解の食卓

私たち人間は、元々神さまの恵みの中に生きておりました。ところが、神さまのことを聞かず罪を犯して、神さまと共にいることができなくなってしまいました。せっかく神さまが私たちに沢山の幸いや喜びを用意してくださっているのに、私たちはそれを嫌がって、神さまのことを聞かなくなってしまったのです。

いわば人間は神さまのことを聞かずに神さまと仲違いをしてしまった、喧嘩をしてしまった状態なのです。喧嘩をしてしまったらどうしたら良いでしょう。みんな分かりますよね、ごめんな

さといって謝って、仲直りをすれば良いのです。ところが人間はなかなか神さまに謝ることができませんでした。そこで神さまであるイエスさまが人間として生まれてくださって、私たち人間の代わりに、神さまに謝って、罪の罰を受けてくださいました。そうして、私たちと神さまが仲直りすることができるようにしてくださったのです。

そうやって、神さまに謝っていただいて、仲直りをさせていただいて、神さまと共に食事をする。それが聖餐式なのです。神さまと私たちが仲直りすることができたこと、そのためにイエスさまが血を流し肉を割かれて苦しんでくださったことを決して忘れないようにするのが聖餐式なのです。

ですから私たちは、聖餐式を受ける時に私たち同士も仲直りしていなければなりません。仲良くしていなければなりません。喧嘩をしていたら仲直りして、間違っていたら謝って、困っている人を助けて、持っているものをお互いに分け合って、そのようにして仲直りするのが、イエスさまによって神さまと仲直りさせていただいた私たちなのです。神さまが私たちのためにイエスさまを送り、イエスさまが私たちのために十字架にかかってくださった。そこまでがんばって私たちと仲直りしてくださった、私たちと一緒にの食卓に着くことができるようにしてくださったのですから、私たちは喜んでその食卓に着き、一緒に食卓を囲むイエスさまと、また他の人たちと感謝して喜んでこの食卓を楽しむのです。

## 聖餐式で天国を楽しみに待つ

とは言え、実は子どもたちは聖餐を受けることができません。大人の人でも教会に北ばかりの人は聖餐を受けることができません。聖餐式について、今言いましたようなことをきちんと勉強して、イエスさまを信じることを教会のみんなの前できちんと言ったことができた人、難しい言い方で「信仰告白」をできた人だけが聖餐を受けることができます。ちょっとうらやましく思うかもしれないですね。でも実は大人の人たちもみんな、聖餐を受けることができている人たちもみんなそう思っているのです。

大人の礼拝の聖餐式は牧師先生がパンを分けます。「これはあなたがたのためのわたしの体である」と言います。コリントの教会の人たちにはパウロ先生が「これはあなたがたのためのわたしの体である」と言いました。でも本当は、この言葉はイエスさまがおっしゃる筈のことばです。イエスさまが目の前にいて、神さまと共に食事をして、初めてこの聖餐式は本当に本物として実現するのです。聖餐式は昔々のイエスさまの最後の食卓を思い出すのと同時に、まだ来ていない未来の天国でのイエスさまとの食事を思い浮かべるものです。こうして、今この教会でみんなでパンを食べ、杯から飲むことで、十字架のイエスさまと天国のイエスさまが私たちと一緒にいてくださることを思い出すことができる。そんな楽しい嬉しいときが聖餐式です。ぜひ今度聖餐式の時には、そこで何をしているかしっかりと見てくださればと思います。

(長田詠喜)

---

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙一 11章26節

だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、  
主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

---

コリントのしんとへのてがみ<sup>いち</sup> 11:23~26をよみましょう。

1. わたし（パウロ）が、あなたがた（コリントきょうかいのひとびと）につたえたことは、わたしがだれからうけたものですか。
2. イエスさまがごじぶんのきねんとして、このしよくじをされたのは、いつのことですか。
3. イエスさまは、この「パン」のことを、だれのための「わたしのからだである」といわれましたか。
4. イエスさまは、この「さかずき」はなにによってたてられる「あたらしいけいやくである」といわれましたか。
5. このパンをたべ、このさかずきをのむひとびとは、このしよくじをするたびごとに、しゅがこられるときまで、なにをつけしらせるのですか。

コリントの信徒への手紙一 11:23～26を読みましょう。

1. わたし（パウロ）が、あなたがた（コリント教会の人びと）に伝えたことは、わたしがどなたからうけたものですか。

2. イエスさまが主の晩餐の制定をされたのは、いつのことですか。

3. この箇所で「パン」とは、食事の「パン」以外に何をさしていますか。

4. 25節の「わたしの血によって立てられる新しい契約」とは、なんですか。

5. 主の晩餐にあずかることによって、どんな恵みを与えられるとあなたは考えますか。

テキスト コリントの信徒への手紙一 11章23～29節  
 子どもと親のカテキズム 問54  
 参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問97

問54 だれでも聖餐（主の晩餐）にあずかれますか。

答 いいえ、幼児洗礼を受けていても自分で信仰を告白していない人、また、洗礼を受けていない人は、あずかれません。私たちは、一日も早くその人たちが聖餐（主の晩餐）の祝いにあずかることができるよう祈ります。

### 〈「信仰告白」私たちの究極の祈り、願い〉

信仰告白こそ、親として契約の子に持つ最大の祈りであり願いです（未信者の伴侶の理解をどうしても得られずに、「成人洗礼」を祈り願っていらっしゃる方も少なくないと思います）。それは、子どもの教会の教師と教会にとって究極の祈りでありまた責任です。

しかし今ここで、この当然すぎる前提を、あらためて見つめたいと思います。何故なら、この大前提が本当に、私たちの心の底からの祈りとなっていなければ、家庭や教会における信仰教育が実ることは困難となると思うからです。私たちは、信仰こそ他と比べることができない至宝中の至宝であると信じているのでしょうか。神を第一とする生涯へと子どもたちを自らの生き方、実践を通して招いているかが問われていると思います。

正直に言えば、まさに、親も教師も絶えず、ここでぐらついているのではないのでしょうか。学習塾や部活動、習い事や地域活動……に、主の日を優先させることは、子どもたちの課題であるより、はるかに親の課題です。教師である私たちこそが、日々、恵みの主から「あなたにとって一番大切なことは何か」と問われています。私たちは、主に寄りすがりつつ、「神さまの子どもとして神さまと共に歩むことに比べられる価値はありません。それこそ、人間の光栄、幸い、義務です」と答える者になりたいと思います。

### 〈契約の子中心の子どもの教会〉

地域の子どもたちが多く集う教会は、もはや例外となっているように思います。これについて、

真剣な議論が常になされる必要があるはずですが。しかし今は、それを脇に置きます。契約の子「しか」来ていないこの現実を、契約の子たちに集中して向き合う絶好の時が与えられていると受け止めることは許されるだろうと思います。聖餐について学ぶこの単元は、むしろ、契約の子たちに限定してもよいでしょう。さらに、牧師や長老は、この単元を、普段のプログラムとは別の集会を設け、集中的に子どもたちと向き合う必要があると思います。

### 〈聖餐にあずかれる人〉

問答は、誰でも主の晩餐の祝いに与れるのかと問います。ただちに「いいえ」と答えます。まったく正しい答えです。実は、現代のプロテスタント教会の中には、まさに洗礼を受けていようがないが、その日に礼拝に出席して、その日の言わば「気分」で洗礼を受けたいと思った出席者には、信仰の有無、受洗の有無をまったく問わないで与らせることこそ、本来の聖餐のあり方だと主張するグループがあります。しかも、もはや例外と言えないほど増えつつあります。しかしそれは、教会の自殺行為と言ってよいはずですが。まさに、パウロが警告するとおり、「ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことにな」（コリント一11:27）るからです。教会の霊的ないのちはもちろん、陪餐者にも罪をおかさせてしまうなら、聖餐の礼典が与える祝福の真逆な結果を自ら招来することになります。

### 〈主の燃えるような激しい愛の招き〉

しかし、ここで「いいえ」を教えるとき、注意



したいことがあります。「いいえ」の強調は、この礼典から豊かな恵みを受ける道を示すことにこそあります。イエスさまが肉体をとられ、まことの人間となってくださったのは、私たちのために、身代わりに十字架で死んでくださることによって死を減ぼすためでした。そして何より、その結果、私たちの全存在をご自身の御体に繋ぎ合わせるため（ヨハネ15:1～5参照）です。私たちをご自身とのいのちの交わり、身も心も魂もその全存在をご自身と結び合わせるためでした。つまり、私たちをキリストの体に結び合わせるために洗礼と聖餐の礼典を与えてくださりこれを有効なものとするためです。その意味で、人は誰でも、洗礼を受けるため、聖餐のいのちの食卓を祝うために生れて来た者なのです。聖餐の礼典を教えるときに要となるのは、これをお定めくださった教会の頭、イエス・キリストのこの上ない愛、いのちがけの愛、極みまでの愛の激しさを全面に出すことだろうと思います。

そうするとまさにそこで問われるのは、私たち自身の聖餐の「祝い」方です。人は誰でも、おめでたい席、お祝いの席につらなりたいと思うものです。地上における究極のお祝いは、主日礼拝式であり、その頂点としての聖餐の礼典があります。私たちは、天の祝宴を先取りして、地上においてひとりでも多くの人びとを招き入れ、この食卓をふるまおうと人びとを探し回ってくださる主の恵みを受け、祝福を注がれています。聖餐は本来、この祝福へと招き入れる霊的な力を帯びているのだと思います。私たちの実践が、子どもたちにどのように映っているのか、これは、真剣に考察し、むしろ、彼らの声に耳を傾ける必要があるのではないのでしょうか。そのようにして、契約の子らが主体的に、聖餐の礼典を自分たちの課題とすることができたら、幸いです。

### 〈何故、閉ざされた食卓なのか〉

何故、信仰を告白していない人や洗礼を受けていない人が与れないのかを、恵みとして、肯定的に語る必要があります。この食事会は、この地上にあって神の民をみもとに集め、ご自身の体なる教会として立て上げるために十字架についてくだ

さった主イエスの激しい愛のこだわりがあります。教会は聖なる教会、つまり神の教会です。そして神の民による共同体です。どこまでも、「聖」であることが求められます。そのために、罪に汚れた者たちは、主イエスが流された御血によってすすがれ、きよめられなければなりません。そしてその手段こそ、信仰です。信仰がなくては、これほどみすばらしい食卓はないでしょう。わずかのパンと杯で、空腹は満たされることはありません。しかし、信仰によって聖餐の礼典の意義、祝福を悟るなら、まさに、主イエスが獲得された天上の祝福、霊的祝福のすべては、この食卓の交わりを通して与えていただけるのです。逆に、信仰がなければ主の体なる教会とそのきよさを壊してしまいます。教会の交わりを主体的に建てあげようとの信仰なくして、「聖餐共同体」としての教会は形成されないのです。「いいえ」との強い響きはそのためです。

### 〈聖餐と教会教育（訓練）〉

私たちの神学的伝統は、聖餐の礼典を「教会訓練」として重んじるものです。訓練とはキリスト者が神の民、キリストの弟子として整えられるためのものです。神は教会を通して訓練を施し、神の子たちをご自身とその教会にふさわしく整え、育ててくださいます。その意味で、私どものカテキズム教育の目標とは、聖餐の食卓に招かれた者としてのふさわしさを実現することに尽きると言えるでしょう。そして、契約の子は聖餐を目ざして育てられ、そして、聖餐によって地上にある限り、養い育てられるのです。ですから、聖餐に与るためには、聖餐についての詳細な教理的理解はもちろん神学議論についての知識はまったく必要ありません。むしろ、聖餐の恵みに与ることによってこそまことの訓練が始まり、深められていくのです。

### 〈聖餐適齢期〉

誰も、自覚的な信仰者として出発していただきたいと願うでしょう。しかし、少なくとも高校卒業までには、いわば「自動的」に信仰告白を促し、準備することが必要ではないのでしょうか。

（相馬伸郎）

テキスト コリントの信徒への手紙一 11章23～29節  
子どもと親のカテキズム 問54  
参考教理 ウェストミンスター小教理問答 問97

### 〔単元のねらい〕

契約の子たちに特化して語ります。子どもの教会の礼拝式や分級の営みとは、子どもたちが聖餐の食卓を囲み、これに与るためのいわば準備教育としてなされています。その意味で、子どもの教会には聖餐の礼典は挙行されません。子どもたちには、それほどまでに聖餐の礼典が大切なものであるとは、考えたことがないかもしれません。この単元の特別な重要性に鑑み、小会や宣教師、教師会では、この単元の前後にまさに子どもたちみんなを呼び集め、また、一人一人と膝を突き合わせて、信仰告白を促す集会の開催を検討し、実行するなら実にすばらしい恵みを受けるだろうと思います。

## 聖餐の礼典を目ざそう

先生は、去年の子どもクリスマスの際のことを忘れることができません。この町に住んでいる大勢の小学生たちが集まってくれました。なんと当日にも、チラシを配りに行ってきて、そして、来てくれた子たちもいました。そして何より、楽しいクリスマスになりました。さて、その中でも、こんなことがありました。契約の子の〇〇君が、急に、ほうきの棒を取り出して掃除を始めたのです。もう集会が始まろうとする直前のことです。とても不思議に思っていました。ところがその後で行った子どもの教会の教師会のときに、お父さんからあることを聞いたのです。「〇〇は、大勢の子どもたちが教会に来て、とても嬉しかったようです。そして、彼は、自分が教会の人間、教会側の男の子だということをアピールしたかった、ちょっと自慢したかったからそうしたのだと思います。」先生は、これを聞いて、とても嬉しく思いました。〇〇君のような気持ち、分かりますか。

【教会に通っていることを誇らしく思う仲間の経験と思いを共有する。反対に、隠したいと思っている子たちもいるかもしれない。彼らを励ましたい。子ども伝道は、契約の子たちが教会の子どもであることの誇りや自信、喜びを育むことにもなる】。

先生がチラシを配った時も、「教会って何？」「え、クリスマスをするの、一度行ってみたいと思っていました」「友達を誘ってもいい」とても、嬉しい声を聞きました。皆は、友達を誘っていますか。案外、多くのお友だちは、一度、教会に行ってみようと思っているのかもしれない。

【5年生あたりから、教会のことを自慢しなくなる傾向が強まる。キリスト教は最もメジャーな世界宗教で、キリスト教の家であることは、すばらしいのだと強調することは無意味なことではないと思われる】。

さて、教会は、本当にすばらしいところですよ。どんな学校やクラブとも違います。比べられないほど大切な場所です。何故でしょうか。それは、教会が天国に繋がっている場所、天国の門、神さまの家だからです。聖書の中で、使徒パウロは、「イエスさまの体」だと言っています。イエスさまは、ご自分のことを「まことのぶどうの木」、僕たち私たちのことを「その枝」、「ぶどうの実」だとおっしゃいました。(ローマ7:4、コリント一6:15、10:16、12:27、エフェソ1:23他。ヨハネ15:1～5)

さて、そのようなすばらしい教会と皆はどんな関係にあるのでしょうか。〇〇君は、教会側の人

間なんだぞとちょっと自慢したかったのでしょう。ここに在る皆は、教会では「契約の子」と呼ばれています。神さまから特別に祝福された、選ばれた子どもたちです。契約って何でしょうか。それは、神さまの永遠のご計画の内に、神さまの子どもにしようと定められていたということ、その神さまにしっかりと約束されている子どもということです。ここには赤ちゃんの時に洗礼を受けた子たちも多いです。洗礼を受けていないお友だちもいます。でも、どちらも契約の子です。つまり、「教会員」なのです。先生は、こんなに自慢できることはないと思います。

赤ちゃんの〇〇ちゃんも教会員です。教会員というのは、大人の人のことだけを言うのではありませんからね。ここに在る僕たち私たちは皆、教会員です。ちなみに、先生はいつも「僕たち私たち」って言うでしょう。私たちって、その中にいつでも先生自身を含んでいるのです。確かに、教会にも先生がたくさんいます。でも教会の先生は、教える人ではあるけれど、同じ神さまの子どもで、教会員の仲間です。

【契約の子であることの自覚を深めることが、信仰告白への備えの基本】。

さて、先生たちは、いったい何を楽しみに皆と子どもの教会で礼拝したり、み言葉を学んだり、お祈りしているか知っていますか。その理由を一つにしほれば、ずばり「信仰告白」です。信仰告白したらどうなるのでしょうか。聖餐の礼典に与れるようになります。聖餐の礼典にいっしょに与れたらどんなに嬉しいでしょうか。

イエスさまが何故、この地上にお生まれになられたのか、何のために十字架で死んでくださったのか、何のために、甦ってくださったのかも知っていますね。僕たち私たちを神さまの子どもにするためです。僕たち私たちを、神さまと共に歩ませてくださるためです。そしてそのために、イエスさまは、洗礼や聖餐の礼典を教会に与えてくださったのです。つまり、イエスさまこそ、僕たち

私たちを聖餐の恵みになんとしても、絶対に招きたいと願っていらっしゃるわけです。ということは、僕たち私たちは聖餐の礼典に与るために生れて来たと言ってもいいでしょう。イエスさまは、そのために、皆さんに信仰を告白してほしいと願っておられます。

【子ども説教は、特に、いつでもどこからでも、主イエス、神の愛と恵みを語るべきです】。

今日の暗唱聖句を読みましょう。パウロ先生は、実は、コリントの教会員が、とても弱く、小さな信仰しかもってなくて、何度も罪を犯していることをよく知っていました。ところが、そんな人たちに向かって、「自分のことをよく考えてみてくださいね。それでもイエスさまは、あなたたちと共におられることを知ってくださいね。認めてくださいね」。そう言っています。イエスさまは、ぶどうの木のとえ話のなかで、こうおっしゃいました。「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっているからね」どっちが先に繋がったのでしょうか。もちろん、イエスさまが契約の子の僕たち私たちの方に繋がってくださったのです。

そのことが分かった人、気づいた人は、牧師先生のところに行って、聖餐にあずかれるようお願いしてください。ちゃんと神さまの子どもとして歩めるように導いてくださるでしょう。

カテキズムでは、信仰告白をした人でないと、聖餐に与れないと学びました。決して、軽く考えたり、粗末にはなりません。何故なら、聖餐はイエスさまが命がけて教会に与えてくださったものだからです。どんなに小さく弱い信仰でも、イエスさまを信じている人は、招かれています。この聖餐を受けることによって信仰は、養われるからです。先生が、信仰によって歩めるのは、この聖餐の礼典のおかげなのです。一日も早く、一緒に聖餐の礼典をお祝いしたいです。(相馬伸郎)

---

【今週の暗唱聖句】 コリントの信徒への手紙二 13章5節

「あなたがたは自分自身のことが分からないのですか。

イエス・キリストがあなたがたの内におられることが。」

---

コリントのしんとへのてがみ<sup>いち</sup> 11:23~34をよみましょう

1. ふさわしくないままで「しゅのパンをたべたり、そのさかずきをのんだりする」ものはどうなりますか。
2. パウロはここでみんなに、どうしたうえで、「しゅのパンをたべたり、そのさかずきをのむ」べきだといっていますか。
3. しゅのからだのことをわきまえずにのみくいするものは、じぶんじしんにたいして、なにをのみくいしているのでしょうか。
4. わたしたちが、「しゅのパンをたべたり、そのさかずきをのんだりする」のにふさわしいひととなるには、どうすればよいのでしょうか。



テキスト	ルカによる福音書 11章5～13節
子どもと親のカテキズム	問55
参考教理問答	子どもと親のカテキズム 問34～38、問47～49、53 ウェストミンスター小教理問答 問29, 30, 98 ハイデルベルク信仰問答 問116, 117

問55 恵みを与える方法としての祈りとは何ですか。

答 イエスさまは、祈り求める者に聖霊を与えることを約束されました。

復活のイエスさまは、とくに祈りによって、聖霊において私たちと共にいてくださいます。

ですから、いつでもどこでも祈りながら御国への道を歩んでいきます。

### 〈聖書テキストの解説・黙想〉

私たちには「聖霊(力)」が必要である。祈りは、まず第一に、それを求めるためになされることだということを、心に留めたい。今日一日を生きるために、聖霊(力)の必要性をほんとうに感じているかどうか、自分自身をも振り返ってみたい。そのような意識を持って自分の祈りの言葉を点検してみると、いかに自分の願ひばかりを言い募っているかがわかる。

私たちになぜ聖霊(力)が必要なのか。それは、御言葉によって自分の罪に気づかされ、そこから自分を変えていただく必要があるからである。日毎にこれをしなければ、私たちはいつの間にか、まことの神から離れ、自分が神のようになってしまい、自分の思い通りにならない周りの状況を見て憤り、悩みが強くなってしまう。神の赦しと救いの恵みに与り直して、広々とした心の持ちようをいつも保って生き続けるために、聖霊(力)を求めて祈る必要があるのである。

その必要性に気づけたとしても、ルカによる福音書の今回の箇所を読むと、私たちの聖霊(力)の求め方は、果たして本当に「求めている」といえるかどうか、という気がしてくる。

11:5,6でこの人は何を願っているか。「友よ、パンを三つ貸してください。旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです。」この人は、パンを求めているように見えるが、それは自分のためのパンではないことに注意したい。自分を頼って訪ねてきてくれた友に

応えたいが、自分には今その力または必要なものが足りない。借りてでも今それを得て、自分を訪ねてきてくれた友に応え、友との時間を少しでも豊かに過ごしたいと願って頼んでいるのだ。

パンを貸してくれと頼まれた方の友は、それに対してどう答えたのだろうか。「するとその人は家の中から答えるにちがいない。『面倒をかけないでください……』(11:7)と訳されているので、誤解されているが、実は5から7節までは長い1文で、しかも反語の疑問文になっていることに注意したい。口語訳聖書が原文に近い形で訳しているが、最後に「か」が抜けているので、それを補うと次のようになる。「あなたがたのうちのだれかに、友人があるとして、その人のところへ真夜中に行き、『友よ、パンを三つ貸してください。友だちが旅先からわたしのところに着いたのですが、何も出すものがありませんから』と言った場合、彼は内から、『面倒をかけないでくれ。もう戸は締めてしまったし、子供たちもわたしと一緒に床にはいつているので、いま起きて何もあげるわけにはいかない』と言うであろうか？(いや、言わないだろう)」というのが本来の主イエスの言葉。箴言3:28にも「出直してくれ、明日あげよう、と友に言うな、あなたが今持っているなら」という言葉がある。

8節冒頭の「しかし」は原文にはない。ただ「あなたがたに言う」「しつように頼めば」とあるが、「頼む」という動詞は使われていない。「彼のしつようさのゆえに」。彼のしつようさはどこにある

か。それは、真夜中にもかかわらず、訪ねてきた友をもてなそうとし、そのもてなしをするために、「こちらの別の友ならこんな真夜中でも貸してくれるだろう」と信じて頼みに来ている姿勢に表れていると言える。

それほどまでに私たちは「聖霊」を求めているだろうか。つまり、自分の楽しみや必要のためではなく、自分を頼ってきてくれた友に今、応えるために必要なものとして、求めているだろうか。そもそも真夜中に別の友に助けを求めなければならないような時に訪ねて来るこの友のことを、あなたは思うだろうか。非常識なのだろうか。エレミヤ14:8にこのような言葉がある。「イスラエルの希望、苦難のときの救い主よ。なぜあなたは、この地に身を寄せている人、宿を求める旅人のようになっておられるのか。この友は主なのかもしれない。そういえば、「人の子は思いがけない時に来る」(ルカ12:40)という言葉がある。10人のおとめのたとえでは、花婿は真夜中に到着した。「主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ」(12:38)とも書いてある。真夜中に来る友、主。その主がいつどのようなときに来られても応えることができるように、「聖霊」を与えてください、と祈り願う。

「真夜中」とはいったいいつのことだろう。それは、苦しみのだん底、悩みの真っ暗闇の中、疲れ果ててもう目を覚ましていることがつらい時間、周りは寝静まっていて、自分の苦しみには気づいてもらにくい時だ。そのようなとき、私たちの中にはもう力は残っていない。そういうときに、別の友のところに、「こんな真夜中でもきつと必要なものを与えてくれる」と信じて頼みに行くようなこの人の熱心さ(しつようさ)で、私たちは神に「聖霊(力)」を与えてください、と求めているだろうか。「真夜中」に神に求めているのだ!

それでこのたとえを話した上で、次の有名な言葉が語られる。「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる」(11:9)。「天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」(11:13)。

「聖霊(力)」が与えられると、私たちに何が起こるのだろうか。「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(ヨハネ14:26)。「聖霊(力)」が与えられると、聖書とイエスの語られた言葉とを信じることができるようになるのだ。それによって、私たちは神の赦しと救いの恵みに与り直して、真夜中の暗闇の中ではなく、光の中を、広々とした心で御国への道を歩んでいけるようになる。

### 〈子どもと親のカテキズムの解説〉

「恵みを与える方法」としての祈りを学ぶので、子どもと親のカテキズム問47から読み直しておきたい。

特に御言葉と共に働く聖霊については問49を、聖餐に与るときの聖霊の働きについては問53をよく確認しておきたい。聖霊なる神さまのお働きについては問34~38を参照。

### 〈子どもたちに対して〉

子どもたちが神に祈り願う事柄には、「聖霊(力)」と無縁のものが多くに思うかもしれない。しかし、祈りの内容を具体的に思い出してみ、それが「聖霊(力)」を求めている祈りであることに気づけるように、導いてみよう。「お友だちと仲直りできますように」とか、「最後までできますように守っていてください」とか、「こわい思いをしないように守ってください」とか、「病気が治るようにしてください」などなど、いろいろな願いがあることだろう。そう祈るときに、ふさわしい御言葉が与えられることが望ましい。なかなかそうはいかなくても、そう祈ったあとに、イエスさまと一緒にいてくださるから大丈夫、と思えるように導かれたら、と願う。また、礼拝の中で、「聖書のお話がよくわかるように助けてください」と祈られることがあると思うが、それはまさしく聖霊を求める祈りであることも伝えたい。そして、一人で祈るだけでなく、家族や教会の人と何人かで祈る (赤石めぐみ)

テキスト ルカによる福音書 11章5～13節  
子どもと親のカテキズム 問55

### 〔単元のねらい〕

日々の祈りはなぜ必要なのか。また、教会ではなぜ祈りが欠かせないのか。その大切さに気づいて、日々祈りに向かう心を与えられたい。

当該箇所のとえは、翻訳によって誤解されているが、正しい意味を知り、祈りを聞いてくださる神の恵み深さをしっかりと心に刻みたい。

聖霊の働きを今一度確認し、なぜ聖霊（力）を求める祈りが必要なのか、確認したい。

## 天の父は求める者に聖霊を与えてくださる

みなさんは、神さまにいつも、何を願っていますか。今日読んだ聖書の箇所の最後に、神さまは求める者に聖霊を与えてくださる、とあるのですが、みなさんは「聖霊」をほしい、と思ったことはありますか。「聖霊をください」とお祈りしたことがある人はいますか。

礼拝の中で、「わたしたちの心を開いて聖書のお話がよくわかるように助けてください」とお祈りされているのを聞いた覚えはありますか？わたしたちの心を開くのは、聖霊なる神さまのお働きなので、これが実は、「聖霊をください」というお祈りです。あとほかに、みなさんは、どんなお祈りをするのかな？わたしの場合、子どもの頃、なにか不安なことがある日には、出かける前に母と一緒に祈ってくれて、そのお祈りに「アーメン」と言うと、いつも心が少し軽くなった、という思い出があります。お祈りによって力をいただくことができ、イエスさまと一緒にいてくださるのなら大丈夫、と思えたような気がするので、あれも「聖霊をください」というお祈りだったかもしれません。あとは、悪いことをしてしまったのに、自分でそれに気づけなかったとき、悪い心のまま祈りはじめて、お祈りの中で、だんだん、自分が悪かったことに気づき、ちゃんと「ごめんなさい」と言える心に変えてもらえたことがあります。これも、聖霊なる神さまが、わたしの心を変えてくださったからだと思うのですが、これは、「聖霊

をください」とお祈りする前に、お祈りの中でもう聖霊なる神さまが働いてくださった、というパターンです。

こんなふうに「聖霊をください」という言葉ではないけれど、「聖霊なる神さま、助けてください」という気持ちでお祈りしていることが、皆さんにもいっぱいあると思います。そして、そのお祈りを天の神さまはちゃんと聞いてくださって、聖霊を与えてくださる、と聖書にも書いてありますし、今日学ぶカテキズム問55の答えにも、「イエスさまは、祈り求める者に聖霊を与えることを約束されました」と書いてあります。そのとおりに、心が励まされたり、軽くなったりしたことがあるのではないのでしょうか。

でも、うーんと困ったこと、悲しくて悲しくて仕方がないときや、祈っても絶対ムリと思うようなことになってしまったらどうでしょう。そのときにもみなさんはお祈りできますか。

イエスさまはそういうときにも、「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる」とおっしゃいます。そしてその前に、たとえ話も話してくださいました。

イエスさまは、弟子たちにこうお尋ねになりました。「あなたがたのうちのだれかに友達がいる、真夜中にその人のところに行き、『友よ、パンを三つ貸してください。旅行中の友達がわたしのと



ころに立ち寄ったが、何も出すものがないのです』と言ったら、その人は家の中から『面倒をかけないでください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません』と言うだろうか」と。

みなさんはどうですか。旅行中の友達が訪ねてきてくれたのに、何も出すものがない、となったら、どうしますか。お店が開いている時間なら買いに行けますが、もう夜です。せっかく来てくれたお友達だし、旅をしてきて疲れているから、なんとかしてあげたい……。

ところで、旅行中に訪ねてきたこの友達って、誰のことだと思いますか。これはもしかしたら、イエスさまかもしれません。イエスさまは、「人の子は思いがけない時に来る」とおっしゃったことがありました。『くつやのマルチン』というお話は知っていますか。マルチンの家に来た3人の人がいましたが、「それがわたしだったんだよ」とイエスさまはおっしゃったのでした。イエスさまが来られたら、私たちも大歓迎したいですよ。いつどんな形でかはわかりませんが、イエスさまが訪ねていらっしゃるかもしれない、と思って準備して待っていることは大切です。毎日の生活の中で出会う人一人一人をイエスさまだと思って接することも大切です。でも、思いがけなくて、とっさにどうしよう？ と思ってしまうこともあります。それに、全然元気じゃないときに来られる可能性だってあります。そういうときにも、神さまの子どもとして、今そのときにできるかぎりのことをやってみることができたらいいですね。それができるように、「助けてください、力をください」と神さまに祈ってみましょう。毎日お祈りしていないと、私たちの心はどんどん弱くなって、とっさのときに困ってしまいます。ですから、毎日お祈りして、日々、聖霊（力）をいただいて歩いていきましょう。

さて、このたとえの人は、急に旅行中の友達が来たとき、もう一人の友達のところに頼みに行きました。あのお友達なら、なにか持っていて、こんな時間に行っても頼みを聞いてくれるだろう、と思っていたようです。相手のお友達の方はびっくりしたでしょうね。「こんな時間に？」みなさんなら、どうしますか。「明日にして」って言いますか？聖書には「出直してくれ、明日あげよう、と友に言うな、あなたが今持っているなら」という言葉があります。だから頼まれた方のお友達は、きっと「しょうがないなあ」と思いながらも、「こんな時間に頼みに来るなんて、よっぽどのことなんだろうな。しかも自分が食べたいからじゃなくて、旅の友達のためのものらしいし……」と思って、いろいろ用意してくれただろうと思います。このお友達がそうやって与えてくれたのだから、まして天の神さまは、真夜中だろうと、なんだろうと、私たちの求めにちゃんとこたえてくださいますよ、というたとえです。

一人で心細くなってしまいそうな真夜中でも、みなさんは祈れますか。一人じゃ祈れない、と思ったときには、聖書の今日のお話の直前にも書いてありますけれども、主の祈りを祈ってみましょう。「天にまします我らの父よ」と祈るとき、イエスさまと一緒に「我らの父よ」と言ってくださっていることを思い出しましょう。イエスさまと一緒に祈ってくださるのです。また、「我らの」は教会の人たちと一緒に、という意味でもあります。ですから、真夜中でも全然こわくありません。イエスさまと一緒に、教会の人たちと一緒に祈って、いつも聖霊（力）を補給し直して生きることが、私たちには必要です。それによって私たちは、マルチンのように、いつイエスさまが来られてもよいように、備えて歩むことができます。そして、毎日イエスさまに会っているみたいに過ごすことができます。（赤石めぐみ）

---

[今週の暗唱聖句]      ルカによる福音書 11章13節

このように、あなたがたは悪い者でありながらも、  
自分の子供には良い物を与えることを知っている。  
まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。

---

ルカによるふくいんしょ11:5~13をよみましょう

1. まよなかにパンをかしてほしいとたのんだひとと、たのまれたひとは、どういふかんけいですか。

2. たのんだひとは、なぜまよなかにパンがひつようなのですか。

3. まよなかでもたのまれたひがおきて、たのんだひとにひつようなものをあたえてくれるのは、どうしてですか。

4. たとえ話<sup>ばなし</sup>のあと、イエスさまがでしたちにつよくいわれたことは、どんなことですか。

5. 「もとめる者<sup>もの</sup>」「さがす者<sup>もの</sup>」「もんをたたく者<sup>もの</sup>」はどうなりますか。

6. てんのちちがせいいいをあたえてくださるひとは、どんなひとですか。

**ルカによる福音書11:5~13を読みましょう**

1. 真夜中にパンを貸してくださいと頼んだ人と頼まれた人との関係を述べてください。

2. 頼んだ人は、なぜ真夜中にパンが必要になったのですか。

3. 真夜中でも頼まれた人が起きて、頼んだ人に必要なものを与えてくれるのは、どうしてですか。

4. 9節でイエスさまが弟子たちに「求めなさい」「探しなさい」「門をたたきなさい」とおっしゃっていますが、誰に対して何を「求めなさい」「探しなさい」「門をたたきなさい」とおっしゃっているのですか。

5. 「求める者」「探す者」「門をたたく者」は結果としてどうなりますか。

テキスト	ルカによる福音書 17章11～19節
子どもと親のカテキズム	問56
参考教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問39 ハイデルベルク信仰問答 問86

問56 神さまの子どもとされ、神さまと共に歩む私たちに、神さまが求めておられることは何ですか。  
答 感謝することです。私たちは、感謝のうちに、神さまを愛し、家族や友だちを愛し、神さまの造られたものを大切に、祈りつつ歩むのです。

### 〈子どもと親のカテキズムの解説〉

当問答より、「第三部 感謝しつつ歩む道」に入ります。第三部では、感謝しつつ歩む具体的な方法として、十戒と主の祈りが取り上げられます。当問答は、そのことを要約的に示しています。問1～5は当カテキズムの全体構造を示していました。そのうちの問5が第三部の見通しを示していますので、当問答と問5は内容的に重複しています。全体像を確認するためにあえて重複させていますので、もう一度、全体像を確認する機会としてください。それは、主が私たちの救いの歩みのためにご計画くださったことの大きな枠組みを確認することともなります。

問5と比較して異なっている点は、当問答では「感謝」について強調して言及されていることです。これまで、救われるために信じるべき内容が示され、救われた者の歩みの場である教会のことが教えられていました。そのような素晴らしい恵みを与えられた神の子として、どのように歩んでいくのかということが第三部のテーマです。その歩みを一言で表すのならば、「感謝」ということになります。第一部、第二部を学んだあとですから、神さまが与えてくださっている恵みに思いを向け、「感謝」ということを深く考えやすくなっていることと思います。

救われて神の子とされた者の「感謝」は、「全生活をもって」(ハイデルベルク86) 示すべきものです。それゆえに、主が私たちに求めておられる義務を果たします(ウ小教理39)。その義務は「十戒」に要約されていますので、第三部では十戒を学んでいくこととなります。十戒は、イエス

さまが最も重要な掟と教えられた二つのことにまとめることができます(マルコ12:29～31参照)が、当問答では子どもたちに理解しやすいように①「神さまを愛し」、②「家族や友だちを愛し」と表現しています。さらに、神さまの造られたものは全世界に及んでいるのであり、キリストのご支配はそのすべてに行きわたっているので、「神さまの造られたものを大切に」という言葉も加えられています。

このような感謝の応答の歩みは、「祈り」の実践と切り離して行うことはできません(教会学校教案誌 vol.1.57 問5の解説を参照)。第三部の後半では、祈りの手本としてイエスさまが教えてくださった「主の祈り」が取り上げられます。私たちは「祈りつつ」、全生活をもって「感謝」をあらわして歩むのです。

### 〈聖書テキストの解説〉

#### 【KEY1 聖書本文を語る】

〔STEP1〕 聖書本文を読む。

ルカ17:11～19を繰り返して読む。少なくとも1回は、ゆっくりと音読する。

〔STEP2〕 この個所のテーマは何か？

重い皮膚病を癒された人が、神を賛美し、イエスのもとの感謝を表した(カテキズムのテーマに即しながら読む)。

〔STEP3〕 それをどのように展開しているか？

イエスは、サマリアとガリラヤの間を通られ、10人の重い皮膚病の人に会った。彼らは、離れたところからイエスに憐れみを求めて叫んだ。イエスは、重い皮膚病を判定し、清められた場合

の儀式を行う祭司のところへ体を見せに行くように言われた。彼らはそこへ行く途中で癒され、一人だけが神を賛美しながら戻って来て、イエスにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人だった。イエスは、他に神を賛美するために戻った人がいなかったことを嘆き、彼の信仰を褒めた。

### 【KEY2 神の福音を語る】

〔STEP1〕 この個所で神／イエスはご自身について何を表されたか？

イエスは、憐れみを求める叫びに答えて御業を為してくださるお方。イエスを通して御業をなさる神は、賛美をされるのにふさわしいお方。イエスは、ひれ伏して感謝を表されるべきお方。イエスの前でこそ、神を賛美することはふさわしい。イエスはご自身の前に戻って来て感謝し、賛美した人の信仰を褒められた。

〔STEP2〕 今回の個所の前後では、神について何と言っているか？

17:1～10で、神は、最も小さい者を躓かせず、罪を犯した兄弟を赦し、確かな信仰を持ち、主に忠実な僕として歩むことを求められることが語られている。そのようなイエスの教えの後で、今日の個所があり、主に憐れみを求める者に主が応えてくださり、感謝の応答をすべきことが示されている。それに続けて17:20-37で、キリストの再臨のことが語られ、厳しい裁きについても明らかにされる。主が求められる道筋を外れることなく歩み続けることの大切さに思いを向けさせられる。

〔STEP3〕 聖書全体を通しての神の働きに、この個所はどのように関係しているか？

旧約聖書の歴史は、主の憐れみを求める民の叫びに、主が応えてくださることの繰り返しだった（出エジプト、士師記など）。神の国は、主の憐れみを受けた者たちが、感謝の応答をすることで、主の御心がなされ、主のご支配が実現する場であるとも言える。私たちは、そのような神の国の完成に向かう途上にある。

### 【KEY3 子ども達の信仰と生活のために語る】

〔STEP1〕 この個所を最初に読んだ当時の人びと／登場人物の必要は何だったか？

ほかの9人も、主に憐れみを求めて、癒していただいた。しかし、神を賛美し、イエスに感謝するために戻ってくることはなかった。

〔STEP2〕 私たちの教会の子どもたちに似たような必要があるか？

イエスが自分たちを救ってくださるお方であることを知っているが、その憐れみの大きさに実感がなく、感謝して応答する点で弱い。

〔STEP3〕 この聖書個所の「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

当時のユダヤ人は、サマリア人に対して偏見があり、サマリア人であるこの人は、ユダヤ人であるイエスに癒してもらえるような資格は認めてもらえないと思っていたかもしれない。しかし、イエスは、同じように憐れんで、癒してくださった。自分にはその資格が認められないと思っていたがゆえに、このサマリア人は感謝と賛美にあふれ、イエスへの信仰をも確かにした。

救われる資格のない私たちが憐れみを受けて救われたという喜びが、ふさわしい感謝と賛美の応答へと導く。 (大西良嗣)

テキスト ルカによる福音書 17章11～19節  
子どもと親のカテキズム 問56

### 〔単元のねらい〕

「感謝」とは、儒教的な意味での礼儀正しさを意味しているのではありません。儒教的な意味での「感謝」を語ってしまうと、律法主義的な説教になってしまうことでしょう。主が求めておられるのは、憐れみを受けた喜びによってあふれ出る「感謝」の応答です。救われた喜びの表現と言ってもよいでしょう。

## イエスさま、ありがとう！

イエスさまとお弟子さんたちは、旅をして、ある村の近くにやって来ました。その村は、ユダヤ人たちが住んでいるガリラヤと、サマリア人たちが住んでいるサマリアの境目あたりにあります。

イエスさまたちが、その村に入ろうとされていると、遠くから大声で叫んでいる人たちがいます。「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」。イエスさまが来られたと知って、「憐れんでください」と叫んでいるようです。

けれども、ちっとも、近づいてきません。遠くに離れたまま、「わたしたちを憐れんでください」と叫んでいるのです。

この人たちは、「重い皮膚病」の人たちでした。「重い皮膚病」の人たちは、「汚れた者」とされて、他の人たちに近づいたり、一緒に住んだりすることができませんでした。いつも、「わたしは汚れたものです。汚れたものです」と言いながら歩いて、他の人が間違えて近づかないようにしていなければいけませんでした。家族と離れて暮らさなければならぬ寂しさもあったことでしょう。

ですから、この人たちは、イエスさまに近づくわけにはいかないけれど、必死になって、大声で、「わたしたちを憐れんでください」と叫んでいたのです。

この10人の人たちを見て、イエスさまは、「祭司のところへ行って、体を見せなさい」と言われました。「重い皮膚病」かどうか、あるいは、それが治ったかどうかを判定するのは、祭司の役割でした。イエスさまは、「祭司のところへ行って、

その判定をしてもらいなさい」と言われたのです。祭司がOKと言えれば、彼らは村に戻って、また家族と一緒に暮らすことができます。

10人の人たちは、まだ治ってないけれど、とにかくイエスさまに言われた通り、祭司のところへ向かって出発しました。そして、そこへ向かって行く途中で、彼らの「重い皮膚病」は治ってしまいました。みんな、大喜びだったんだろうと思います。

9人の人たちは、そのまま祭司のところへ大急ぎで向かって行ったことでしょう。ところが、一人だけ、イエスさまのところへ逆戻りしてきた人がいます。もう嬉しくて、大声で神さまのことを賛美しながら戻って来ました。そして、イエスさまの足もとにひれ伏して、「イエスさま、ありがとう！」と感謝をしました。

この人は、サマリア人でした。ユダヤ人は、サマリア人が神さまのことをちゃんと信じていない、神さまのことがわかっていないと思っていました。ユダヤ人は、サマリア人と仲が悪かったのだね。この人は、サマリア人だったので、ユダヤ人であるイエスさまに自分は癒してもらえないかもしれないと思っていたのかもしれないかもしれません。けれども、イエスさまは、そんなことは関係なく、同じように癒してくださいました。この人は、うれしくて、うれしくてたまらなくて、イエスさまのところまで戻って来て、イエスさまにひれ伏して、感謝をしました。

私たちは、誰かにとても良いことをしてもらったら、うれしくなります。とても困っていて、自分ではどうにもならないときに助けてもらったら、何とか感謝の気持ちを表したいと思います。

同じように、神さまが憐れんでくださって、助けてくださった、救ってくださった、そのことがわかると、私たちはどうしようもなく嬉しくてたまらなくなります。イエスさまに感謝したい、神さまに何とか感謝の気持ちを伝えたいと思います。

このサマリア人の人は、そんな気持ちだったのでしょう。

イエスさまは言われます。「いやされた人は、10人ではなかったか。ほかの9人は、どこに行ってしまったのか？ このサマリア人のほかに、神さまを賛美するために戻って来た人はいないのか？」イエスさまも、やっぱり、感謝をしてもらったらうれしいのだね。神さまを賛美してほしいのだね。

イエスさまの救いによって、神さまの子どもに

していただいた私たちに、神さまはどんなふうにするかってほしいと思っているかな？ 最高のプレゼントをしたら、やっぱり、喜んでほしいと思うよね。

私たちは、どんなふうにするか、その喜びを表したらよいかな？感謝を表したらよいかな？

神さまは、こんなふうにしてほしいと、聖書で教えてくださっています。それは、神さまが人間を造る時に願われたように、「神さまを愛し、家族や友だちを愛し、神さまが造られたものを大切に」することです。神さまに祈って、神さまとお話をしながら、神さまと一緒に、そのことを行っていくことです。なぜなら、それが、人間にとって、最もよい歩み方だからです。そのように歩むのが一番幸せであるように、神さまは人間を造られたからです。私たちを愛してくださるからこそ、一番幸せな生き方を取りもどしてほしいと願われるのですね。

神さまも喜んでくださるように、私たちも感謝を表していきましょう。 (大西良嗣)

---

[今週の暗唱聖句]

詩編 107編15節

主に感謝せよ。主は慈しみ深く  
人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。

---

**ルカによるふくいんしょ17:11~19をよみましょう**

1. あるむらにはいったとき、イエスさまをでむかえたひとたちはなんにんで、どんなひとたちでしたか。
2. そのひとたちは、イエスさまになにをしてほしかったのですか。
3. イエスさまはそのひとたちになんといわれましたか。
4. そのひとたちはイエスさまのおことばに、したがいましたか。そのけっか、どうになりましたか。
5. じぶんがいやされたのをしって、おおごえでさんびしながらもどってきたのは、なんにんでしたか。
6. もどってきたひとは、イエスさまになにをしましたか。
7. イエスさまはもどってきたひとになんといわれましたか。
8. あなたは、どんなときに、どんなことに、かみさまにかんしゃしますか。



**ルカによる福音書17：11～19を読みましょう**

1. ある村でイエスさまを出迎えた重い皮膚病を患っている人たちは、何人でしたか。
2. 彼らはなぜ遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて助けを求めたとあなたは考えますか。
3. 彼らはイエスさまになにを求めましたか。
4. 彼らの求めに対してイエスさまは何と言われましたか。
5. その人たちはイエスさまのおっしゃったことに従いましたか。その結果、どうになりましたか。
6. 戻ってきた人の人数は何人なんにんですか。また何人なにじんでしたか。
7. 戻ってきた人はイエスさまに何をしましたか。
8. イエスさまは戻ってきた人になんと言われましたか。
9. あなたが日常生活で神さまに感謝しているのはどのようなことですか。

テキスト

子どもと親のカテキズム

参考教理問答

マタイによる福音書 7章24～29節

問57

ウェストミンスター小教理問答 問2, 3

ハイデルベルグ信仰問答 問86～91

問57 では、感謝のうちに、愛し、祈りつつ歩む道を、どのように知ることができますか。

答 聖書を通してです。

### 〈子どもと親のカテキズムの解説〉

子どもと親のカテキズム57問は、救われた者が感謝の応答として、神にある生き方へ、すなわち十戒を守ることへ導入する部分となる。ウェストミンスター小教理では39問から始まる、人間の義務（道徳律法を守る）の部分への導入ということになるであろう。子どもカテキズムの場合、「感謝のうちに、愛し、祈りつつ歩む道」を知る方法を、大きく「聖書」としている。十戒に限定せず、聖書の律法、さまざまな物語、箴言、主イエスの山上の説教、更には使徒達の信仰の勧めの全てを包括的に捉えるような書き方となっている。子どもには「聖書」と教えた方が分かり易いであろう。改革派教会で用いられて来た信仰告白としては、ハイデルベルグ信仰告白の86-91問が「全生活にわたる感謝」と題して、救いと恵みに対する感謝の応答と神への賛美としての善い業、不服従な者の不幸、まことの悔い改めにおける古い人の死滅と新しい人の復活、そして新しい人の復活と共に神の律法への喜ばしき服従についてまとめて記されている。

今日の57問は「どのように知るか」が問いなので、答えは「聖書」となる。すると、ウェストミンスター小教理問答の問2「どうしたら神の栄光をたたえ、永遠に神を喜ぶことができるかについて、神は……どのような規範を与えられましたか。答：旧新約聖書……は、……私たちを教え導く唯一の規範です。」が最も近い内容となる。

### 〈序〉

私達は、神の御子、イエス・キリストの十字架の犠牲と、御子の命による贖いによって、全ての罪が赦され、神に買い取られただけでなく、神の

子とされた。神の子とされたことの感謝の応答は、神さまに（主イエスに）従って生きることである。

マタイ7:24～27がまとめる山上の説教で、主イエスは、どのように生きていったらよいか、真の神の御心をお教えになった。律法を廃棄するためではなく、成就するために来られ（マタイ5:17）、律法の本質は神と人への愛であると教えられた。そして、神が私達に求められているのは、御言葉と御霊によって心が新たに換えられて、神の助けと導きを祈りつつ、神と人を愛し、神さまに感謝しつつ歩むことであると教えておられる。教えの背後には、福音において私達を赦し、救うという愛と善に満ちた御心があるのである。

神が求められる、感謝の応答としての神への従順と戒めの遵守は、神と人への愛に裏付けられた生き方でもある。そして、神の御心を行い生きることが、ひいては私達の幸福でもある。

イエス・キリストを「主」と呼ぶならば、その「主人」の話しを聞き、それに従うはずである。そうでないと「主」としていることにはならない。

### 〈聖書テキストの解説〉

今日の聖書箇所は24節の「そこで」という接続詞によって、マタイ5章から始まった山上の説教全体を受けている。「わたしのこれらの言葉」は、主イエスの山上の説教全体を指している。「…言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。」というところから、主イエスの言葉を聞くことと、それを行うことが必然的であることが分かる。ここでは、24節の「岩の上に自分の家を建てた賢い人」と、26節の「砂の上に家を建てた愚かな人」が比較されている。「主イエスの言葉（聖書の言葉）を聞いて行う者」

は「岩の上に家を建てた賢い人」(24節)にたとえられており、「主イエスの言葉(聖書の言葉)を聞くだけで行わない者」は「砂の上に家を建てた愚かな人」(26節)にたとえられている。「家を建てる」とは人生を築くこと、生きること、人生の歩みそのものを指すと言える。

「岩」が何を指すかが注解書によってさまざまであり、難しいところである。見解は3つある。  
①「岩」を「主イエス・キリスト」と考えるもの。  
②「岩」を「言葉を聞いて行う、行為」と考えるもの。  
③「岩」を「主イエスの言葉」と考えるものである。

①の場合、コリント一10章4節にあるように、キリストは「岩」であると解釈する。ルカ6章48節に記されているように「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置く」という描写が具体的で分かりやすいであろう。この場合、自分自身を信仰的に深めてキリストと深く結びついて、家を建てることを指すことになる。何メートルも深くまで地面を深く掘り下げて現れる、堅くて不動の岩。そのような岩の上に自分の人生を建てるのであれば家は倒れないのである。

②の「言葉を聞いて行う、行為」と解釈すると、信仰を深め、主の教えに従順に従うことが、習慣的なものとなるに至ることを指す。即ち、私達の思惟、感情、言葉、行動、気質、生き方の傾向が、新しくキリストに倣うものと変えられ、それが岩のようになることになるのであろうか。

③の、「主イエスの言葉」と解釈するなら、聖書の御言葉、主イエスの語られた山上の説教の基準を生きる指針にして生きることを指すことになる。どれも真理を突いていて、捨てがたいが、③の「岩」を「これらの言葉(主イエスの言葉＝聖書の御言葉)」と理解するのがよいかもしいない。「主イエスの言葉」と理解すると「これらの言葉」とは、山上の説教を指す。又、大きな捉え方で、神に従った生き方を教える聖書の御言葉とも理解できる。

25節の「雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲う」とは、人生のさまざまな試練と苦難、苦境だけではなく、終末における神の裁きが行われる事と理解されている。

## 〈黙想〉

御言葉にも「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である(ルカ11:28)」とある。神さまの御言葉に従いそれを守ろうとして、一歩踏み出し、神と人を愛する歩みを少しでも行う努力をしていく時に、私達は幸せを感じるものである。また、主イエスも「だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である(マタイ12:50)」と語っておられる。私達は主イエスを「主」と呼んでいるのであるから、本気でこの主の言われることを信じ、始めるべきなのだ。

主イエス・キリストだけが父なる神さまへの唯一の道である。このキリストに従う者だけに、キリストは永遠の救い、永遠に持ちこたえる家の創始者となられる。岩の上に家を建てるという作業は注意を要し、苦勞を伴う。キリストにある召命と選びを確かなものとする営みも、勤勉な霊的修練が必要である。御言葉を毎日読み、御言葉を良く理解し、祈り主に信頼しながら、主に従って行うこと、それが賢い家の建て方になるのであろう。

## 〈子どもたちに対して〉

父なる神さまは、大切な、愛する御子イエスさまを、私達の罪を赦すために与えてくださった。主イエスは、私達のためにご自身の命を十字架に献げてくださった。神さまはそれ程、愛に満ちておられる。神さまが私達に与えてくださった十戒に従う生き方は、神さまと私達自身、そして私達のまわりの人びとを愛する、そのような神の愛に満ちた生き方である。神さまが私達に教えてくださる生き方を、私達は眺めているだけではならない。神さまの言葉を聞くだけで終わっては、砂の上に家を建てた人と同じなのである。

聞いたことを実行しないのであれば、神の憐れみを空しく受け取っているだけである。主は、神の定められた律法を真に、実行して生きることを私達に求めておられるのである。主に従って生きないのであれば、信じていないことなのである。主イエスの十字架によって、私達は既に罪を全て赦され、御霊を与えられ、神の子とされている。この救いへの感謝の応答として、私達は、主に従う者として生きるように、召されていることを励ましたい。

(袴田清子)

テキスト

マタイによる福音書 7章24～29節

子どもと親のカテキズム 問57

**〔単元のねらい〕**

神さまの子どもとされ、神様と共に歩む私達は、神さまに感謝し、神様と家族や友達、神さまの造られたものを大切にして祈りつつ歩む歩みを、聖書を通して知らされることを知る。また、教えを聞くだけでなく、それを実際に行い、生きることの大切さを知る。

**岩の上に家を建てた賢い人**

先週は、神さまの子どもとされ、神さまと共に歩む私達に、神さまは感謝することを求めておられることを学びました。罪を赦され救われたことを感謝し、家族や友達、また神さまのお造りになったものを大切にして歩むことを求めておられることを学びました。それでは、そのように神さまと家族や友達を愛し、祈りつつ歩む道は、どのようにして知ることができるのでしょうか。今日の『子どもと親のカテキズム』の問57は、「聖書を通して」だと答えています。聖書に、神さまが私達に望んでおられる生き方が書かれているのです。

それでは聖書のどこを読めば良いのでしょうか。一番分かり易いのは、神さまが私達に与えてくださった十戒です。これは皆も何度も教会で唱えていますね。これは聖書の旧約聖書の出エジプト記20章に書かれています。

しかし、主イエスは表面上、神さまの戒めを守って歩むだけで良いとしてはおられないのです。主イエスは、私達の心が完全に神さまの方に向きを変えること、そして神さまに祈りながら、神さまの喜ばれる方向に歩もうとする心を求めておられます。表面上戒めを守っていても、心が完全に神さまから離れているということがあります。主イエスは心が神さまの御心で満たされることを望まれています。神さまの御心とは、御独り子のイエスさまを私達の罪の為に十字架にお掛けになる程の、高く深い憐れみに満ちた愛です。主イエスはその父なる神さまの御心を行うために、十字架にお掛かりになりました。

そして、その愛に満ちた神さまの御心を言い表している十戒は、心の中までも神さまの愛によって満たされて初めて、正しく行うことができるのです。

主イエスは、ご自身が定められた律法や預言を廃止するためではなく、完成するために来られたとマタイ5章17節で語っておられます。私達の行いは、律法学者やファリサイ派のように、表面だけを懸命に取り繕い、自分で自分を正しいとするものではなく、本当の愛に基づく正しさでなくてはならないのです。「兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。……まず行って兄弟と仲直りをし、それから……供え物を献げなさい。」(マタイ5:22～24)、「右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」(マタイ5:39)、「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」(マタイ5:44)、「神と富に仕えることはできない。」(マタイ6:24)、「神の国と神の義を求めなさい。」(マタイ6:33)、「人を裁くな。」(マタイ7:1)、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。……あなた方の天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」(マタイ7:7-12)、「狭い門から入りなさい。」(マタイ7:13) 等等です。これらの教えは主イエスご自身が、神の御心を明らかにしておられる教えです。

そして、天の御国には「主よ、主よ」と言う者

が入るのではなく、天の神さまの御心を行う者だけが入ると言われています（マタイ7:21）。主イエスの御言葉は聞きっぱなしではいけないのです。それに従って生きること、主イエスの御言葉を行うことが重要だと、主は教えられています。

主イエスは、これらの主の教えを聞いて行う人のことを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に例えておられます。また、聞くだけで行わない人の事を、砂の上に家を建てた愚かな人に例えておられます。

主イエスを信じて生きるためには、聖書の勉強、毎週の礼拝や、家での家庭礼拝、自分ひとりでの聖書を読む時間が必要です。個人的に神さまの御言葉をよく心に蓄え、理解して、憶えていく必要があります。個人的にイエスさまと向かい合って、信じること、神さまを愛していることを告白して、祈ること、賛美することも非常に大切です。

コリントー10:4において、主イエスのことが霊的な岩だと記されています。またコリントー3:11にはイエス・キリストを、「既に据えられている土台」であると言い、「だれもほかの土台を据えることはできない」と言っています。岩の上に家を建てるためには土を深く掘らなくてはなりません。私達も聖書をよく読み理解して、主イエスを心から信頼し、御霊に導かれて祈りつつ、土台となる岩に家を建てる必要があります。

家を建てるとは、人生を歩むこと、毎日の行いをする事です。毎日の些細な決断と選択の中で、神さまの御心に沿った行動をすること、これが家を建てるということです。

教会のお友達と仲直りしていないことがあれば、仲直りしてから礼拝しなさいと言われてます。

また、意地悪する人の為に祈りなさいと言われてます。自分が絶対に正しいと思いきんで、人を裁かないようにしなさいと言われてます。何を着ようか何を食べようかと、そのような事ばかりに心を使わないように言われています。自分が人からしてもらいたいように、自分が人にしてあ

げなさいと言われてます。

これらの戒めをよく読むと、愛に満ちていることが分かります。神さまは愛に満ちた御方なので、神さまの戒めも愛に満ちているものなのですね。来週から神さまの戒めである十戒を学んでいきます。十戒は、神さまが私達に求められる義務、つまり、「実践しなくてはならないこと」です。主イエスに従う生き方は、神さまと家族や友達、神さまの造られたものを大切に歩む生き方です。このような愛に満ちた生き方は、愛に満ちた神さまご自身からの愛によって、押し出されないと、罪人である私達には難しいことかもしれません。しかし、神さまは良いものを求める人には、必ず与えてくださいます。神の御霊を与えてくださいます。主に祈りつつ、豊かな愛や必要の一切を与えてくださる神さまに頼り、そのお言葉に従いましょう。

賢い人の建てた家は、雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかっても、岩を土台としていたので、倒れなかったと聖書は教えています。色々な苦難や苦しみが人生にはあります。それだけではなく、主イエスが再び来られる時、世界の全ては、正しく神さまから裁かれます。それはすさまじい雨と嵐の時だと言えます。しかし、その時にも、主イエスの御言葉を聞いて行いながら生きた人は、岩を土台としていたので、倒れなかったと聖書は記しているのです。

イエスさまを信じている私達は、私達のために、ご自分の御子をさえ惜しまないで私達に与えてくださった、神さまに感謝をして、この神さまにお応えして生きるように召されています。そしてそのように、主に従う歩みを、実際に生きること、行いながら生きることが、岩の上に家を建てた賢い人なのです。

皆さんも主によって、賢い人のような家を建てるように招かれ、召されています。一緒に主イエスさまに従い、永遠に持ちこたえる人生を歩みましょう。（袴田清子）

---

【今週の暗唱聖句】 ヤコブの手紙 1章22節

御言葉を行う人になりなさい。

自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。

---

**マタイによるふくいんしょ7:24~29をよみましょう**

1. いわのうえにたてられたいえと、すなのうえにたてられたいえがあります。あめがふり、かわがあふれ、かぜがふいているとき、たおれないのは、どちらのいえですか。
2. いわのうえにじぶんのいえをたてたかしこいひとににているのは、どういうひとですか。
3. すなのうえにいえをたてたおろかなひとににているのは、どういうひとですか。
4. イエスさまのおしえをきいたおおぜいのひとびとが、ひじょうにおどろいたのはなぜですか。
5. いまをいきるほくたちわたしたちが、かみさまのみことばをするには、どうすればいいですか。
6. ほくたちわたしたちが、まいにちのせいかつのなかで、かみさまのことばをきいておこなうひととなるには、どうしたらいいとおもいますか。



テキスト マタイによる福音書 5章9節  
子どもと親のカテキズム 問91

### 〈平和主日〉

弊誌は、創刊以来ほとんど一貫して通常のカリキュラムの中に、二つの主日を特別な記念の主日として加えて編んで参りました。一つは、2月11日の信教の自由を守る記念の日の前後、もう一つは、8月15日前後の敗戦記念日を覚える平和主日です。

しかし、筆者の実践において当該主日の礼拝説教においてそのようにしたことは、ほとんどありません。淡々と当日与えられたテキストに即して講解説教を重ねます。それは、およそ説教が神の言葉として語られ、聴かれ生きられるべき教会の現実において、今日の政治状況と離れたところで説教の言葉が編まれることはあり得ないと思うからです。与えられたテキストを説き明かすとき、信教の自由や戦争や平和の課題に言及せざるを得ない箇所はたくさんあります。ただし、2016年の政治状況における日本にある教会にとっては、まさに今このときに主題説教を重ねて教会の足腰をあらためて鍛え、整えなければならないという緊迫感もあるように思います。

しかし当然、子どもたち（幼児・小学生）のための説教においては、状況はまったく違ってくるだろうと思います。彼らの世界、現場は、学校や家庭、友達との関係がそのほとんどです。しかし、それでもその小さな世界が大きな世界の営みのなかで守られていることについて、彼らの視線を広げること、私どもの重要な課題だと思えます。

これは、昨年夏以降の筆者の小さな経験です。小会決議にもとづき教会のすぐ近くの大通りの交差点で月に一度の礼拝式後、教会員（有志）と共に「スタンディング」を継続しています。また、「戦争法案」が国会審議されているときには、私たちの教会も主催者の一員となった地域の野外集会やデモパレードにも参加しました。これらにおいて、当初予想していなかったことが起こりました。小学生の契約の子たちが親に連れられてではありま

すが、しかし、自発的に参加する姿を見たのです。ハッとさせられました。つまり、親からの情報もあるでしょうが、子どもたちの耳にも、新聞やテレビなどで、このまま法律が通ると、将来自分たちも戦争に巻き込まれる、この暮らしが壊されてしまうという深いところにおいて危機感が植え付けられていることを見たからです。その意味で、高学年の子らにとっては、社会科などで習っていることもあり、大人が思っている以上に深く考えていることを思わせられました（もとより、子どもたちの参加については、親の責任のもとになされることで、教会の呼びかけではありません）。

### 〈平和とは何か〉

そもそも聖書の言う平和とは何でしょうか。使徒パウロはローマの信徒への手紙において、「平和の源である神」(15:33、16:20) と言いました。平和とは神に源泉を持つということでしょう。また、神から与えられるものだということでもありましょう。父と子と聖霊の交わりにおいて一つの存在でいらっしゃる神ご自身のお姿にそれを見ることが出来ます。神ご自身のご存在そのものが平和なのです。そして、神は、私たちを「この平和にあずからせるために」「招かれて一つの体」つまり教会とされた(コロサイ3:15) わけです。まさに、感謝あるのみです。

### 〈平和教育〉

教会の教育は、信仰の教育です。カテキズム(教理)教育こそ、私たちの務めであり使命です。そのことによって主イエス・キリストを愛し、愛されている恵みの内に、信仰告白へと導かれることを願っています。ただし、信仰告白はゴールではありません。信仰告白を経て、聖餐の食卓を整える奉仕者になることつまり教会とその形成に仕える者となってもらうことにあります。しかもそれは教会共同体内という、いわば狭い領域に限定したものではありません。これは、教会の使命そのものですが、教会を通して世に仕える者として



育ってもらふことにあります。これこそ、私どもの教育の根底にある願いであり、目標です。つまり、ディアコニア（愛の業）に生きる生涯を築いてもらいたいのです。そのために、豊かな知識や技術を身に着け、感受性や知性を養ってもらいたいのです。学校（一般）教育の価値を、私どもは積極的に認めているのはそのためだと思います。

もとより、そこで受ける知識や能力は常にカテキズム教育によってその意味や目標を明瞭にさせてあげなければなりません。神の栄光のために、神さまの子どもとして、神さまと共に歩むための学びであり遊びであるということです。

さて、教会教育の目標について、ここに詳細に記す暇はありません。しかしそれを「平和教育」という言葉であらわすことは、的外れではないと思います。「平和教育」とは、キリスト教主義学校をはじめ私学の中でも大切にされているように思います。それは、人と人が争わず、互いの生命や人格、人権を尊重し合う教育です。そのために異文化を理解し、共生、共感できるように知識を与え、考えさせ、実践を促すことだと思います。そうであれば、まさに教会の教育こそ、平和教育の王道であり、その場であると言えるはずです。本日のテキストは、「平和を実現する人びとは、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイ5:9)です。まさに私たちこそ、神の子とされた者たちの集いであり、平和を造り出すために救われた者たちだからです。「キリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を減ぼされました」(エフェソ2:16参照)。キリストの教会は、平和を実現する方法をも、神の御子イエスさまに伝授されています。愛すること、伝道することです。

### 〈カテキズムと平和〉

聖書の言う救いとは、罪からの救いであり、その結果として実現するものこそ、「神の平和」に他なりません。その意味で、旧新を貫く聖書の最大の主題とは、「神の平和」(ヘブライ語：シャローム)であると言っても決して過言ではありません。神と人との間になんのわだかまりもない状態こ

そ、平和です。積極的に言えば、愛し愛されるいのちの交わりの喜びのうちに平安に満たされた関係です。

実は、「子どもカテキズム」にも「子どもと親のカテキズム」にも「平和」という言葉がありません。これは、小さくない欠陥と言えるかもしれません。しかし、たとえば冒頭の「神の子どもとして、神と共に歩む」(問1)「神を知り・仕えて歩む」(問2)「教会の生活・世界に送り出されて神さまに仕えて歩む」(問4)「神、人を愛し・神さまが造られたものを大切に」(問5)において、神の平和に生きる者の幸いとその使命が書き込まれていることに留意くだされば幸いです。問91では、教会が御言葉と聖霊に支配されるとき、教会の平和が確立されること。それは、伝道とディアコニア（愛の働き）によって上げられることが示されています。

### 〈平和の橋頭堡である教会〉

使徒パウロは、「キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい」(コロサイ3:15)と言いました。キリストがその贖いの御業を通して獲得された神の平和こそ、真の平和なのです。そして、その平和に与らせるためにキリストはご自身の体である教会へと、洗礼と聖餐によって結び合わせてくださいました。ですから、平和造りとは、教会形成に直結し、そのための伝道こそ、最高の武器、手段になるのです。神の国の最高のあらわれである教会は、この地に設置された平和を造り出す橋頭堡です。したがって、教会員の一人一人が平和に満たされていることが要です。礼拝の充実はそのためです。そして、その平和は、現実にもこの世界においてもたらされるべきものです。その手段は福音伝道です。そして、その福音伝道は、具体的なものでなければなりません。そこに、政治的な行動や実践が必然的にもたらされます。

本主日、戦前の日本の教会のおそるべき罪を、あらためて見つめ直し、悔い改めを深める日としましょう。教会の再生は、真の悔い改めからのみなされるからです。(相馬伸郎)

テキスト

マタイによる福音書 5章9節

子どもと親のカテキズム 問91

**(単元のねらい)**

敗戦記念日は、日本キリスト改革派教会にとってまさに常に立ち返るべき、創立の原点とも言うべき日です。かつて私たちが属した日本基督教団の教案誌「教師の友」は、戦前戦中、教会に通う子どもたちに、「神の子どもたち」であることを告げず、むしろ「天皇の赤子」であることを強調しました。キリストの御名において戦地へと駆り立てるお話が掲載されていました。戦争に抗う闘いで敗北したというより、戦争推進機関となって戦争に加担した罪を犯しました。キリストを知らない人びとの罪責とは、比べられないほど重くと言わざるを得ません。この罪の悔い改めを深める営みを怠るなら、私どもの宣教も教会形成も真実なものとなりえません。政府の過ちによって戦争できる国とされてしまった今この時、もしも声を出して抗わなければ、既にかつての罪を犯し始めていることにならないでしょうか。私たちのおそるべき罪は、しかし、キリストの血で贖われました。もし、私たちが主イエスの犠牲に感謝するなら、第一に、子どもたちに平和の福音を教えること、第二に、子どもたちを守るためにも政府に警告し、地域社会で声を挙げる必要があるのではないでしょうか。今回の展開例は、「説教完全原稿」ではなく、共に考える、ヒントを二つ提供させていただきます。

**平和を実現する神の子どもたち****1. 平和カテキズム**

子どもと教師との対話形式の「平和カテキズム」を作ってみました。自由に改変し、なによりもご自分で作ってみるとすばらしいと思います。この問答は、聖書の中心主題が平和の実現にあること、そのために神がイエス・キリストによって私たちと和解してくださったこと、ご自身の教会に招き入れられることによって平和を享受できること、主の平和こそ互いに愛し合い、憎しみ殺し合わない世界へと変えて行く力があること、その実践を励ますことが意図されています。

問 まことの平和はどこにありますか。

答 それは、父なる神さまと子なる神さまと聖霊なる神さまとが愛と信頼によって一つに結ばれた交わりの中にあります。

問 それなら、私たちの世界の中にはないのですか。

答 いいえ、神さまは私たちをこの平和の中に生きるようにお造りくださいました。神さまを

礼拝することで与えてくださいます。

問 それなら、神さまを礼拝するところに平和があるのですか。

答 はい、天のお父さまは、罪人の私たちのために救い主イエスさまを十字架にかけて罰することによって罪を赦し、恐れることなく礼拝できるようにしてくださいました。

問 それなら、平和とは神さまとの正しく、よい関係のことですね。

答 はい、私たちは今、イエスさまを信じて、神さまの子どもとされています。

問 私たちは何のために、神さまの子どもとされたのですか。

答 平和を実現するためだとイエスさまは教えてくださいました。

問 どのようにして平和は実現できるのですか。

答 神さまと人を愛し、教会生活に励むことによってです。

問 それなら、平和とは教会によって実現できるのですか。

答 はい、神さまは、イエスさまを主と告白する教会を通して、神の平和を世界に造り出してください。イエスさまが再び来られるとき、平和は完成されます。

問 それなら、礼拝だけしていればよいのですか。

答 いいえ、平和の主イエスさまの命令を破る力には抵抗し、争いを起こさないように声を挙げ、行動することが求められます。

## 2. 説教展開例

今日の日曜日は、平和主日として子どもの教会の礼拝式を捧げています。昨日や一昨日、そして今晚もテレビでは、70年前の戦争のことがとりあげられます。観ましたか。

実は、とても悲しく悔しいことですが、70年前のことが、今、繰り返され始めています。今の政府は、日本国憲法をまったく否定してしまう新しい憲法をつくってしまおうとしています。ちょうど去年の夏、戦争することを可能にする法律が制定されてしまいました。

戦争は、人間が犯し得る最大の罪であり、犯罪です。何故なら、人と人が殺し合うからです。殺されるのは、まさききに弱い立場の人です。偉い人たちは戦争の現場に行きません。これは、先生も信じられないようなことなのです。実は、戦争によってお金がもうかるとか、偉くなれるとか、気持ちが晴れるとか、そのような恐ろしいことを本気で考える人たちがいます。今の戦争や争いは、そんな恐ろしい人びとが、陰にいますと言われています。くわしいことは、学校や自分で勉強してください。

今朝は、そのような私たちの世界と神さまの御心について学びましょう。今朝の暗唱聖句は、「平和を実現する人びとは、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」です。イエスさまがこう教えてくださった時、世界はローマ帝国が、圧倒的な軍隊をもって人びとを支配していました。皆は、「ローマの軍隊の力によって平和なんだ」「ローマの平和、ばんざい」と言っていました。でも、それは、イエスさまがおっしゃった「平和」とは、まったく違っているものでした。「安全保障」と

いう言葉を聞いたことがありますか。ローマの平和は、「自分たちの軍隊は誰にも負けないぞ」と見せつけて、人びとや国々を押さえつけている状態です。なぜ、そうなるのでしょうか。それは、お金や権力を手にしたいからです。威張りたいからです。

ほんとうの平和とは何でしょうか。それは、第一に、神さまと僕たち私たちとの関係のこと、正しい関係のことです。神さまを「お父さま」と呼んで、神さまから「愛するわたしの息子よ」と呼ばれる、心になんのわだかまりもなく、喜びでいっぱい嬉しい親子の関係です。

神さまの前にこのような関係が結ばれていないと、人間の心の中には、不安がもくもくとわきあがります。いわば、神さまと戦争しているようなものだからです。そのままでは、人間は人間の敵ともなっていて、争いあい、不幸のままです。カインは弟アベルを妬んで殺しました（創世記4章）。

天のお父さまは、そんな恐ろしい罪人の僕たち私たちのために、まるで「ごめんね」と謝るようにして、イエスさまを与えてくださいました。イエスさまを十字架につけて、「イエスさまを信じて、罪を赦されなさい。わたしの平和を受けなさい！」と手を差し伸べてくださったのです。僕たち私たちは、もう一度、「はい、信じます。心から、感謝します」と返事をしましょう。

今、この瞬間、神さまの平和が僕たち私たちに実現しています。すると、どうでしょう。僕たち私たちは、「仲良くしたい、殺されるのも殺すのも絶対にいやだ。だめだ。平和を造りたい」と言う強い思いがわいて来ませんか。

2000年前、こうしてイエスさまを信じた人たちは教会をつくりました。神さまの平和が地上に始まったのです。僕たち私たちは神さまの子どもとされました。教会をここにみんなで建てあげ、この国や世界中に争い、殺し合いを止めさせるように祈りましょう。心の中にある、人を憎む思いを神さまに告白して、赦していただきましょう。

(相馬伸郎)

---

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 5章9節

「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」

---

マタイによるふくいんしょ5:9をよみましょう

1. イエスさまのこのおしえは、だれにしたものですか。

2. イエスさまは「へいわをじつげんするひとびと」のことをなんであるとおっしゃいましたか。

3. 「へいわをじつげんするひとびと」はなんとよばれますか。

4. 「へいわをじつげんする」とは、ぐたいてきにどんなことだとおもいますか。

5. 「へいわをじつげんする」ために、あなたがじっさいできることや、やってみたいことはどんなことですか。

マタイによる福音書5:9を読みましょう

1. イエスさまのこの教えは、誰にしたものですか。

2. イエスさまは「平和を実現する人びと」のことをなんとおっしゃいましたか。

3. 「平和を実現する人びと」は、なんと呼ばれますか。

4. 「平和」とはどういうことだと考えますか。

5. あなたが「平和を実現する」ためにできること、やってみたいことはどんなことですか。

テキスト	申命記 4章9～14節
子どもと親のカテキズム	問58
参考教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問39～41 ハイデルベルク信仰問答 問92, 93

問58 神さまが聖書を通して示された愛の生活の規準はどこにありますか。

答 「十戒」の中にあります。

### 〈聖書テキストの解説〉

#### I 神は「掟と法」を愛する者に授けられる(序)

申命記には、「十戒」に要約される主の「掟と法」を、神の民イスラエルが約束の地においても聞き続け、そこから、学び、従い、行い続けなければいけないということが繰り返し語られている。

神は、なぜ、そう幾度も幾度も「掟と法」を守りなさいと教え続けられたのか。それは、その「掟と法」に、民を縛りつけ、自由を奪うためか。あるいは、民の判断能力、決断力を失わせるためか。そうではない。神ご自身が、モーセを通して、こう語っておられる。「あなたたちは、あなたたちの神、主が命じられたことを忠実にやり、右にも左にもそれではならない。あなたたちの神、主が命じられた道をひたすら歩みなさい。そうすれば、あなたたちは命と幸いを得、あなたたちが得る土地に長く生きることができる」(申命記5:32,33)。

このように、神が、ご自身の「掟と法」を民に授けられたのは「命と幸い」のためである。これこそが申命記に繰り返し語られていることであり、「掟と法」は、「あなたたち」が、神と共に在り、「命と幸い」に生きるための「道」である。

神は、神を信じ、その言葉を慕う者たちが、神と共に在る喜びをかみしめながら生きられるように、彼らが、自身と隣人を愛し、幸せを実感しながら生きられるように、「掟と法」を繰り返し語られた。そこには神の深い愛があらわされている。

そうであるからこそ、神の「掟と法」は、本来、神を信じる者たちの自由を奪うものではなく、むしろ彼らが、自由に神を愛し、隣人を自分のように愛する、そのような幸いの生を実現するためのものである。神のルールは、神を信じる者たちを

自由にする(ヨハネ8:31,32)。「罪」が、その幸いの生を妨げているにしても、しかし、神のご意志の根っこにあるものをこそ、わたしたちは大切にしたい。そこにある神が人間に向けられた愛をこそしっかりと見つめたい。

#### II ただひたすら注意して(9節)

神は、申命記4章1節において、こう語っておられる。「イスラエルよ。今、わたしが教える掟と法を忠実にやりなさい」。神の民イスラエルは、神に「法と掟」を教えられ、その「掟と法」を通して交わる存在とされた。「掟と法」は民が神に繋がる道しるべであるがゆえに、神の「掟と法」に従い、生きることは喜びのはずである。しかし、「罪」はその喜びさえも曇らせる。

だからこそ、神を愛する者は、ただひたすらに注意を喚起される。神が「掟と法」を愛をもって与えてくださった事実を。その愛にしっかりと自分自身が立つことを。神の「掟と法」から隣人が逸れているかどうかではない。まず自分自身がどうであるのか、神は問うておられる。そのうえで、「子や孫たちにも語り伝え」ることが示されている。神の「掟と法」は世代から世代へと語りがれていくもの。そうして、神と人を繋ぐ「掟と法」は人と人、世代と世代をも繋いでいく。

また、語り伝える際、その「掟と法」が、語る者自身の心の中に、神の愛と共に刻まれていないならば、ふさわしく「掟と法」を伝えることはできない。神の「掟と法」を伝える者には、神が愛をもって自身に臨んでくださったことを「目で見たことを忘れず、生涯心から離すことなく」覚えていることが求められる。また、過去の神との温かな記憶、それを思い起こすことは、自身が神を

見失いそうになった時、あるいは神に挫折しそうになった時、心を強く励ましてくれる。

### III 神を畏れることを学び、子らに教える (10節)

モーセは、神との過去における温かな記憶、神の言葉がモーセの未来に向かう不安と恐れから自分を守ってくれたことを思い起こし、民に語る。

神は、「わたしの言葉を彼らに聞かせ」と約束してくださった。そして、その言葉において、神の民が「……わたしを畏れることを学び、またそれを子らに教えることができるようにしよう」とも約束してくださった。神ご自身が神の民を「できるように」してくださる。恐れることはない。

### IV 声のほかには何の形も見なかった (11, 12節)

神の民は、モーセを通して語られる神の声、その言葉において、神を見る。わたしたちも、聖書を通して、聖霊に導かれて、神を見る。偶像の中に神はおられない。ただ、神の言葉に集中する時に、わたしたちは神に出会う。

### V それが一戒である (13, 14節)

神は「掟と法」を「一戒 (直訳は“十の言葉”)」に要約され、民に「あなたたちが行うべきこと」として授けられた。それは、かつてホレブ (シナイ) 山で授けられたものであるが、しかし、過去の者たちだけのものではない。モーセは語っている。「主はこの契約を……今ここに生きている我々すべてと結ばれた」(申命記5:3)。

神の民イスラエルはもう間もなく約束の地に入っていこうとしている。「一戒」は、その土地でも、いや、どこにおいても、また、いつの時代においても、今日、神の「命と幸い」に憧れを抱きながら生きる者たちのための道しるべとなる。

### 〈カテキズムの解説 ～二枚の板～〉

申命記4章13節 (参照、出エ31:18、34:29等) には、神が一戒を「二枚の石の板」に書き記されたことが示されている。

そのことについて、『ハイデルベルク信仰問答』第93問は、以下のように教えている。

第一の板は、四つの戒めにおいて、わたしたちが、神に対して、どのような態度をとるべきかを教えています。

第二の板は、六つの戒めにおいて、わたしたちが隣人に対して、どのような態度を負っているか

を教えています。

また、カルヴァンは、『信仰の手引き』のなかで、第一の板について、「御自身に尊厳に仕える礼拝の、御旨にかなった仕方が何であるかを規定しておられる」と、第二の板について、「隣人に負っている愛のつとめが述べられる」と教えている。

そこから、わたしたちは、「前書き」を含めた第一戒から第四戒には、わたしたちの神認識、その認識のもとにある神礼拝について教えられ、第五戒から第十戒には、わたしたちの人間認識、その認識のもとにある人間への愛が教えられていると受け取ることができる。

もちろん、この「二枚の板」を、神認識と人間認識に区別する必要はないし、またできない。わたしたちの人間に対する眼差しは神への眼差しと密接に結びついている。神への愛が失われたところで、人間への愛は、たとえそれが魅力的に見えてもやはり脆い。「二枚の板」は、それぞれの役割を持ちながらも、やはり一体的である。十の戒め、いずれからも、わたしたちは神からの愛を教えられ、神と人への愛の応答を促される。

### 〈子どもたちに対して〉

子どもたちは、日々、多くのルールに接している。そこには、「大人」になっていくうえで、身体に馴染ませていくべき必要なルールもある。しかし、そのルールのなかで窒息してしまわないでほしい。わたしたちの周りには、人の尊厳を貶め、抑圧するルールもある。

子どもたちには、身の回りにあるルールを大切にしながらも、そのルールを問える人になってほしい。問うことで、人間がつくったルールは容易く壊れてしまうかもしれない。しかし、神のルールは絶対に壊れない。揺るがない。そこには自分の全存在、生涯をかけるだけの価値がある。

そのルールに聞き、行うことで、自らが解放されていく喜びを味わってほしい。一戒が求め、カテキズムが教える要求の高さに、時に挫けながらも、そういうルールを与えてくださった神からの愛に出会い直してほしい。神のルールの完成者イエス・キリストにいつも出会い直してほしい。

(柏木貴志)

テキスト 申命記 4章9～14節  
子どもと親のカテキズム 問58

### 〔単元のねらい〕

「十戒」を学び始めるにあたり、神がわたしたちに「十戒」を与えくださった、その幸いへと、子どもたちと共に思いを向けたい。これから「十戒」を一つずつ学んでいくこと、その一つひとつの学びが福音の光のなかで、子どもたちの喜びとなるように導かれたい。神が、わたしたちの幸せのために、真の自由のために、「十戒」を与えくださったこと、その愛にまず触れたい。そこから感謝は生まれる。

## 神さまが与えてくれたルール ～十戒のころ～

### Ⅰ 「十戒」について

みなさん、おはようございます（こんにちは）。今日は、神さまが与えてくださったルール、「十戒」のお話をしましょう。

聖書には、神さまが、人間はこういうふうに生きていかなければいけませんよ、というたくさんあるルールが書かれていますね。

みんな、覚えているかな？

とても全部は覚えきれませんね。でも、「十戒」なら、十個のルールなら覚えられると思います。

神さまは、みんなのために、たくさんあるルールを、「十戒」、「十個の戒め」にまとめてくれました。「戒め」という言葉は、少し難しいですね。今日はとりあえず「教え」という意味、やっぱり「ルール」という意味で覚えておきましょう。

みんなは、十個のルール、「十戒」を覚えていますか？ 覚えているお友だちもいるね。大人の礼拝のなかで聞いたことがあるかもしれないね。

先生は覚えているので、言ってみます。

あっ、その前に、「前書き」というものもあります。これも大切ですから、一緒に覚えています。前書き 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の国から導き出した神である」

第一戒 「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」

第二戒 「あなたはいかなる像も造ってはならない」

第三戒 「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」

第四戒 「安息日を心に留め、これを聖別せよ」

ここまでが前半部分。ここまでの「戒め」で教えられていることは、みんなが神さまをどういうふう大切にしなければいけないか、どういうふうに神さまのことを礼拝しなければいけないか、ということです。

それでは第五戒からはどうでしょう。どんなことが教えられているか、よく聞いてください。

第五戒 「あなたの父母を敬え」

第六戒 「殺してはならない」

第七戒 「姦淫してはならない」

第八戒 「盗んではならない」

第九戒 「隣人に関して偽証してはならない」

第十戒 「隣人の家を欲してはならない」

ちょっと難しい言葉や言い方があったかもしれませんが、よく分からなかったというお友だちも大丈夫です。また来週から、一つずつ学んでいきますので安心してください。

でも、分かったものもあったんじゃないかな。第五戒の「あなたの父母を敬え」というのは、お父さん、お母さんを大切にしないといけないことですね。いや、お父さん、お母さんだけではなくて、いろいろな人を大切にすることですね。

第六戒の「殺してはならない」。これも分かりますね。人を傷つけたり、ましてや殺してしまうなんてことは悲しいことです。こんなことをして



はいけませんよと神さまは教えておられます。

このように、この第五戒から第十戒は、わたしたちの身の回りのこと、人間に関わることが教えられています。どれも、守って当たり前なことじゃないかと思うかもしれませんが、けれども、その当たり前のことのできないのが人間です。だから、神さまは、一つずつこれだけは守りなさいと、「十戒」として教えていただきました。

ぜひ、みんなも、来週から一つずつ学んでいきますので、覚えてください。

## II 「ルール」がある意味

ところで、もうすぐ夏休みも終わって、新学期が始まりますね。宿題はもう終わりましたか？学校にも、いろいろなルールがありますね。先生は、昔、よく学校の先生に怒られました。「廊下を走ってはいけません!!」て。それもルールですね。どうして、そういうルールが決められたのでしょうか？

そうです。走ると危ないからです。誰かにぶつかるかもしれません。つまり、もし窓ガラスにでも突撃していったら、大けがをさせていただきます。そうなるといけないので、「廊下を走ってはいけません」というルールがあったんです。

でも、先生は、その時、そういうことを考えなかったもので、学校の先生に怒られると、心の中で「うるせえなあ」と思ってしまっていました。

先生は少し走るのが速かったですしね、お友だちと競争するのが大好きでした。だから、注意されても、うるさいなあと思ってしまったんです。今は反省しています。すいません。

みんなはそういうことはないかもしれませんが、でも、なんでそのルールがあるんだろうということをちゃんと考えないと、「うるせえなあ」と思うってしまうことがあるんですね。

## III 神さまの愛が溢れるルール「十戒」

では、神さまはどのようにルールを人間に与えられたのでしょうか。そのルールを十個にまとめて、「十戒」にして、わたしたちにくれたんでしょう。聖書にはこう書いてあります。それは、“あなた

たちが命と幸いを得るためだ(申命5:33)”って。神さまのルールを守って生きられたら、あなたたちは幸せになる、神さまとずっと一緒にいられる。だから、このルールをあなたたちは守りなさいって、神さまは言われたんです。

神さまは、みんなのことを大切に大切に思ってくださいって、ケガをしちゃいけません、人を傷つけてもいけません、みんなが悲しくにならないために、神さまをしっかりと見つめていなさい、お友だちをちゃんと大切にいなさいと、「十戒」を教えてくださいました。ですから、「十戒」には、神さまからみんなへの愛がたっぷり詰まっています。来週から学んでいくのが楽しみです。

## IV 十戒を伝えられる人に

で、そういう「十戒」を学んでいくうえで大切なことは、まず「聞く」ことですね。何が教えられているのかと、ちゃんと「聞く」こと。それから、「覚える」こともいいですね。何回も心の中で繰り返してみる。それは、神さまが教えてくださいました言葉を大切にすることです。そうして、今度は実際に「行う」こと、神さまの言葉に「従う」ことです。神さまを愛すること。お父さん、お母さん、ありがとうと言ってみること。

そうしてみることで、きっとみんなの心は、「うれしい」という思いでいっぱいになっていくはずですよ。神さまのルールを守ることは、わたしたちにとってうれしいことなんです。そういうルールを神さまが与えてくださったんですから。

でもね。できないこともあるはずですよ。神さまのことを忘れてしまう時があるかもしれません。気付いたら「十戒」を思い出しましょう。そういうお友だちを見つけたら、「十戒」を伝えてあげましょう。みんなには、「十戒」を大切に、お友だちに伝えられる人になってほしい。神さまは、あなたのことをこんなに大切に思っているよって、だからこんなにも素敵なルールを与えてくれたよって。そんなわたしたちに、神さまがしてくださいませようにお祈りしましょう。

(柏木貴志)

---

[今週の暗唱聖句] 申命記 4章13節

主は契約を告げ示し、あなたたちが行うべきことを命じられた。

それが十戒である。

---

しんめいき4しょう9～14せつをよみましょう。

1. ホレブのやまで、かみさまはモーセになんていいましたか？

2. わたしたちはなにをまなぶようにおしえられていますか？

3. 「じっかい」は、なにをめいじていますか？

4. 「じっかい」はどんなかたちであたえられましたか？

5. がっこうやクラスの「きまり」と「じっかい」はどこがちがいますか？

申命記4章9～14節を読みましょう。

1. 私たちに求められている態度はどのようなものですか？
2. ホレブで主の御前に立った日、主はモーセに何と言われましたか？
3. 私たちが地上に生きる限り、すべきことは何ですか？
4. 主が告げ示したのは何ですか？
5. 十戒とは何ですか？
6. 十戒はどのようなかたちで与えられましたか？
7. 渡って行って得ようとしている土地で行うべきものは何ですか？
8. 10節によれば、主を畏れることは、私ひとりが守るべきことでしょうか？
9. 学校やクラスの「きまり」と「十戒」は、どこが違いますか？

テキスト	マタイによる福音書 22章34～40節
子どもと親のカテキズム	問59
参考教理問答	中高生のための教理入門「主は羊飼い」29 ウェストミンスター小教理問答 問40, 41

問59 キリストが教えてくださった「十戒」の要約とは、どのようなものですか。

答 「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」。

また「隣人を自分のように愛しなさい」です。聖書の全体はこのふたつにまとめられます。

この問答は新約の御言葉に直接依拠しています。マタイによる福音書の当該箇所によれば、イエスが律法学者の問いに答えて二つの聖句を挙げ、これを「律法全体と預言者」すなわち旧約の啓示の土台だと言っています。マルコによる福音書の並行箇所(12章28～34節)では律法学者がその答えに賛同を表しており、ルカによる福音書(10章25～28節)では律法学者が同じ聖句を導き出してイエスがそれを承認するかたちになっています。つまり、その二つの聖句をもって旧約の教えの中心もしくは土台とする理解は、当時のユダヤ教にも通じる見解であったということです。

ただ、三つの福音書での扱いは各々に特徴があります。「マルコ」では第一・第二という優先順位が問題とされ、それらの掟が表す精神性が祭儀の形式的な実行より優るとする点に重きを置いています。「ルカ」では律法をその二つの掟で代表させながら、それを実行するところに愛があるとして「よきサマリア人のたとえ」を加えて、キリストの愛による完成を説きます。カテキズムの問答と最も近い説明をするのは「マタイ」でしょう。

そこで「第一の掟」とされているのは「申命記」6章5節です。敬虔なユダヤ人たちは朝夕の祈り(「シェマー(聞け)」)としてこの聖句を唱えました。「～を尽くして」と三重の表現は人間の全体性を表しています。「精神と身体と能力のすべてをささげて」神を愛すること。福音書の引用は三者とも異なりますが、原文の意図を汲みながらギリシア語にしていると見てよいでしょう。

第二の掟は「レビ記」19章18節です。口語訳

聖書では「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」と翻訳されていましたが、新共同訳聖書のように理解するのが正しいでしょう。カテキズムの文にあるように「隣人を自分のように愛しなさい」です。

ところで、イエスがこれら二つの掟を掲げたのは旧約全体との関連においてであって、十戒だとは言っていません。これがカテキズムにおいて「十戒」との関係で捉えられるのは、「十戒」の内容がそれを証しするからです。モーセを通して与えられた「十戒」は二枚の石の板に記されましたが(申命記4章13節)、内容的に見て二つに分類されます。前書きから第四戒(あるいは第五戒)までは神礼拝に関する義務であり、残る後半は隣人に対する義務がまとめられています。つまり、「十戒」の前半は神への愛の表し方であり、後半は隣人への愛の表し方になります。このような「十戒」の構造から、律法の中心に数えられる二つの掟との関連が伺われ、それらの聖句が「十戒」の精神を言い表しているといふことが可能になります(ローマの信徒への手紙13章9節参照)。

「十戒」の各項目は具体的な指示を伴いますが、それら一つ一つが目指すのは神への愛と人への愛が果たされることです。そして、イエス・キリストがその完成者として世に生まれ、十字架に至るご自身の生涯を通して真実の愛のかたちを示されたのでした。ですから「十戒」はキリストの愛を実現するための手段として教会で学ばれ、生活の指針として今も尊ばれます。(牧野信成)



テキスト マタイによる福音書 22章34～40節  
子どもと親のカテキズム 問59

### 〔単元のねらい〕

神の言葉である旧約の律法をどのように学ぶかで教会の信仰のかたちは変わります。キリストはその福音的な理解の要として、律法の中心にある愛を教えてくださいました。いつもそこから十戒について、すなわち、神の御前での正しい行いについて考える視点を保つようにしたいと思います。

## 「十戒」は神さまの愛

みなさんがもっているふ厚い聖書には、父なる神さまのみ旨が書かれていて、たくさんのことを私たちは教えられます。そして、どうすれば人は幸せになれるのか、ということも書いてあります。でも、それを自分で探し出すのはとても大変です。聖書を全部読んだとしても、一回読んだだけで覚えてしまう人はたぶんいないと思います。今日読んだ箇所でも、律法の専門家がイエスさまに尋ねています。「律法の専門家」とは、聖書のことをとてもよく知っている人のことです。そんな人でも、質問することがあります。

その人は「聖書の中で一番大切な教えは何ですか」とイエスさまに訊きました。イエスさまは神の子ですから、父なる神さまの心は何でも知っています。ただ、専門家はイエスさまのことを信じていないで、そう訊いたのですけれども。

するとイエスさまは、旧約聖書にある二つの聖句を挙げて、お答えになりました。その一つは、申命記の中にある次のような御言葉です。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」。私たちの神さまを心から愛することが一番大切だ、ということです。そしてもう一つの聖句は、レビ記の中にある「隣人を自分のように愛しなさい」という御言葉です。ふつう、人は自分のことを大切にしようとして、それで自分のことばかり考えて周りの人の気持ちが分からなくなってしまうりもします。けれども、神さまが教えてくださいださるのは、周りにいる人たちのことも自分のことと同じように大切にす

ることだ、ということです。神さまを心から愛すること、そして、人間を心から愛すること、それが聖書の中で一番大切な教えだ、とイエスさまが教えてくださいました。

天の神さまは、昔、モーセを通じてイスラエルの人びとに「十戒」をくださいました。「十戒」は二枚の石の板に書かれていて、そこに十個の言葉がありました。これから私たちはその一つひとつを学びますけれども、よく見ると、十個の言葉はイエスさまが教えてくれたことと同じことを伝えています。「十戒」の最初の板には、神さまをどのようにして愛したらよいか、が書いてあります。例えば、第一戒は、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」です。神さまはお一人です。そのお一人の神さまが、わたしを愛しています。人間のお父さんが、自分の子どもを特別だと思って愛するように、天のお父さんも私たちのことを大切に思っています。けれども、私たちが他所を向いて、私のお父さんはあっちがいい、などと走って行ってしまったら、本当のお父さんは悲しい思いをするに違いありませんね。神さまも同じです。私たちが本当の神さまのことを忘れて、何か他のものを神さまにしてしまうことは、父なる神さまを悲しませることです。ですから、私たちには、本当の神さまをおいてほかに神があってはなりません。父なる神さまの愛を信じて、神さまだけを心から愛することで私たちは幸せになれる。

「十戒」の二枚目の板には、隣人をどのように

愛したらよいのかが書かれています。例えば、「殺してはならない」とあります。人の命を奪うことは「愛する」とことは正反対です。「盗んではならない」とあります。これもまた愛することとは正反対です。それなのに殺したり盗んだりするのが罪深い人間の世界ですね。だから神さまはモーセの十戒をくださって、どうしたらみんなが愛し合うことができるかを教えてくださいました。父なる神さまが願っておられるのは、私たちがお互いに殺し合ったり盗みあったりするのではなくて、お互いに愛し合って皆が幸せになることです。だから、そんな神さまの心を知って、私たちが人を愛することができるようになるのなら、それが神さまを愛することにもなります。

十戒は、そんなふうに、父なる神さまの愛を私たちに教えてくれます。そして、どうすれば私たちが幸せになれるかを教えてくださいました。神さまを心から愛すること、そして、人を愛すること、それが聖書に書いてある最も大切な教えであって、イエスさまは、それがわかれば聖書全体がわかる、と教えておられます。

もう一つ大切なことがあります。これもまた十戒の学びの最後に出てきますが、私たちは心から神さまを愛したい、そして人を愛したいと思っても、実際には何度も失敗します。例えば、「隣人の家を欲してはならない」と第十戒にあります。人のものを欲しがってはいけない、ということです。でも私たちは人の物を見てうらやましいと思ってしまうことがあります。私も弟のおやつを勝手に食べてしまったことがあります。あ、これは盗みですね。十戒は私たちの心の中のことにも当てはまる、とイエスさまは言いました。だから、私たちは神さまと人を心から愛したいと思っても

それができません。私たちは罪人です。誰もお手本になるような人はいません。

でも、聖書の教えを完全に守った人が一人だけいます。それはイエスさまです。イエスさまは神さまを愛するためにすべてのことをしました。そして、人を愛するためにご自分をささげて十字架におかかりになりました。だから、イエスさまを見れば、どうすればよいかがわかります。イエスさまは差別をしませんでした。イエスさまは嫌われている人たちの友だちになりました。病气や困っている人たちを進んで助けてくれました。そして最後には自分の命まで与えてしまって、十字架の罰を受けられました。イエスさまは罪を犯しませんでした。けれども、私たちのように罪を犯してしまうものが、神さまの子どもでいることができるように、代わりに罰を受けてくださって、私たちを救ってくださいました。

十戒から私たちは神さまの御心を学びます。何をしなければならぬかがわかります。でも、もしできなくても、父なる神さまは私たちに罰を与えません。なぜなら、イエスさまがもう罰を受けてくださったからです。私たちは失敗します。でも、イエスさまが神さまと人を完全に愛してくださったので、私たちは許していただけます。そして、失敗してもいいから、神さまを愛そう、人を愛そうと、イエスさまが私たちを励ましてくださいます。

だから、私たちはイエスさまを見習って、十戒に書いてある仕方で、喜んで神さまを愛します。私の側にいる人たちを愛します。父なる神さまはそんな私たちを愛してくださっています。そんなふうに神さまと愛し合っている人たちは、たくさんつらいことがあるこの世界にいても、本当に幸せです。  
(牧野信成)

---

[今週の暗唱聖句]      ヨハネの手紙一 4章11節

愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、  
わたしたちも互いに愛し合うべきです。

---

マタイによるふくいんしょ22しょう34～40せつをよみましょう

1. りっぼうのせんもんかはイエスさまになにをききましたか？

2. イエスさまの二つのこたえはなんですか？

3. かみさまをあいするのにはなにをしたらよいでしょうか？

4. 「りんじん」をあいするには、どうしたらよいでしょうか？

5. 2つのおきてではどちらがじゅうようですか？



マタイによる福音書22章34～40節を読みましょう。

1. フェリサイ派の人びとが集まった理由は何ですか？
2. 律法の専門家の質問は何ですか？
3. イエスさまの答えは何ですか？
4. 第1の掟は何ですか？
5. 第2の掟は何ですか？
6. 主を愛する態度は、どのようなものがふさわしいですか？
7. 主への愛を、あなたはどんな方法で表しますか？
8. 「隣人を自分のように愛する」とはどのようなことでしょうか。具体例を挙げてください。
9. 2つの掟はどちらが重要ですか？

テキスト

使徒言行録 5章27～32節

子どもと親のカテキズム 問60, 61

参考教理問答

ウェストミンスター小教理問答 問43, 44

ハイデルベルク信仰問答 問94

問60 「十戒」の前書きは何ですか。

答 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」です。

問61 「十戒」の前書きは私たちに何を教えていますか。

答 神さまは、ご自分の民をエジプトから救い出してくださいました。また、イエスさまによって私たちを罪から救い出してくださいました。それによって、ご自分が恵み深い神さまであることをまずお示しになり、私たちに愛と服従をお求めになっていることを教えています。

今週のカテキズムは、十戒の前書き（序文）を扱う。この序文を考えるにあたって、使徒言行録の5章27～32節から学びたい。

使徒言行録の5章は、ペトロを始めとする弟子達が迫害されるさまを描くものである。少し前の5章17節において、彼らは2度目の逮捕を経験する。そして、最高法院にて裁判を受けることになったのである。彼らはイエス・キリストについて教えていたが、キリストについて教えることは最高法院によって禁じられていた（4章18節参照）。彼らは裁判にかけられたわけである。これは命の危険を感じてもおかしくはない。しかし彼らは力強く弁明をした。その内容は29節から32節で語られている。

彼らが行った弁明の内容は以下のとおりである。①イエス・キリストの生涯は神の救いの計画によるものであること。②ユダヤ人がイエス・キリストを十字架につけたこと。③神はこのイエス・キリストを復活させ高く上げられたこと、である。この弁明は、神からの救い主がイエス・キリストであり、そのことを信じることが、神に従うことである（29節）と述べている。

本日のカテキズムのテーマが十戒の前書きなので、十戒との関わりでこのテキストを考えてみよう。十戒は、エジプトで苦しんでいるユダヤの民を神が導き出したという出来事に端を発している。エジプトから導き出されたということは、それまでいた奴隷状態からの脱出（解放）であり、

イスラエルの人びとにとってはまさに恵みの出来事であった。そして、出エジプト後、荒れ野で3ヶ月を過ごし、シナイ山に到着した。このシナイ山でイスラエルの民に与えられたのが十戒（より正確には十の言葉）である。つまり、十戒の本質は一つひとつの言葉を守るということに先立ち、神がイスラエルの民をエジプトから導き出してくださいましたという恵みを覚えるということにある。

イスラエルの民はエジプトからの脱出を経験したわけであるが、今を生きる私達は出エジプトの出来事を経験することはできない。それでは出エジプトの出来事は過去の出来事なのだろうか。決してそうではない。私達も、罪という奴隷状態に縛られていた。そしてこの罪の縄目から、イエス・キリストによって解放されたのである。キリストが十字架にかかってください、私達の罪を背負ってくださいしたことによってそのことは実現した。人びとを救おうとする神の思いは、旧約の時代から変わらない。

本日の使徒言行録のテキストは、直接に十戒の序文を引用しているわけでも指し示しているわけでもない。しかし、使徒達が行った弁明は出エジプトから新約にいたるまで変わることのない神の意志である。その意志は人を何とかして救おうという熱意であった。さらに31節によれば、神はキリストを人びとの導き手とし、救い主とした。出エジプトの時は神ご自身がイスラエルを導きたもうた。同様に罪からの救いはキリストが導き手

となつてくださることによって実現する。出エジプトを経験した人びとは恵みの証しとして十戒を心に刻んだであろう。私達も罪を赦された者として、その証人として聖霊に導かれつつ十戒の言葉を心に刻みたい。それは、29節でいわれているように神に従うことである。

### 〈子どもと親のカテキズムの解説〉

十戒の前書きは、本文に先行する序文である。昨今の書籍にみられるような意味での前書きではなく、十戒全体を規定している。それは、神さまがご自分の民をエジプトから救い出してくださったことである。これはイスラエルの民にとって、奴隷状態からの解放を意味しており、神さまと共にある幸いな自由を享受することである。そしてこの出エジプトの出来事と、キリストにある罪からの救いというものがパラレルに考えられている。それは、キリストの御業はまさに罪という奴隷状態からの解放だからである。

このように、奴隷状態から、もしくは罪からの解放というものは、神さまからの恵みである。そして、それは神さまの力強い導きによるものである。また、真理は絶えず具体的なものである。神の恵みという真理は罪の縄目からの解放という具体的なものとして私達に与えられている。

罪の赦しに与った私達に、神さまは愛と服従をお求めになる。このことを考える上でも神の導きが最初にあったということを忘れてはならない。私たちの服従はあくまでも、神さまが与えてくださった恵みに対しての応答である。この恵みの応答として、十戒を守るということはとても意味のあることである。十戒は感謝の生活をする上で一つのものさしである。十戒を深く学ぶことは、私たちが感謝の生活を行う上での最初の一步であ

る。そして、そのように歩むことこそ、十戒の前書きで「あなたの神」と私たち一人一人に語りかけてくださるお方に対して、「私の神」と応答することではないであろうか。

### 〈黙想〉

神さまは、私たちが何かの奴隷になっていることを悲しまれる。罪の支配から神の支配に移るよにというのが神の思いである。この思いを実現するために、神はイエス・キリストをこの地上におくってくださいました。そのことにまず感謝をした。そして、十戒は神と民の契約の印である。神の民として絶えず十戒を心に留め、祈りながら感謝の生活を送る者になりたい。

さらに、覚えたいことは十戒という言葉の意味である。十戒という日本語には戒めという漢字が用いられているので、守るべきものという印象を受けやすい。しかし、本来の意味は「十のことば」である。戒めという言葉は用いられていない。もちろん、具体的な内容として守るべき事柄が含まれている。しかし、十戒は定められている戒めを守るというところに本質があるのではなく、あくまでも神を信じるものが、神を信じるが故の証人として証しをするためのものである。

### 〈子どもたちに対して〉

十戒の序文は、十戒の中身を規定する働きを持つので、とても大切である。神がエジプトから人びとを導いたその恵みを覚えたい。また、序文の言葉は暗誦をしてもらってもよいかもしいない。神さまを私の神とすること、私の主とすること。そしてキリストを救い主だと告白する。そのような信仰に導かれたい。(小宮山裕一)

テキスト 使徒言行録 5章27～32節  
子どもと親のカテキズム 問60, 61

### 〔単元のねらい〕

十戒の前書きを扱う。十戒の前書きは本題に入る前にのべる文ではなくて、十戒の精神に関わる。それは、神さまがイスラエルを導いて、エジプトから脱出させてくださったということを感じるためである。ここに十戒の心がある。それは愛に対する主体的な応答である。イエスさまの弟子達も、この愛に生きた。今回の聖書箇所では直接に十戒への言及はないが、神の愛に応答するものとして生きた弟子達の姿を見つめたい。

## 十戒のこころ

おはようございます。今日も子どもと親のカテキズムからのお話です。

先々週から、私達は十戒について学んでいます。十戒は旧約聖書にしるされている、とても大切な教えです。礼拝で十戒を読む教会もあります。十戒は、神さまがモーセを通して私達に与えてくださったメッセージです。神さまが、私達に「こうあって欲しい」という思いを言葉にしたのが、十戒です。ですから、十戒を丁寧に学びたいと思います。そして、もしできたら十戒を全部暗記できたらよいですね。

今日は、十戒の前書きと呼ばれるところを学びます。ここは、とても大切なところなんです。十戒の中身は、来週から学ぶんですけど、今日はその前についているところを学びます。でもね、ここにはとても大切なことが書いてあるんです。それは、神さまがエジプトから、奴隷の家からイスラエルを導いたということなんです。ここが、十戒の大切なところなんです。イスラエルの人達は、エジプトで奴隷だったんです。とっても苦しかった。その苦しみを神さまは見てくださった。そして、モーセをリーダーにして、エジプトから導き出してくださいました。ここに、神さまからの恵みがあります。そして、イスラエルの人びとが、いつも神さまのそばにすることができるよう、神さまは十戒を与えたのです。

出エジプトの出来事は、むかし、むかしの出来

事です。ですから、出エジプトの出来事なんて関係ないし、十戒なんてどうして守らなくてはいけないの？ と思うかもしれません。でもね、出エジプトも十戒も私達と関係のない話ではないんです。私達も、あるものの奴隷だったんです。これは、人とか国とかの奴隷ではありません。それは、罪です。罪の奴隷でした。そして、この罪の奴隷から私達を導いて、解放してくださいましたのが、イエスさまでした。ですから、エジプトから脱出したのと同じように、私達も罪から脱出することができました。それが、イエスさまの恵みです。

今日の聖書箇所は、イエスさまを信じたお弟子さん達のお話があります。お弟子さん達は、イエスさまを伝えるために、あちこちに旅にいきました。でも、旅先でたくさんの苦勞を味わったんですね。でも、イエスさまを信じることをやめませんでした。それは、イエスさまを信じて、その恵みに生きようとしたからです。

使徒言行録の5章の17節からは、お弟子さんたちが裁判にかけられるシーンです。裁判は何か悪いことをした時に相応しい刑罰を与えるために開かれるものです。それでは、お弟子さんたちはどのような悪い事をしたのでしょうか。彼らが裁判にかけられた理由は、28節にあります。「あの名」によって教えたからだ、と最高法院のメンバーの一人が言っています。あの名とは、これはイエス・キリストのことです。イエスさまのことを人びと

に知らせていたから、この時、お弟子さん達は捕まって、裁判にかけられたのです。

イエスさまのことを人びとにひろめていたのですから、何も悪いことではありません。でも、当時の最高法院の人達は、イエスさまのことを伝えるのを禁止していました。だから彼らは裁判にかけられたのです。イエスさまのことを伝えたら捕まってしまう。そのことは、十分わかっていたはずですが、でも、彼らはイエスさまのことを伝えたのです。それは、29節のペトロの言葉を弟子達は心から信じていたからです。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」。この思いで、お弟子さんたちはイエスさまのことを伝えていました。

お弟子さん達が信じていたのは、旧約の時代にイスラエルを導いて、十戒を与え、イエスさまをこの世界に送ってくださった神さまです。お弟子さんたちはこの神さまのことを最高法院の人びとを前にして伝えました。その中心はイエスさまが復活をしたこと、イエスさまが導き手、救い主であることです。

出エジプトを導いたのはモーセさんでした。それと同じように、神さまはイエスさまを導き手として、罪から脱出させてくださいました。心から感謝をしましょう。そして、私たちはイエスさまを信じるものとして、イエスさまに結ばれたものとして、歩むのです。そのために、十戒はとても良いテキストです。十戒を学び、それを実践していく中で、神さまのことをますます深く愛するようになるでしょう。

でもね、十戒を学ぶ時に大切なのは十戒を守ることではありません。十戒の前書きにあるように、神さまが私達を罪の奴隷状態から解放してくださった。そのことを覚えることにあります。それを忘れてしまったら、十戒は生き苦しいものになってしまうでしょう。

私達を罪から解放してくださった神さまが、私たちのことをおぼえてくださり、「あなたの神」といってくださるのです。そのことに心から感謝をしつつ、十戒の言葉を心に刻みましょう。

(小宮山裕一)

---

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 20章2節

わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。

---



しとげんこうろく5しょう27～32せつをよみましょう。

1. さいこうほういんで、ペトロたちはなにをきかれましたか？

2. ペトロはなぜさいこうほういんにしたがわなかったのですか？

3. ペトロはじぶんたちのことをなんだと言っていますか？

4. ペトロがはっきりこたえることができたのは、なぜでしょうか？

5. せいいいはわたしたちに、なにをしてくれますか？

使徒言行録5章27～32節を読みましょう。

1. 最高法院の中に立たされた使徒たちは、何と尋問されましたか？
2. ペトロと他の使徒たちの答えは何でしたか？
3. 神のなされたことは何ですか？
4. 使徒たちは、自分たちのことを何だと言っていますか？
5. 聖霊は誰に与えられましたか？
6. 「あの名によって教えるはならない」と命じられていたのに、なぜ教えるを広めたのでしょうか？
7. あなたが使徒だったら、この場面でどう答えますか？
8. ペトロたちがはっきりと答えることができたのは、なぜでしょうか？
9. 神がイエスさまを導き手とし、救い主とされたのは何のためですか？

テキスト	申命記 6章1～15節
子どもと親のカテキズム	問62, 63
参考教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問45～48 ウェストミンスター大教理問答 問103～106 ハイデルベルグ問答 問94, 95

問62 第一戒はなんですか。

答 「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」です。

問63 第一戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 ただひとりのまことの神さまだけを、私たちの神さまとしてあがめ、信頼し、心から礼拝することを求めておられます。他のどんな偶像も神さまとして礼拝してはいけません。

これがもっとも大切な戒めです。

### 〈聖書テキストの解説〉

申命記の6章は5章の十戒に続くモーセの説教です。十戒の要約的な解説とその重要性が述べられています。イエスも律法の専門家との問答の中で5節を引用し、律法の中で最も重要だと言及しました。マタイ22章35～40節参照。

まず、1～3節で神の救いの恵みにあずかって、つまり「渡って行って得る土地で行うべきもの」であり、「生きている限り」人生を通して守るべきものであることが述べられます。また、それを守ることによる神さまの祝福も約束されます。「約束されたとおりの、……大いに増える」。「行うべきもの」それは一言でいえば、「主を畏れ」ことです。

主を畏れるとは、恐怖ではなく、「主を愛しなさい」ということであり、その愛が二心ではなく真実で心からのものであるようにということで、「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして」と言われます。また、心だけでなく、普段の生活や人生においても、貫かれることを求めていて、礼拝するときだけとか、教会に来るときだけというその時々ぎりのあり方でなく、家に座っているとき、道を歩くとき、寝ているときも起きているときも子どもたちには語り聞かせ、自分の手に結び、額に付けて忘れず、家の戸口の柱にもつけて、外にも表明すべきだと言われます。つまり、普段の生活から、家族生活から、社会生活まで、そし

て自己の人生のすべてにおいて、神さまの救いの恵みを現すことが求められています。

そこで最後に、10～15節で自分があずかった救いと恵みの祝福を思い起こしながら、これから与っていく恵みの中で、決して主なる神さまを忘れることのないように注意が述べられています。同時にこれを忘れることの災いと悲慘が警告されています。「自ら建てたのではない」「自ら満たしたのではない」「自ら掘ったのではない」「自ら植えたのではない」と繰り返されて、約束された祝福に与り、手にしたときの自らの中ででてくる自惚れや奢りを戒めています。そのすべてが神さまの恵みによることを同じ言葉で思い起こさせようとしています。続く注意の言葉では、そのような神の恵みを忘れることや自分の自惚れが、必然的に神さま以外のものへの依存となってあらわれ、偶像崇拜へと墮落していくこと、その結果、神の怒りと裁きを受けることとなることが言及されて、注意を促しています。

そうして全体を振り返りますと、4節の「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である」と言われる主とはどういうお方であるのか。私たちに求められ、忘れることがないよう注意が促されていることを通して、私たちに顧みてくださる方の「唯一」性ということが明らかにされているようです。

主なる神さまがあなたたちと呼びかけてくださ



る私たちは、「エジプトの国、奴隷の家から導き出され」たのであり、そのご自身が自ら「あなたたちの神」となってくださいました。この方が約束されたところの「渡って行って得る土地」が「乳と蜜の流れる土地」であり、その祝福によってわたしたちは「大いに増える」のです。そして「子供たち」も「あなたの家」も持つようになります。またその中での働きや生活によって、町々、財産、貯水池、ぶどう畑とオリーブ畑、その産物の食べ物を得ていきますが、その一切が自らによるのではなく、その方の約束と祝福によるものなのです。このような神さまは、「他の神々、周辺諸国民の神々」とはあきらかに違い、比べることのできない、唯一なる方です。真実かつ、ユニークで、その業は恵みと愛に満ちていて、一貫しています。必ず生きていて、民である私たちに応答される方で、私たちにも神の恵みに応答することを求められます。死んだ神々とは違うので、忘れても何も起こらないわけではなく、思い起こすように促されます。こうしたすべての意味を含めて「主は唯一の主」とモーセは表現して、私たちに教えています。

### 〈子どもと親のカテキズムの解説〉

単元のテーマである「神のみを神とする」には、私たちが時折、神ならざるものを神さまのようにあがめ、信頼を寄せてしまうという弱さや過ちを前提としていることが伺えます。そういう弱さを覚えながら、カテキズムでは、神さまとは「ただひとりのまことの神さま」だけが神さまであること、だから私たちもその方だけを「あがめ、信頼し、心から礼拝すること」これが「神とする」ということの意味であり、「他のどんな偶像も神さまとして礼拝」しないことが教えられています。

ですから、まず、神さまとは「ただひとりのまことの神さま」であることを、きちんと確認すること、とりわけ、「ただひとり」が「一人」という数の問題ではなく、「まこと」にあることが重要です。父なる神、子なるキリスト、聖霊なる神という三位一体の聖書の神さまは、私たちを救い、恵み、愛すことにおいて常に一致しており、他の神々には見られない恵みと愛を知ることので

きるお方です。そこにはわずかな偽りもなく、真実なご性格に満ちています。だから、私たちもまた、そのような神さまに救われ、愛されているのですから、この方だけを「神とする」こと、神さまとしてあがめ、信頼し、心から礼拝することが求められます。「他のどんな偶像」とも表現されるように、私たちは時々、このまことの神さまを忘れてたり、祈りが聞かれないように思えたり、別の頼りがいのありそうなものを見ると、それに心を奪われたりします。しかし、本当にあがめ、信頼する「まことの神さま」とはどんな方かを思い起こし、また知らなければいけません。それには、申命記の聖書箇所のとおり、「繰り返して聞くこと」、そうしてまことの神さまを礼拝することが重要となります。

### 〈黙想〉

ウ小教理問48に「わたしをおいてほか（面前に）」という言葉の問答がつけられ、神さまの前では、「万事を見ておられる神」であって、隠せないことを注意しています。ハイデルベルグ問94、95では偶像として魔術、迷信的な教え、諸聖人や他の被造物への呼びかけなどが言及され、「何か他のものを考え出したり、所有したり」という偶像崇拜のさまざまな行為に言及しています。こうした禁じられた行為が単純でないことも覚えておかなければいけません。それだけに、「ただひとりの」に加えて「まことの」という言葉を付け、偽りではなく真実な神さまということを深く黙想したいものです。

### 〈子どもたちに対して〉

第一戒の「あなたは」とは、他の人とはちがって、特に問いかけられている自分、君、僕たち私たちのことを指しています。聖書、キリスト教の神さまを知らないこの国で、とりわけ子どもたちの生活している学校や友達の中で、神さまに少しでも触れている「自分」というものを大切にあげたいものです。また、その神さまが日曜学校の礼拝を通して、子どもたち一人一人に語りかけていてくださることを覚えてほしいと思います。

(村手 淳)

テキスト 申命記 6章1～15節  
子どもと親のカテキズム 問62, 63

### 〔単元のねらい〕

十戒の第一戒の「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」を覚える箇所です。これをモーセの説教から学びます。イエスが律法学者から律法問答で試されたとき、最も重要な第一の掟としてこの申命記6章5節の箇所「心を尽くし……」を引用されました。同時にルカ福音書10章25節からの善きサマリヤ人のたとえ話の発端として律法学者が律法の要約として引用し、イエスは「あなたはそれをどう読んでいるか」とも問われ、善きサマリヤ人のたとえ話をされました。律法の最も重要な掟となるこの箇所は、律法学者のように「自分を正当化」する読み方ではなく、イエス・キリストにあって神さまがわたしたちの「ただひとりのまことの神さま」になってくださったこと、そういう福音理解の立場にたって、この箇所を覚えたいと思います。

## あなたの神、主を愛しなさい

### 1. 神のみを神とする

今日のお話のテーマは十戒の第一戒「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」です。こう十戒の最初に出てくるのは、これを語られた神さまがわたしたちを罪の奴隷の中から救い出してくださったからです。神さまが本当の神さまであり、その方による救いも本当の救いでした。それで神さまは救った私たちの神さまとなり、私たちもこの神さまの民となりました。しかし、残念なことに旧約聖書にでてるくモーセのお話のなかでは、救われた民たちが約束の地カナンに入ると、この救ってくださった神さまのことを忘れて、まわりで信じられているさまざまの神さまを信じるようになり、救ってくれた「ただひとりのまことの神さま」から離れてしまう姿が語られています。

荒野生活をして約束の地カナンにむかって旅をしてきたモーセとその民たちは、約束の土地に入る前にモーセから説教で神さまのメッセージをいただき、約束の地に入ったとき決して神さまの救いと恵みを忘れることがないように注意を受けました。同時に神さまを忘れないように「神を畏れる」こと、「神さまを愛する」ことを教えられました。

「あなたにはわたしをおいてほかに神があってはならない。」言い換えると、あなたを救うわたしだけが「ただひとりのまことの神」であって、ほかの神は本当に頼ることが出来る神ではない、どんなに頼っても助けてはくれないということです。しかし、私たちは旧約聖書のイスラエルの人たちのように神さまを忘れたり、神さまへの祈りが聞かれないように思えたり、時には別の神さまのほうが神さまのように思えたりして、本当の神さまを見失ってしまうことがあります。神さまはそうした私たちの弱さをよく知っておられるので、まずご自身をきちんと神として信じること、ご自分だけがまことの神であり、私たちを愛し救うことができる方として、最初の掟を教えられました。この方は本当に生きていて、私たちに答えてくださるので、私たちにも愛することをもって答えるように求められます。死んだ神々とは違うので、忘れても何も起こらないわけではなく、思い出すようにと働きかけてくださいます。

### 2. 主は唯一の主である。

モーセさんは民たちを集めて言いました。今から語る掟は、神の救いの恵みにあずかって、約束の土地で行うべきもの」であり、「生きている限り」

人生を通して守るべき掟であること。神さまは祝福を約束し「約束されたとおり、……大いに増える」とも言ってくださいました。その掟は一言でいえば「主を畏れ」ることです。

主を畏れるとは、怖がることではなくて「主を愛しなさい。」ということです。「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして」と言って、愛することに嘘があってはいけないこと、また心だけでなく、普段の生活や学校でも、忘れないようにという意味で、「家に座っているとき、道を歩くとき、寝ているときも起きているときも」と言われます。

そして最後に、自分があずかった救いと恵みを思い起こしながら、決して主なる神さまを忘れることのないように注意されました。「自ら建てたのではない」「自ら満たしたのではない」「自ら掘ったのではない」「自ら植えたのではない」と繰り返されて、約束された祝福を受け、それを手にしたとき、私たちはそれが神さまによるものであることを忘れてつい自分の手柄のように思ってしまう。しかし、そのすべてが本当は神さまによるものなんです。

モーセさんはこうしたことをイスラエルに語って、結局神さまがわたしたちにどんなことをしてくれたのか？これからどんなことをしようとしておられるお方なのかを教えたかったのです。

神さまは私たちを見つけて、「あなたたち」と呼びかけてくださいました。そして「エジプトの国、奴隷の家から導きだされ」ます。さらに神さまご自身が「私たちの神」となってくださいました。救った私たちに住まいを約束し、それが「乳と蜜の流れる土地」であること、そしていずれ「子どもたち」が生まれ、あなたの家族を持つようになり、また働きや生活によって、町々、財産、貯水池、ぶどう畑とオリーブ畑、その産物の食べ物を得ていくようになります。しかもその一切が自らによるのではなく、その方の約束によるものであることを教えられました。

このような神さまは、私たちのまわりにある「他

の神々、周辺諸国民の神々」とはあきらかに違います。比べることのできない、「唯一」なる方です。真実で、ユニークで、その業は恵みと愛に満ちています。こうしたすべての意味を含めて「主は唯一の主」とモーセは私たちに教えてくれました。

### 3. 父なる神とイエス・キリスト

このモーセが教えてくれた「唯一の主」という神さまは、時代がくだって計画の時がきたとき、エジプトから救い出したように、今度は人びとを罪から救いだすために、ご自身の独り子イエス・キリストを遣わしてくださいました。昔のモーセのときにはエジプトからの脱出と約束の地カナンへ入ることをとおして、ご自身がどのような「唯一」の方かを教えてくれたのですが、実は独り子イエス・キリストによって人びとを罪から救うことを計画しておられました。私たちは聖書からこのことを教えられています。そして、このことを知らされた時、モーセが言った「我らの神、主は唯一の主である」という本当の神さまのことを、もっとはっきりとわかるようになりました。

私たちのまわりにあるさまざまな神の中で私たちが救うためにご自身の独り子を遣わされるような神さまはいるでしょうか？ それも私たちをその罪から救うために、私たちに替わって十字架についてくださるような方はいるでしょうか？ そんな私たちの情けない弱さやそれでも愛して下さって、信じることをができるように助けてくれる聖霊なる神さまのような方が近くにいるでしょうか？

この神さまは、今も君たち私たちに呼びかけてくださいます。「あなたにはわたし」がいる！ほかのまわりの人とは違っていてもいいのです。メッセージを聞いている君、僕には、「わたし」がいると神さまが言っています。

「唯一の主」なる神さまを信じて歩みましょう。  
(村手 淳)

---

[今週の暗唱聖句] 申命記 6章4, 5節

聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。

あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい

---

しんめいき6しょう1～3せつをよみましょう。

1. しゅがめいじたおきてをまもるとどうなるでしょう？

しんめいき6しょう4～9せつをよみましょう。

2. さいしよにめいじられているおきてはなんでしょう？

3. わたしたちはおきてをどんなふうにみにつければよいでしょう？

しんめいき6しょう10～12せつをよみましょう。

4. しゅをわすれないようにするのにどうしたらよいでしょう？

しんめいき6しょう13～15せつをよみましょう。

5. かみさまはどんなおかたですか？

**申命記6章1～3節を読みましょう。**

1. これは、何ですか？
2. これは、どうすべきものですか？
3. 何のために行うのですか？
4. イスラエルに求められていることは何ですか？
5. そのように行くと、民はどうなりますか？

**申命記6章4～9節を読みましょう。**

6. まず初めに、モーセが語ったのは何ですか？
7. 私たちに求められていることは何ですか？
8. 命じられた言葉をどうすべきですか？
9. 私たちはどんな時に、子どもたちに語り聞かせるべきですか？
10. 私たち自身はこの言葉をどのようにして身に付けるべきですか？

**申命記6章10～12節を読みましょう。**

11. イスラエルの民はどのような時に主を忘れないようにするよう求められていますか？
12. 私たち自身は、どのような時に主を忘れないようにすべきですか？

**申命記6章13～15節を読みましょう。**

13. 私たちに求められている態度はどのようなものですか？
14. 私たちの神のご性質はどのようなものですか？

テキスト  
子どもと親のカテキズム

ルカによる福音書 20章45節～21章6節  
問64, 65

問64 第二戒は何ですか。

答 「あなたはいかなる像も造ってはならない」です。

問65 第二戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 まことの神さまは目に見えない霊であるお方です。神さまは、聖書に従い、正しいしかたでご自分を礼拝することを求めておられます。

### 〈カテキズムの解説〉

第二戒は、偶像を作ることを禁じている。偶像とはモノであり、モノに過ぎないものを神のように拝することが、偶像崇拜という、神さまが最も嫌われる十戒の違反となり、罪となる。第二戒は、そのような礼拝する対象として、モノを高く掲げることを禁じている。そしてモノには、私たちの心や、体、自分自身の存在をも含めた天地万物のすべてが含まれる（創世記1章1節によれば、驚くべきことに、地だけでなく天もまた、神さまに創造された被造物である。「初めに、神は天地を創造された」）。モノそれ自体が悪いのではなく、モノを神さまと同一視して、それを拝することが、神への冒瀆として禁じられているのである。なぜなら、カテキズム問65が答えているように、「まことの神さまは目に見えない霊である方」だからである。

そして問65の答えは、第二戒で語られている禁止事項を、「第二戒で、神さまが私たちに求めていること」として、より積極的な側面から語り直している。つまり、第二戒の「あなたはいかなる像も造ってはならない」は、言い換えれば、「聖書に従い、正しいしかたで神さまを礼拝する」ということなのである。それは、モノを拝せず、モノに還元されない、生ける霊なる神さまだけを拝すること、その神にのみ頼り、その神をこそ、私たちが支配し支える支え手として認め、その神さまに感謝を帰して歩んでいくということである。第二戒を通して、これを神は私たちに求めておられる。

### 〈聖書テキストの解説〉

ルカによる福音書21章5,6節で、主イエスはエルサレム神殿の崩壊を預言しておられる。神殿とは神への礼拝の場所であるが、そのためにあるはずの神殿が、この時には第二戒が禁じているところに当てはまるようなモノとして、偶像化してしまっていた。エルサレム神殿は、その豪華で壮麗な外観とも相まって、ユダヤ人たちの民族的な象徴であり、彼らは神殿の存在は永遠に不滅だと、それ程までに神殿の存在を信頼し誇っていた。その内面が、5節の「ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話している」という言葉から見て取れる。あるいは同じルカ福音書の19章45節以下を見てみても、当時の神殿が神礼拝に相応しい場所にはなっていなかった現状を知ることができる。

けれども今や、主イエス・キリストという、神の御子そのものであられる方が世に現れられた。主イエスは、神殿をはるかに超えて神さまとの出会いを私たちにもたらしてくださる、神そのものである方である。主イエスを通して、私たちは神を知り、神を礼拝し、その救いに与り、神に祈ることができるのだが、人びとの心は、人間の手によって造られたエルサレム神殿というモノそのものに捕らわれてしまっていた。

そしてそこには、その神殿に信頼を置き、神殿の権威を利用し、そこから来る利権に群がって生きる人びともいた。20章45節以降で主イエスによって批判されている律法学者たち、金持ちたちである。彼らの神礼拝は、神を崇め礼拝するという外見を取りながらも、その内実では自らを高め、

自らを豊かにすることを目的としたものとなってしまっていた。彼は自らの信心深さを人に見せびらかし、懐に痛みを感じない程度の献金で済ませていた。外見上は、彼らは立派な礼拝者たち、宗教的指導者たちと見えたのだろう。けれども主イエスは、彼らの本当の姿を見抜いておられた。そして金持ちの献金と、貧しいやもめの献金を見比べられながら言われた。21章3節「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、誰よりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである」。神を礼拝するとは、このやもめのように、その生活すべてを神に捧げ委ねて生きることを指す。やもめの2レプトンの献金はたった100円程度の額であったが、主イエスはそこに、正しく神を礼拝する者の姿を見て取られた。

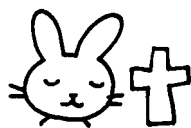
また、この主イエスによる偽りの礼拝者たちに対する批判は、もう既に神を知っている信仰者たちに向かって語られており、ここでは主の民、神殿、つまり教会が、批判の対象となっている。主イエスはヨハネによる福音書2章では、「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」と語られた。主イエスは神から離れてしまった神の民とその集いを、滅びるままに放置されたのではなく、ご自分の贖いの業を通して本来の神殿へと再建される。主イエスの贖いの御業は、第二戒から脱落した私たち人間に神とは誰かを示し、我々を真実の礼拝者へと回復し、神殿を本来の神礼拝の場所として再建するための御業であると言えるのである。

### 〈子どもたちに対して〉

偶像礼拝を禁ずる第二戒は、モノに還元されることのできない神存在の大きさと自由さの宣言でもある。65問の答えに「まことの神さまは目に見えない霊である方」とある。この霊的存在としての神を、どのようにリアリティーのある仕方子どもたちに伝えることができるのだろうか。ここでは「見えない」＝「不在」という、物理的・常識的な枠組みを疑い、突破していくことが必要になる。そこでは、「見えない」＝「物体に閉じ込められないことがない」＝「自由にどこにでも存在できる」という、空気のようにどこにでも存在でき、空気以上にあまねく全宇宙の隅々にまで手を届かせてくださる方としての神さまを、新しく発見したい。その様な神さまの存在に目が開かれていくなれば、木片や石や金属の塊にすぎない石像や銅像を神さまに見立ててそれにひざまずいたり、それらに祈ったり話し掛けたりすることの滑稽さが分かるようになる。

何者かを礼拝するということは、その礼拝の対象にひざまずくことであり、それに従うこと、その対象よりも自分が低くなることを意味する。人間よりも価値が低く、そこに何の命も宿らせていない石や木片を拝することは、石や木片以下に自らをおとしめる自虐行為であり、それ程もつたいない行為は他になく、そのようなことを神さまが喜ばれるはずはない。私たち人間にとっては、宇宙よりもスケールの大きな、モノに還元されない力ある神こそが、首を垂れるに相応しい唯一の方である。

(吉岡契典)



テキスト

ルカによる福音書 20章45節～21章6節

子どもと親のカテキズム 問64, 65

**〔単元のねらい〕**

第二戒を学ぶことで、像に囚われない神の大きく自由な御存在を子どもたちに伝えたい。また、第二戒の偶像礼拝の禁止条項を、それゆえに正しい礼拝を求めておられる神の御心として積極的に受け取り、神が喜ばれる礼拝とは何かを子どもたちと共に考えたい。

**神さまを礼拝するとはどんなこと？**

皆さんは、神さまを見たことがありますか？神さまをこの目で見るということではできませんね。私も神さまを目で見たことはありません。では、神さまが目に見えないということは、神さまはいないということなのですか？神さまはいますか？神さまの耳を、私たちは見たことがないですけれども、教会でも家でも、私たちはお祈りします。神さまの耳がどこにもないなら、どうやって神さまは私たちのお祈りを聞いてくださっているのでしょうか？教会の見えないところに、私たちのお祈りを録音するマイクがあるのでしょうか？じゃあ私たちがおうちに帰って、夜寝る前にひとりで「神さま」とお祈りする時のそのお祈り言葉は、どうやって神さまに届いているのでしょうか？とても不思議ですね。でも神さまは、いつでもどこでも、私たちが祈るお祈りを、もし私たちがその祈りを言葉に出さずに、心の中で祈ったとしても、けれどもしっかりと聞き取ってくださって、それに答えてくださいます。なぜそんなことができるのですか？なぜなら神さまは、どこにでもいらっしゃるからです。

ちょうど、私たちが毎日吸い込んでいる空気のようにすけれども、目に見えないということは、そこに何も無いということではありません。この椅子には、今私が座っています。私は、目に見えるこの体と一体ですので、この場所以外の他の場所とか、他の国に今私がいるということは絶対にありません。今私はこの部屋の中だけにいます。けれども聖書の神さまは、私みたいな人間のよう

に、目に見える体を持って、そこに宿っておられるのではなくて、木や金属でできた仏像とか、そういうモノの中に閉じ込められている神さまでもありません。聖書の神さまは、モノから自由な神さまで、目には見えないですけれども、それはどこにもいないということではなくて、目に見えない分、どこにでもおられて、どこでも私たちのお祈りをお聞きになることができるし、どこでも私たちのことを見守って、一緒にいてくださいます。「神さまが目に見えない霊である」とは、そういうことです。夜、私たちが独りぼっちでベッドに寝ているなど思っているその時にも、神さまは夜の間も眠らずに、私たちが安心して休めるように、私たちのことを見守っていてくださいます。

そんな神さまですから、十戒の第二戒で、「あなたはいかなる像も造ってはならない」と言われているように、私たちは、この神さまを、どんな銅像にも置き換えることができません。どこから石を拾ってきて、「これが今日から神さまだ」などということもできません。神さまはそんなスケールの小さな方ではありません。月よりも太陽よりも、宇宙よりも大きくて、しかもどこにでもいらっしゃるって、私たちのことを見守ってくださいます。

聖書には、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」という言葉があるのですが、こんなふうに神さまが、いつでもどこにでもいてくださって、私たちのこと



を見守ってくださるならば、色々なことが起こるたびに神さまにお祈りしたり、「神さまありがとう」と感謝したりすることは、当然のこと、とても自然なことだと思います。

この目に見えない、どこにでもおられる神さまは、私たちの心の中の目に見えない気持ちまで、見ることができになります。だから教会で神さまを礼拝する時に大切なことは、真心から神さまに礼拝することです。けれどもこれはなかなか難しいことです。学校での朝礼の挨拶や、授業の始めと終わりの挨拶の言葉も同じだと思いますけれども、いつも繰り返して、慣れが出て来ると、それは形だけのものになってしまいがちです。

主イエスがおられた時にも、同じような慣れが起こってしまい、神さまへの礼拝がかたちだけのものになってしまっていました。そこでは神さまへのお祈りも、わざと長くお祈りをして自分は真面目にやっているんだということを人に自慢しようとするような、神さまに心から礼拝するよりも、人に自分が立派であることをアピールするために礼拝をするような、そんな習慣が根付いてしまっていました。

主イエスがおられた時代には、人びとは皆神殿に集まって神さまを礼拝していたのですけれども、その当時はその大事な神殿が、商売の場所になってしまっていたり、偉い人やお金持ちが、自分の力を示すための場所になってしまっていたり、神さまを礼拝するのにふさわしくない場所になってしまっていました。

それは今の時代でもそうだと思います。神さまはこの教会にいらっしゃって、私たちのこの礼拝を喜んでくださいますが、お祈りをする時に目を

開けて窓の外を見ていたり、早く終わらないかなあと思いながら、神さまの言葉である聖書の言葉の説教を聞いていたりしているのでは、神さまもがっかりされると思います。

今朝の聖書の言葉に、「貧しいやもめ」という言葉が出てきます。やもめとは、旦那さんが病気だか、何かの理由で先に死んでしまって、奥さんだけが残されてしまった未亡人のことです。当時は女性だけがどこかで働いてお金をたくさん得るということは難しいことでした。ですからたいていの未亡人は、裕福にはなれず、貧しく弱い人たちでした。けれどもその貧しいやもめが、神殿に来て神さまを礼拝し、レプトン銅貨2枚を献金したと書かれています。銅貨というのは、今で言うと10円玉とか5円玉の茶色い硬貨のことです。それを2枚捧げるだけの小さな献金でした。けれども主イエスはそれを見て、「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、誰よりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」と、彼女の献金は少ないけれども、彼女にとっては、それは大きな献金だった。神さまはこういう心をお喜びになる。これこそが正しい礼拝だと、褒めてくださいました。

神さまは今も生きておられて、今も私たちのそばにいて、私たちのすべての言葉や心の動きまでも知ってくださり、見えない耳で私の声を聞き、見えない手でいつも私たちを支えてくださる方ですから、その神さまに、今日も私たちは、親しく心から向き合い、礼拝し、感謝を捧げたいと思います。(吉岡契典)

---

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 21章3節

「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。」

---

ルカによるふくいんしょ20しょう45～47せつをよみましょう。

1. りっぼうがくしゃのおいのりのしかたはどんなものですか？

2. りっぼうがくしゃのようなたいどはどうなりますか？

ルカによるふくいんしょ21しょう1～4せつをよみましょう。

3. イエスさまのまえでけんきんをしたのはどんなひとでしたか？

4. そのひとのけんきんはどんなけんきんでしたか？

5. イエスさまはどうしてそのひとのけんきんをほめたのでしょうか？

**ルカによる福音書20章45～47節を読みましょう。**

1. イエスさまは誰に気をつけなさい、と言われましたか？
2. 律法学者の態度はどのようなものですか？
3. 律法学者の祈りはどのようなものですか？
4. 律法学者のような態度をとる者たちは、裁きのときにどうなりますか？

**ルカによる福音書21章1～4節を読みましょう。**

5. イエスさまは何をしているところですか？
6. 献金をしたのは誰ですか？
7. 献金をたくさんしたのは誰ですか？
8. イエスさまがほめたのはどちらですか？
9. イエスさまはなぜその人をほめたのでしょうか？
10. 献金にはどういう心が求められていますか？

**ルカによる福音書21章5～6節を読みましょう。**

11. 神殿はどのような状態ですか？
12. 人びとの心は、どこに向いていますか？
13. 全体をもう一度読みましょう。イエスさまが人びとに求めていることはなんだと思いますか？

テキスト

子どもと親のカテキズム

参考教理問答

使徒言行録 3章1～10節

問66, 67

ウェストミンスター小教理問答 問53～56

ウェストミンスター大教理問答 問111～114

問66 第三戒は何ですか。

答 「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」です。

問67 第三戒で、神さまは私たちに何を求めておられますか。

答 神さまのお名前とは、神さまご自身のことです。ですから、神さまは、ご自身をおそれ敬い、愛と親しさをもって、ご自分の名前を呼び、用いることを求めておられます。

**〈聖書テキストの解説〉**

天から遣わされたイエスさまが十字架の苦しみを経験なさり復活させられ天へと挙げられた後、弟子たちのしたことが使徒言行録に記されています。ある時、弟子の中のペトロとヨハネが神殿の境内の前で足の不自由な人に施しを乞われます。その時彼らはこのように言いました。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。その言葉によってその男は「躍り上がって立ち」あがり、「境内に入り」、「神を賛美」しました。この人の人生を変えたのは「ナザレの人イエス・キリストの名」でした。それは力ある神の名でした。

「名」が意味しているのは単なる記号でもしるしでもなく、人格そのものです。「ナザレの人イエス・キリストの名によって」ということは「ナザレの人イエス・キリストの方自身によって」ということです。決して呪文のようなものではありません。呪文に力を認めるなどという考えは聖書中にはありません。この奇跡が起こったのはイエスさまの力が働いた結果なのです。

「イエスさまの弟子」とは、イエスさまご自身に働きかけられた人であり、この方とのかかわりを持ち、この方を通して、この方のために働いた人のことなのです。

**〈第三戒について〉**

第三戒については教会学校教案誌 Vol.59 に吉

田隆先生が丁寧に説明してくださっていますので是非お読みください。

かつて主なる神さまはモーセにご自身の名前を明らかにされました。出エジプト記3章には次のように記されています。

神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人びとにこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと」。

神は、更に続けてモーセに命じられた。「イスラエルの人びとにこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名／これこそ、世々にわたしの呼び名」。

神さまは、他のものと区別され、そしてその方を知ることができる名前を明らかにされました。神さまがそのように人に示してくださなければ私たちは神さまを知ることができなかったのですが、知ることができるようにしてくださいました。こうして人は神さまに日常的に親しく呼びかけ、人格的なかわりを持つことができ、助けられて生きることができるようにされました。

ウェストミンスター小教理問答第一問は人の最高の目的は神さまを喜び楽しむことと告白していますが、その目的が失われないために第三戒があるので。

私たち人間はすぐにつけあがり、傲慢になる性質を持っています。神さまを中心にして、自分に

関わる全てのことを周辺に置かなければならないのに、中心に自分を置いてしまうのです。自分にかかわるあらゆることを自分に奉仕するものとして、自分を満足させるものとして位置づけようとしてしまうのです。神の御名さえも自分の栄光のために利用するのです。その時神さまを自分の幸福のために奉仕する下僕として引き下ろしてしまいます。私たちの罪の性質は、絶対に逆転させてはならないことをいとも簡単に逆転させてしまうのです。それでは神さまを喜び楽しむという人の本来の目的に沿って生きることができなくなってしまいます。

「みだりに唱えてはならない」という命令は、神さまの名前は一切口にしてはならないと理解されたことがありました。そのために人びとは、神さまが教えて下さった名前である YHWH という単語を口にしなくなり、とうとうその発音の仕方が分からなくなってしまいました。しかしその名を口にしなければそれで良いという訳ではありません。たとえ口にしなくてもみだりに神の名を利用する、つまり濫用する、あるいは軽く扱うということはあるのです。

神さまは、様々なことを通してご自身を私たちに示されます。神さまの自己開示は名前を示されるということに限定されるものではないのです。ですから私たちは、神さまの顕れを知らされるあらゆることに対する態度が問われているとすることができます。

カルヴァンはキリスト教綱要の中でこのように言っています。「神は私たちによって恐れ、愛せられるべき方であるので、その聖い名はどんな理由であろうとも乱用されてはならない。そうではなくむしろ、私たちはその聖性のゆえに、すべてにまさって栄光あるものとし、善きにつけ悪きにつけどんなものについても、神に栄光を帰し、全心をもって、全てのことが神の手から私たちに

与えられるように神に祈り求め、神に感謝を捧げなければなりません」(キリスト教綱要初版、久米あつみ訳)。私たちは神さまの僕として神さまに対してふさわしく接する必要があります。神さまの自己開示と救いの提示という憐れみに感謝してひれ伏す思いで相対する、そのようにして神さまと私たちとを結びつける必要があるのです。

神さまが求めておられるのは私たちが相応しく神さまに呼びかけることです。しかしそのことは人間には不可能なことのようには思われます。たとえ敬虔さを装ったとしても、自己中心の思いにいつも囚われてしまうからです。敬虔になっているつもりにすぐなるからです。この第三戒は、神さまを軽々しく自分の位置にまで引き下げようとする罪が自分にはあるということに気づかせると共に、気づく毎に神さまが本来求めておられる恵みの世界へと帰って行くことを促すものです。

#### 〈テキストとの関連で〉

弟子たちはイエス・キリストの名によって足の不自由な人を癒しました。そのことによって多くの方が驚きました。また弟子たちはそれ以外にも多くの不思議な業を行いました。しかしそれらのことによって人びとからの賞賛を受けることが彼らの目的ではありませんでした。私たちはすぐに自分の栄光のために神の名を用いたくなるのですが、第三戒が求めているのは、神さまの御名を濫用してはならない、悪用してはならない、自分のために用いてはならないということです。足の不自由な人は癒されて、神殿の境内に入っていくことができました。そして神さまを賛美しました。私たちだけでなく、隣人が神を喜ぶという「人の目的」のために神さまの御名を用いること、それを神さまはお許しになるだけではなくて望んでおられるのです。(常石召一)

テキスト 使徒言行録 3章1～10節  
子どもと親のカテキズム 問66, 67

### 〔単元のねらい〕

私たちは神さまのかかわりの中で間違いを犯してしまいます。神さまのお名前さえも自分のために使おうとしてしまうのです。神さまが望んでおられることを考えましょう。

## イエス・キリストのお名前によって

イエスさまが復活し天へと帰られた後、弟子たちはイエスさまのことを教え、救われる人を増やしていました。ある時、弟子のペトロとヨハネがお祈りのために神殿に上って行きました。すると生まれた時から足が立たない人がちょうど神殿の入り口に運ばれて来ました。礼拝に来る人たちに施しをしてもらって生活費に充てるためでした。そのようにして毎日を過ごしている人だったので、彼はペトロとヨハネにも施しをしてほしいとお願いしました。その願いに対して二人はじっとこの人を見ました。この人に本当に必要なものは何か、この人に対してイエスさまは何を与えようとしておられるのかを見ようとしたのです。そしてペトロは言いました。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう」。お金はないと言われてどう思ったでしょうか？ 代わりに何をもらえるのだろうと思ったかもしれませんね。ペトロは続けます。「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。この人にとっては思いがけない言葉だったのではないのでしょうか。この人はイエスさまのことを詳しく知らず「それって誰？」と思ったかもしれません。それにとにかく生活費だけを求める生活をしていて、足が良くなるなどということはもう長い間考えてみたこともなかったでしょう。ですからペトロの言葉に戸惑い、そんな冗談を、と思ったかもしれません。しかしペトロはその人の手を取ります。そして立たせるのです。すると急に足がしっかりして、力が入るようになって、立ち上がりました。彼は大変驚き大変喜びました。気が付くと

躍り上がっていました。こうして彼は神殿の中にペトロとヨハネと神さまを賛美しながら共に入っていました。周りの人たちは、「神殿の入り口でいつも座って物乞いをしている人だ。その人が歩いている」と思って驚きました。

みなさんはこのお話を聞いてどのように思いましたか？ イエスさまのお名前というのはすごい力があるのだな。そういう力が欲しいな、私はイエスさまを信じているから一度試してみようかなと思った人もいるのではないのでしょうか。そういう力があったらさぞ気持ちが良いのに、みんなから「君はすごいね」と言われるかもしれないな、そんな想像をしたかもしれませんね。

しかし「イエスさまのお名前」というのは決して呪文のようなものではありません。そのお名前を唱えさえすれば願いが聞かれるというようなものではないのです。そのような魔法の言葉であるかのようにご自分の名前が使われることをイエスさまは嫌がられます。

みなさんにはそれぞれ名前があります。名前を聞いたらあの人だなということが分かるのですね。全くの同姓同名であっても、ナザレ村のイエスのように、どこそこの町・村の、何年生のだれそれ、と言えばその人だということが分かるのですね。名前はその人そのものを表しているし、その人そのものなのですね。ですから「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」というのはイエスさまご自身があなたに力を与えてくださることを信じて、イエスさまに促されてそのように行動しなさい、ということな

のですね。ペトロの命じた言葉のとおりはこの男の人が立ち上がることができたのは、ペトロがすごかったからではありません。イエスさまご自身が働かれたからです。イエスさまのお名前は決して私たちが自由に使うことができる便利な道具ではありませんし、イエスさまは私たちの奴隷ではないのです。

私たちの周りに名前がついていないものはありますか？ 机、いす、全部名前がありますね。名前があるということはそれを聞いて思い出すことができるということです。名前がないもの思い出すことはできませんし、ちゃんと分かることもできません。世の中には今の私たちには分からないことがいっぱいあります。何でこんなふうになるのだろう？ と不思議に思うことがある。そういう疑問を解こうとして学問というものが始まります。みなさんは学校でもそして教会でも学んでいますね。いろいろなことを知っていきますね。そして分かっていく中で名前も同時に覚えていく、あるいは新しくわかったものに名前を付けていくのです。名前を付けるということは自分にぐっと近づけること、自分のものにするという意味もあります。

ところで、神さまは永遠の昔からおられ、永遠の彼方までおられるお方です。全てを造り、全てを知っておられるお方です。一方、私たち人間は決してそのような者ではありません。人間はたくさん勉強して研究してこの世のことが昔に比べたら分かるようになりましたがまだ少ししか実は分かっていません。それに神さまに背いた罪人であ

る私たち人間は神さまを知ることができなくなってしまったのです。神さまがおられること、そして神さまがどのようなお方であるかということは、私たちがいくら勉強をして考えたからといっておぼろげにしか分からないのです。そして普通は間違っ理解をしてしまうのです。しかし神さまはご自身のお名前を私たちに知らせてくださいました。またそれだけではなくてイエスさまという神の独り子をお送りくださいました。そのようにして私たちは神さまを知り、イエスさまを信じることができるようにされたのです。それで私たちは神さまのことを全て理解できるようになったわけではありませんが、神さまに話しかけ、神さまの力と愛を感じ、神さまと楽しくお話をすることができるようになりました。また今日の足の悪い人のように、絶対に立てないという所から立ち上がることができるようにされました。これは死んでも復活することができるようにされたということでもあります。立てるようになったこの人は神さまを賛美し、神さまを喜び、そして神殿に入ることができるようになりました。神殿に入るといことは教会に入る、天国に入ることとも言えます。私たちもそのようにされたのです。

そのようにして私たちが神さまを喜び、私たちの周りの人たちも神さまを喜ぶ、そのことを神さまは喜ばれます。そのために神さまはご自身を私たちに示してください、イエスさまを送ってくださいました。神さまの御目的に従って生きて神さまを共に喜んでいきたいと思えます。(常石召一)

---

【今週の暗唱聖句】 使徒言行録 3章6節

「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。

ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」

---

しとげんこうろく3しょう1～10せつをよみましょう。

1. もんのところにいたのはどんなひとでしたか？

2. ペトロはそのひとにどうしましたか？

3. おとこのひとはどうになりましたか？

4. みていたまわりのひとたちはどんなふうになりましたか？

5. 「イエス・キリストのな」はどんなちからがありますか？



使徒言行録3章1～10節を読みましょう。

1. 登場人物を挙げてください。
2. 何時頃の出来事ですか？
3. 場所はどこですか？
4. 男の状態はどうでしたか？
5. 男は何のために神殿に運ばれてきたのですか？
6. 男はペトロとヨハネに何を求めましたか？
7. ペトロは何と答えましたか？
8. ペトロはどうしましたか？
9. 男はどうなりましたか？
10. この出来事を見た民衆の反応はどうでしたか？
11. 「イエス・キリストの名」にはどんな力がありますか？

## 2016年10～12月カリキュラム（第63号）

— 『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第2年—

月 日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
単 元 の 目 標			
10月2日	第四戒 主の日の安息	問68, 69	ウ小57～62
		使徒言行録13:44～52	創世記20:8
安息日に神さまの愛を味わう			
10月9日	第五戒 父母を敬う	問70, 71	ウ小63～66
		テサロニケー5:12～15	テサロニケー5:15
神さまが与えてくださった人間関係を大切にする			
10月16日	第六戒 殺すな	問72, 73	ウ小67～69
		ヨハネー3:11～18	ヨハネー3:11
自分も他の人も愛する			
10月23日	第七戒 姦淫するな	問74, 75	ウ小70～72
		創世記2:18～25	創世記2:18
神さまが創られた秩序、神さまとの約束を大切にする			
10月30日	第八戒 盗むな	問76, 77	ハイデ110, 111、ウ小73～75
		エフェソ4:25～32	使徒20:35
神さまからいただいたものを大切にもちいる			
11月6日	第九戒 偽証するな	問78, 79	ウ小76～78
		マタイ26:69～75	申命記32:4
聖霊に生かされ、神さまの真実に生きる者となる			
11月13日	第十戒 むさぼるな	問80, 81	ウ小79～81
		マタイ6:25～34	マタイ6:26
私たちを満たして下さる神さまに信頼を置く			
11月20日	憐れみを求めさせる戒め	問82	ハイデ114, 115、ウ小82、ウ大149
		ローマ7:14～25	ローマ7:25
十戒を通して、イエスさまの赦しの憐れみに依り頼む生活へ			
11月27日	神の愛の戒めを喜ぶ	問83	ウ小87、ウ告白16:2
		エフェソ5:6～10	—
戒めは私たちへの愛の導き			
12月4日 待降節	祈りの手本、主の祈り。 祈りとは何か	問84	ウ小99、ハイデ118
		マタイ6:7～15、ルカ11:1～4	マタイ6:8
祈りはすべてをご存じの神さまに対する私たちの応答			
12月11日 待降節	キリスト誕生の予告	—	—
		マタイ1:1～17	創世記22:18a
神の約束が守られ、その約束通りにキリストがお生まれになった			
12月18日 待降節	キリストの誕生	問26	ウ小22
		マタイ1:18～25	マタイ1:21
キリストはまことの人となるほどに私たちを愛される			
12月25日 降誕祭	博士たちの礼拝	—	—
		マタイ2:1～12	マタイ2:11
神さまの導きを素直にうけて主を礼拝する			

## 2016年度 年間カリキュラム (第61～64号)

— 『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第2年—  
(2016年4月～2017年3月)

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2016年 第61号	4月3日		再臨・天国を目指す歩み	問39
	4月10日		死後の祝福	問40
	4月17日		体の復活	問41
	4月24日		教会と共に歩む道・キリストの体	問42
	5月1日		母なる教会による命の養い	問43
	5月8日		教会の使命	問44
	5月15日	聖霊降臨祭		
	5月22日		主の日の祝福	問45
	5月29日		礼拝式の祝福	問46
	6月5日		恵みの方法	問47・48
	6月12日		みことばの恵み	問49
	6月19日		礼典の恵み	問50
	6月26日		洗礼の恵み	問51
第62号	7月3日		幼児洗礼の恵み	問52
	7月10日		聖餐の恵み	問53
	7月17日		信仰告白を目指して	問54
	7月24日		恵みの方法としての祈り	問55
	7月31日		感謝して歩む	問56
	8月7日		感謝の生活の規準	問57
	8月14日	平和主日		(問91)
	8月21日		感謝の道しるべ・十戒	問58
	8月28日		十戒の心・神と人を愛する	問59
	9月4日		十戒の心・父の愛の戒め	問60・61
	9月11日		第一戒 神のみを神とする	問62・63
	9月18日		第二戒 偶像礼拝とは何か	問64・65
	9月25日		第三戒 神の御名	問66・67

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第63号	10月2日		第四戒 主の日の安息	問68・69
	10月9日		第五戒 父母を敬う	問70・71
	10月16日		第六戒 殺すな	問72・73
	10月23日		第七戒 姦淫するな	問74・75
	10月30日		第八戒 盗むな	問76・77
	11月6日		第九戒 偽証するな	問78・79
	11月13日		第十戒 むさぼるな	問80・81
	11月20日		憐れみを求めさせる戒め	問82
	11月27日		神の愛の戒めを喜ぶ	問83
	12月4日	待降節	祈りの手本、主の祈り。 祈りとは何か	問84
	12月11日	待降節		
	12月18日	待降節		
	12月25日	降誕祭		
2017年	1月1日	元旦	神の子らしい祈り	問85
第64号	1月8日		祈りに生きる道・神との会話	問86
	1月15日		祈りに生きる道・主の御名による祈り	問87
	1月22日		祈りに生きる道・祈りの内容	問88
	1月29日		主の祈り・わたしたちの父よ	問89
	2月5日		主の祈り・御名を崇める祈り	問90
	2月12日		主の祈り・御国を求める祈り	問91
	2月19日		主の祈り・御心を求める祈り	問92
	2月26日		主の祈り・ゆだねる祈り	問93
	3月5日		主の祈り・赦され、赦す祈り	問94
	3月12日		主の祈り・神の子の勝利の祈り	問95
	3月19日		主の祈り・確信の祈り	問96
	3月26日		主の祈り・神の真実による祈り	問97

## 救済史に基づく二年サイクル

	月 日	教会暦・行事	主題	聖書箇所
2016年 第61号	4月3日		復活を疑うトマス	ヨハネ20:24～29
	4月10日		ペトロを励ます復活のキリスト	ヨハネ21:1～19
	4月17日		大宣教命令	マタイ28:16～20
	4月24日		着座・主が王となられた	詩編110
	5月1日		油が注がれた方が成し遂げられた	イザヤ61:1～4
	5月8日		霊が臨むとき	エゼキエル37:1～14
	5月15日	聖霊降臨祭		
	5月22日		イサクとリベカの結婚	創世記24:1～67
	5月29日		エサウとヤコブ	創世記25:27～34、27:1～40
	6月5日		ヤコブの夢	創世記27:41～28:22
	6月12日		ヤコブの結婚	創世記29:1～30
	6月19日		エサウとの再会	創世記32:4～33:20
	6月26日		ヨセフの夢	創世記37:1～11
第62号	7月3日		エジプトに売られるヨセフ	創世記37:12～36
	7月10日		ヨセフとポティファルの妻	創世記39:1～23
	7月17日		夢を解くヨセフ	創世記40:1～41:46
	7月24日		イスラエル、エジプトへ	創世記41:47～46:27
	7月31日		エジプトでの苦難	出エジプト1:1～21
	8月7日		モーセの召命	出エジプト3:1～4:17
	8月14日	平和主日		
	8月21日		十の災い	出エジプト5:1～12:42
	8月28日		葦の海を渡る	出エジプト14:1～31
	9月4日		十戒の心・父の愛の戒め	問60・61
	9月11日		第一戒 神のみを神とする	問62・63
	9月18日		第二戒 偶像礼拝とは何か	問64・65
	9月25日		第三戒 神の御名	問66・67

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	聖書箇所
第63号	10月2日		第四戒 主の日の安息	問68・69
	10月9日		第五戒 父母を敬う	問70・71
	10月16日		第六戒 殺すな	問72・73
	10月23日		第七戒 姦淫するな	問74・75
	10月30日		第八戒 盗むな	問76・77
	11月6日		第九戒 偽証するな	問78・79
	11月13日		第十戒 むさぼるな	問80・81
	11月20日		シナイ契約の締結	出エジプト24:1～11
	11月27日		金の子牛	出エジプト32:1～34:28
	12月4日	待降節	言は私たちの間に宿られた	ヨハネ1:1～14
	12月11日	待降節	キリストの系図・神が共にある歴史	マタイ1:1～17
	12月18日	待降節	インマヌエル	マタイ1:18～25
	12月25日	降誕祭	異邦の学者による礼拝	マタイ2:1～12
2016年 第64号	1月1日	元旦	幕屋建設	出エジプト35:4～40:38
	1月8日		地の塩・世の光	マタイ5:13～16
	1月15日		敵を愛しなさい	マタイ5:43～48
	1月22日		隠れたことを父が見てくださる	マタイ6:1～6
	1月29日		主の祈り	マタイ6:9～15
	2月5日		思い悩むな	マタイ6:25～34
	2月12日		聞いた言葉を行う	マタイ7:24～29
	2月19日		嵐を静めるキリスト	マタイ8:23～27
	2月26日		悪霊を追い出す	マタイ8:28～34
	3月5日		ペトロの信仰告白	マタイ16:13～20
	3月12日		迷い出た羊のたとえ	マタイ18:10～14
	3月19日		子どもたちを祝福する	マタイ19:13～15
	3月26日		エルサレム入城	マタイ21:1～11

# 子どもと親のカテキズム

## 神さまと共に歩む道

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

### 『子どもと親のカテキズム』の目指すもの ～「あとがき」より～

このカテキズムは、契約の子どもたちの信仰継承の前進、地域の子ども伝道の進展、成人求道者の洗礼教育、現代を生きるキリスト者の信仰の確立を願って、作成されました。

どうか父なる神が、ご自分の子どもたちをこのカテキズムを用いて主イエス・キリストの福音の真理の内に養ってくださり、聖霊の交わりのうちに親子の信仰の対話を祝福して信仰を告白する喜びに導き、教会と世界に感謝をもって仕える民として成長させてくださいますように。

カテキズム作成のために多大な労苦を払われた前大会教育委員会小委員会の牧田吉和委員、三川栄二委員、相馬伸郎委員に感謝しつつ、今ここに『子どもと親のカテキズム』をお届けします。

2014年10月

日本キリスト改革派教会大会教育委員会



2014年10月15日発売

四六判・並製・64頁

ISBN978-4-7642-6454-0

販売価格 **400**円 (税込)

書店での販売価格は540円 (税込) ですが、大会教育委員会を通じての販売価格は400円 (税込) です。

申込先 E-mail [shintoko\\_ch\\_pastor@yahoo.co.jp](mailto:shintoko_ch_pastor@yahoo.co.jp) 長田詠喜

振込先 01620-8-39213 長田詠喜

※『子どもカテキズム』とは申込先が異なりますので、ご注意ください。

**教文館**

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 FAX03-5250-5107  
HPをご利用ください。 <http://www.kyobunkwan.co.jp/publishing/> 【呈・図書目録】

### 〈執筆者・編集者よりひとこと〉

●子どもの心を惹きつける絵本は、大人の心も惹きつける力を持っていると思います。絵本は読む人によっていろいろな感じ方がありますが、想いを巡らせていくうちに、信仰的な気づきを与えられていくことを感謝しています。（望月鈴子）

●この世のただ中に身を置いて生きている子どもたちのひとりひとりが、真理と命の言葉に養われ、守られてあることができますように。（木下裕也）

### 〈あとがき〉

●第62号をお届けします。先号に引き続き、発行日が遅れましたことお詫びいたします。現在編集部体制立て直しを計っております。お祈りください。

●教会学校訪問は岡山教会をご紹介いただきました。関係の皆様へ感謝します。

●吉田隆先生による十戒の学びは今回で終わりに

なります。感謝します。

●巻末に並行して用いることができる「救済史カリキュラム」を付けてあります。それぞれの教会学校の状況に合わせて、参考にしていただければ幸いです。

●今号も、IBUKIの中村未生兄、高橋乃亜兄が表紙デザインのためにご奉仕くださいました。感謝いたします。

●『教会学校教案誌』をぜひご購入下さい。バックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています。（一部品切はご容赦下さい）

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡下さい。

大垣伝道所 辻幸宏

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail:yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

### ◆教会学校自由募金のお願い

目標金額 50万円／年  
送金先 郵便振替 伊藤治郎  
00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。



---

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき

石原知弘 (園田教会牧師)

巻頭説教

小宮山裕一 (ひたちなか教会牧師)

教会学校訪問

岡山教会日曜学校教師会

絵本に心を耕されて

望月鈴子 (浜松伝道所信徒)

教会・国家・平和・人権

木下裕也 (名古屋教会牧師)

イスラエルの歴史と信仰

赤石純也 (伊丹教会牧師)

若者たちとともに

大嶋重徳 (KGK 総主事)

ゼロになる勇氣

保田広輝 (長丘教会信徒)

全生活にわたる感謝

吉田 隆 (甲子園伝道所宣教教師)

聖書黙想・説教展開例

木下裕也 (名古屋教会牧師)

長田詠喜 (新所沢伝道所宣教教師)

相馬伸郎 (名古屋岩の上教会牧師)

赤石めぐみ (伊丹教会信徒)

大西良嗣 (休職教師)

袴田清子 (灘教会信徒)

柏木貴志 (岡山教会牧師)

牧野信成 (西神教会牧師)

小宮山裕一 (ひたちなか教会牧師)

村手 淳 (山梨栄光教会牧師)

吉岡契典 (板宿教会牧師)

常石昭一 (大阪教会牧師)

分級展開例

堀 基枝 (南浦和教会信徒)

島野美佳子 (坂戸教会所属新潟伝道所信徒)

イラスト作画

表紙 中村未生 (春日井教会信徒・IBUKI)

高橋乃亜 (湘南恩寵教会信徒・IBUKI)

本文 岡野美佳 (青葉台キリスト教会信徒)

---

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上教会牧師・大会教育委員会
小宮山裕一	ひたちなか教会牧師・大会教育委員会
長田詠喜	新所沢伝道所宣教教師・大会教育委員会
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師

---

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会 『教会学校教案誌』

2016年7・8・9月号 (季刊)

第62号

2016年7月1日発行

---

発行	日本キリスト改革派教会 大会教育委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 大会教育委員会 名古屋岩の上教会 牧師 相馬伸郎
	〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
	Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)

---

Reformed Church in Japan  
Board of Education

